

郷土の人

大川平三郎



## はじめに

坂戸市立中央図書館の文章教室は、平成元年一月に開講され、前図書館長飯高節子先生のご指導のもとに、学習と実践を重ねてまいりました。

まず原稿用紙の使い方からはじまり、「書くこと・十則」が丁寧に講義され、「冬」という題で三百字の文章を書きました。

次に論文の書き方を学び、読むことも稀な論文を書き、この習作集は「文章教室」として平成二年九月に発行していただきました。

更に自分の内面を見据えた、「私の性格」「私の顔」等の私シリーズを終え、自分史を書く前の、受講生全員の共同作業として、伝記を書くことに挑戦しました。

参考資料を集めて丹念に読み、分担して文章を書き、「郷土の人 大川平三郎」をまとめました。

この作業を進めながら私共は、大川翁のすぐれた考え方、生き方に感動いたしました。

この感動を多くの皆様に分かちたい、大川翁を知っていただきたい、この本がお役に立

てるといいなと思っております。

平成四年三月、大川翁の頌徳碑が、桜影会をはじめ関係の方々のお骨折りにより、サハリン州ウゴレゴルスク市（恵須取町）から坂戸市に贈られ、市役所の庭園内に移設されております。

この碑に向かいますと、『郷土の人 大川平三郎』の文中に記された、樺太に於ける翁の菜っ葉服に草履ばきで働く姿が、髣髴としてまいります。

ここに改めて、講師飯高先生・秋松宗久桜影会々長そして図書館職員の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成六年三月三十一日

文章教室受講生一同

山崎 美保子

# 目次

1	平三郎の生いたち	一
2	平三郎の幼年時代	一〇
3	渋沢家の書生になる	二四
4	王子製紙会社に入る	二六
5	アメリカへ研究に行く	四一
6	浅野セメント会社のできるまで	六二
7	欧米に留学する	六六
8	気田の工場で努力する平三郎	八二
9	王子製紙会社を去る	九〇
10	ビール会社の合同と上海華章造紙公司	九七
11	独立した平三郎	一〇三
12	四日市製紙と中央製紙	一〇九
13	東洋汽船会社との関係	二六
14	樺太工業会社設立する	二七
15	富士製紙会社に入社する	三七
16	北海道に進出する	四三
17	朝鮮・鴨緑江沿岸に進出する	四四



	18	平三郎の關係したその他の事業	一四九
	a	電力事業	一四九
	b	金融事業	一五三
	c	製鉄事業	一五五
19		関東大震災から立ちあがる	一六一
20		富士・樺太・王子製紙会社合併する	一七〇
21		台湾に進出する	一七三
22		病から再起する	一七五
23		趣味の人 平三郎	一七九
24		平三郎と兄・弟そして妻	一八二
25		社会に奉仕した平三郎	一八八
26		平三郎の事業をふりかえつて	一九九
		大川平三郎年譜	二〇一

## 1 平三郎の生いたち

※資本主義

大金持が人やとつて商品を作り、利益を得る社会のしくみ

※財ばつ

資本家の派ばつ

徳川幕府の時代が終わり、明治へと世の中はかわりました。

新しく資本主義<sup>\*</sup>の産業社会が生まれました。産業社会は自由平等の社会ですが、英雄や豪傑がいなくなつたわけではありません。

武士の時代なら城を築き、国をおさめただろうと思われるこれらの人々は、産業社会では資本主義のリーダーとして、いろいろな事業をおこしています。中でも三井、三菱のような財ばつ<sup>\*</sup>は日本を代表するものです。

大川平三郎は、これらの大財ばつの外にあつて、かくれた一つの産業王国をつくりあげた産業社会の英雄の一人です。

平三郎は英雄の伝記によくあるように、貧しい家に生まれ育ちました。それがこのような地位をさき上げたことは、全く平三郎の努力・勉強・反省の結果です。しかし、そのようにした者みんなが、必ずしも幸運を手にするというものではありません。その中にあつて人にすぐれ、自分の運命をきりひらいたのは、平三郎の天分が人並すぐれて抜き出ていたからです。この天分は平三郎が先祖から受けついで血筋の中にあり、その境遇が変化する中でこの血筋が燃えたち、よい機会をつかむことができたからでありましょう。だから、平三郎はたとえ貧しい家に生まれ、苦勞をしたとはいっても、大金持の家に生まれたしあわせな人と同じく、祖先に深く感謝しなければならぬ理由をもっているのです。

平三郎の生まれたころ

※萬延元年 一八六〇年

※三芳野村 現在坂戸市

※天保弘化 一八四〇年頃

※擊劍 劍道

※半農奴

農奴は領主の土地を耕作し、  
また他の労働をさせられ、税金を納  
めて勝手に他の土地に移ったり、  
仕事を交えることができない農民

※郷土 土着して田畑をもつ武士

※天領 幕府が直接に支配する地

## 大川平兵衛

※嘉永安政の時代

一八四八年〜一八五九年

※天正の頃 一五八〇年前後

平三郎は萬延元年十月二十五日、埼玉県の川越市に近い三芳野村の大川家にうまれました。

天保弘化の頃から埼玉や群馬地方では、農民や商人で擊劍を学ぶものが多くいました。それは幕府の政治が三百年の平和を保ち続けてきた結果、農民の中には半農奴から抜け出し、自由な独立精神をもとうとする者が、かなり出てきたからです。もちろん、当時の農民はまだ、今のようになにも恐れないというような地位にはなっていないでしたが、人知れず努力して、武士や郷土のような精神や教養をもつ者も出てきました。そしてひまさえあれば擊劍を学びました。

もう一つは、関東諸国は天領が諸侯の領分と入りこんでおり、諸侯も大名が少なく、小名が多いのでした。天領地には、領主がいなくて代官が代って治めるといしくみでした。このように代官と小名では、自然に人民に対する警察的な力が弱いので、ばくち打ちや心のよくない豪傑などの力が強くなり、その中から強盗が生まれることも多くありました。それで村の豪族は、擊劍を学んで自分の生命財産を守ろうとしたのです。

嘉永安政の時代、埼玉県の熊谷付近の箱田村に秋山要助という劍術使いがいて、近くの農商人に擊劍を教えていました。その第一の弟子が上野村の小鮎英治郎という免許とりの名人でした。その人が二十二歳の時、三芳野村の大川家の養子になり、名を平兵衛と改めました。

大川家は天正の頃、今の三芳野村の一部落である横沼村に土着したもので、相当

※千五百坪 約五千平方米

## 平兵衛川越藩士となる

※十三石四人扶持

米、約一九五〇キログラムの給与

※禄 給与

の武士の子孫であったようです。又、現在ある横沼の大川家には千五百坪ほどの敷地がありますが、裏山には高々と茂る大樹が三百余年の昔を語るようにこんもりしているのを見ると、昔からいわれのある家系であったように思われます。

この平兵衛と大川家の家付き娘糸子の間に生まれたのが大川修三で、この伝記の主人公、大川平三郎はこの修三の第二子として生まれました。

大川平兵衛は前に書いたように秋山門下の免許とりであり、殊にその体格は立派で腕の力は人に優れ、神道無念流の極意を学びとり、たちまち名人の評判がたちました。それでその門に出入りする者は約三千人にもなったそうです。

川越藩主は、ずっと以前から平兵衛の評判をきいていて、武士にとり立てて家来にしたいと思っていました。しかし、他にも臣下があつて、それぞれの流派を張っていましたので、軽々しくこの剣士を招くわけにはいきませんでした。ある時、思いきつて平兵衛を採用するという命令を出しましたので、平兵衛は川越藩士となつて十三石四人扶持をいただくことになりました。

平兵衛がふつうの農民から武士の身分にとり立てられたということは、今の世の中ではふつうの人が相当の官職に用いられたよりも、もつと名誉なことでした。なぜならば、今の役人はその人がある期間だけその役職にあるというだけですが、武士の身分にとり立てられたということは、その家にきまつた禄<sup>\*</sup>がついて子々孫々に及ぶので、ひとつの階級をのぼつたということになるからです。十三石四人扶持の職録はたいへん軽くわずかではありますが、藩主直克が平兵衛をかわいがるので、その情深い心に感激し、君侯が外出される時は、常に身支度をして馬の側においてお

# 埼玉縣管内全圖



渋沢、尾高、大川三家とその関係

※八基村

昭和二十九年新貝村と合併して豊

里村となる

※手計村 深谷市

「新編埼玉県史 別編5」

供をしたということですが。

その平兵衛の次男として生まれた修三もまた秋山氏の門下生で、早く免許をとった優れた剣道の達人でした。

武蔵の北端で、上野との国境の辺に血洗島ちらいじまという農村がありました。それは付近の八ヶ村を合併して八基村やつもとむらといわれていたものの一部です。そこに渋沢という大百姓がいました。その付近に手計村てしばむらという農村がありましたが、その村のいわれを聞くと、何時の世のことか、どういう人のことかわからないが、手ばかりを他所から持つてきて葬ったことがあるので、手計村といったという伝説があります。この手計村に尾高と名のる豪農があつて、その一族から学者が多くできました。この頃の尾高家の主人は惇忠という人で、この人の母は渋沢家から嫁いできた人です。

大川平兵衛は、この尾高や渋沢などの豪農の家へ出張して、一日二日そこに止まつて出稽古をしたのです。

そのころ、渋沢家に美少年の長男がいました。平兵衛が豪族の間をあちらこちらと出稽古にいくとき、撃剣の道具を肩にしてついていったのですが、この少年が、後に明治時代の財界の盟主として名声をとどろかした『子爵渋沢栄一』なのです。

そのうちに尾高惇忠の妹みち子が、平兵衛の次男修三の妻として嫁いできました。当時の尾高・渋沢の両家は埼玉県の西北端一带にわたる豪族でしたが、その生業は農産物の耕作ばかりでなく、半農半商の状態で、半商という中にも藍の生産と販売が主な仕事でした。尾高惇忠は後に江戸に出て塾を開き先生となりましたが、こ

※儒学

孔子を祖とする政治・道德の教

※経義

中国の儒教の教を書いた本

の藍にちなんで『藍香』という号を用いました。栄一は幼いころ、この人から儒学<sup>\*</sup>経義を勉強しました。しかし栄一も郷里にいた頃は、着物を尻はしよりにして藍玉を丸める仕事をしました。この人は後になって、『青澗』<sup>せいえん</sup>という雅号を用いるようになりましたが、藍を大きな瓶の中に蓄えるとき、その水の色が藍色なので遠い昔を思い出して、自分の雅号としたということです。

右のように尾高・渋沢の両豪族が親戚関係を結んでいたところへ、尾高惇忠の妹が大川修三に嫁してきたので、尾高・渋沢・大川の三家がまた親族関係になりました。

そして平三郎は、修三と尾高家から来たみち子の間の第二子として、萬延元年十月二十五日に生まれたのです。

このことについて平三郎は昔を思い出し、  
「渋沢・尾高・大川などの一族が、只今世間から相当認められるようになったのは、全くこの尾高惇忠すなわち藍香先生の学問にその源があったのだと考えられるのであるから、吾々子孫はこの点について深く深く考えねばならないのである」といっています。

## 大川道場

平三郎が生まれた頃の大川道場は、たいへん発展し、その門に出入りする弟子の数は、前にのべた通り約三千人といわれたほどでした。そして内弟子として大川家に身をよせて生活し、いつか大剣士になろうと志している者が常に二、三人はいました。

※銀一分 一両の四分の一

しかし、このよい評判の中で、大川家の暮らし向きはたいへん貧しく困っており  
ました。三千人の弟子があるといっても、それは数十年にわたつての数です。門人  
たちは入門の時、銀一分を納めるだけで、あとは月謝をはらうわけではありません。  
それで収入は極めて少ないのでした。

それにもかかわらず、平兵衛はいわゆる豪傑かたぎで、弟子が困っているのを見  
ると自分のことをかえりみずに助けるといふふうでした。だからこの貧しい暮らし  
からくる一切の重荷は、平三郎の母みち子の両肩にかかってくるのでした。

平三郎の家には祖父の平兵衛、祖母の糸子がいます。平兵衛と糸子の間には長男  
栄助、次男修三の二人の他に長女ふさ子があり、修三夫妻にも、この平三郎の他に  
兄の英太郎、弟栄八郎の二人がありました。栄助だけは帰農して横沼の本家に別居  
したほか、一家八人は同じ釜の飯を食べたので、これら八人の衣服や食べ物世話  
は全部、母親みち子がひとりの力でやらねばなりません。なぜならば、その  
頃の風習と大川家の暮らし具合からは、お手伝いをおくことができなかつたからで  
す。もちろん、水汲みや走り使いは内弟子が手伝うこともありましたが、その他の  
仕事は全部みち子の手でなされました。母みち子は、三人の子供のために足袋や下  
駄の鼻緒を作りました。平三郎はこの頃の幼い心の記憶を思いうかべ、涙を流して、

「僕の六歳頃の時であったが、真夜中にふと目をさますと、薄暗い行燈の下で母  
親唯一人まだ寝もやらで吾々の下駄の鼻緒を作っているのを見て、思わず感  
謝の涙にくれ、どうしても早く大きくなってこの母を大切にせねばならぬとい  
う気が心の底からおこった。その時の鼻緒の色が今も目についている」

※帰農 剣士をやめて農業をやる

※別居

子供がなかつたので平三郎は後に  
その養子になりました



と語ったことがあります。母みち子の家はお金持であつたので、嫁入りの時には相  
当な支度をしてきましたが、その後、物を新しく買うようなことは全くありません  
でした。その中から子供に役立ちそうなものを作りかえて着せることさえしました。  
これはもちろん、肉体上の苦痛ですが、もしも家庭に春風のようなあたたかさがあつ  
たならば、みち子は笑つてその苦しい仕事もしたでしょう。しかし、この頃の大川  
家には悲しくつらいことが次々にあつたので、みち子の苦しみは一通りではありま  
せんでした。

前にもいったように祖母糸子は家付き娘で、祖父平兵衛は入婿です。家付き娘に  
ありがちなまがままな心が、祖母糸子の言葉や行いにあらわれました。そして修三  
の妹ふさ子はまた気位の高い婦人で、自然にみち子に対して小姑のような意地悪い  
言葉や行いが出てきます。祖母糸子は朝夕みち子の行動について小言をいいます。  
みち子にとっては荆の道のようにつらく悲しいことでした。その上、頼りにする夫  
修三は外出しがちで家の事には少しも関心をもたないので、みち子はどうして自分  
を慰めてよいのか方法がありませんでした。

このようにして平三郎が六、七歳の頃、母みち子は遂に我慢することができず、  
平三郎に、

「この家はいつまで我慢しても、我慢しきれない。この上は大川家を出ていく他  
ない。親戚はそれぞれ立派にやっていることだから、親戚を手伝つてまわれれば、  
一生そのようにして過ごすこともできるだろうと思うが、三人の子を連れて親戚  
に身を寄せるわけにもゆかず、子供を捨てて家出をすれば、子どもがどのような

母おもいの平三郎兄弟

つらい目に会うかもしれない。それを思えば家を出ることもできない」と悲しんで溜息をつき、ついには涙が襟をぬらす程に泣くということが何度もありました。

そして、ある日、みち子は二つ三つの風呂敷包を作り、その中に身の廻りの着物と小道具を入れて、いよいよ最後の家出の決心をしたのでした。この時、平三郎は七歳くらいでした。

母の家出を止め、

「私たちが早く大きくなって一生懸命にお母さんの手伝をして、苦しみを減らすようにしますからがまんしてください」

と何度も願って、やっと母親の家出を止まらせることができました。

これから後、兄弟は力を合わせ、これまでよりも一そう母みち子の手助けをして、少しでもその苦勞を減らそうと努力しました。

このような家庭の事情は、平三郎の人となりに大きな影響をあたえました。

がまん強く、自分にうちかかって苦しみと戦い、自分に対して厳しく、その目的のために、ひたむきに努力してへこたれず、ついに事業界の英雄といわれるようになった平三郎は、母おもいのやさしい子どもでした。



## 2 平三郎の幼年時代

幕末のころのようす

※嘉永六年 一八五三年

※開国

外国と物を買ったり売ったりして

ゆききする

※鎖国

外国と通商したり行き来をしない

※勤王 天皇に忠義をつくす

※討幕 幕府をたおす

※佐幕 幕府を助ける

※公武合体

朝廷と幕府と協力していく

※文久三年 一八六三年

※上野国 群馬県

嘉永六年六月、アメリカの軍艦が浦賀に来ました。司令官ペリーはわが国にゆききをするよう求めてきました。それで日本中の人々は開国か鎖国かで議論しました。これがもとで勤皇、討幕、佐幕、公武合体等、いろいろな運動がおこり、国中が蜂の巣をつついたように乱れてきました。

幕府はこのさわぎをしずめるため、多くの重臣たちの役目を入れかえました。文久三年、川越藩主松平直克を国がえさせて上野国前橋の藩主にしました。国がえは封建時代の大名にとつては大変なことでした。大川平兵衛一族も川越藩士でしたから、前橋に移り住むのが当然でしたが、その頃、日本の人々は幕府の政治にあき、世の中が大きく乱れそうな様子が見えていましたので、平兵衛はもう少し世の中の動きをみてからにしたいと思いました。それで孫の平三郎の癩の病気を理由に移住をおくらせました。ただ修三夫妻と二人の子どもだけは先に前橋に移りました。大川家には男女の召使がないので、内弟子の作次郎を連れ、歩いて前橋に移住したのです。そして祖父平兵衛は後れて一度は前橋に移りましたが、後に再び川越付近の三芳野に帰り、松平侯の領地で飛地であつた松山の兵士の陣屋で、剣道を教えていました。

※飛地 とび離れた領地  
叔母ふさ子

父修三の妹のふさ子は、なかなか教養のある人で功名心をもっていました。江戸へ行き、どのようないきさつかは知りませんが、熊本藩主細川家の奥女中になりました。細川家のお姫様が越前の松平春嶽公に嫁ぐとき、ふさ子は「花井」と名のり、

おつきの侍女頭かしらになりました。その後、春嶽公につき従って福井に入り、そこで橋本左内などに近づき、春嶽公と左内の連絡係をするなど政治的な役割りをはたしました。

平三郎が父母について前橋に移ったのは文久三年でした。その間に政治的変動がおこり、越前にも影響があつたかどうか知りませんが、大川家が前橋に移って間もなく、叔母がある日、駕籠に乗り二頭の馬と八人の従者をつれて、越前の福井から前橋へ帰ってきました。その時叔母は、髪を片外しにゆい、うちかけを着ていたので付近の人はおどろきの眼でみましたが、困つたのは大川家の一族でした。大川家には一人の召使もなく、家事は一切平三郎の母の肩にかかつていました。平三郎と兄の英太郎は朝暗いうちから剣道の稽古に出かけるのですが、この二人に持たせるため母は夜中におにぎりを作り、醤油をつけてこれを焼くのでした。平三郎と兄英太郎は稽古に出る前に水がめに水を一ぱい汲みため、少しでも母の苦勞を助けたいと一生けん命でした。

このような切りつめた生活をしている所へ、勝気ではでな叔母が突然帰ってきて、松平氏の大奥のはなやかな生活が忘れられず、大名の老女らしく暮らすのでした。彼女は家長ではないが、そうかといって召使でもなく、家長よりも扱いにくい存在でした。母はこの事でも苦勞が増えました。

しかし、扱いにくく変つたこの叔母も、平三郎にとっては新しい光明をもつてきたよろこばしい人でした。平三郎は前にいったように夜明に起きて、父や祖父がするように剣道を勉強することに余念がありませんでした。ある日、この叔母が平三

郎に、

「将来何をするために毎日を過ごしているのか」と質問しましたので、

「父の跡を継ぎ武芸者になりたいくて勉強している」

と答えました。しかし、江戸を見、福井を見、多くの人物とも交わり、幾つもの事変にも出会ったこの叔母は、前橋や川越のかぎられた人々よりも広い視野をもっていました。それで平三郎に、

「父のいいつけをきいて一通り武道を磨くことはよいが、これからの日本は武芸だけで世の中を渡れるものではない。大いに学問を修めなければならない。それにはまず習字にはげんで文字を上手に書くこと。その次には先生について本を読み、物の道理を知らなければならない」といったのでした。

何ごとも大名の老女のような振舞の叔母に対して多少反感をもっていた平三郎も、このすすめに対してはもつともなことを思いました。

そこで読書、習字を教える先生をさがしましたが、結局、大屋京助という寺小屋の先生について「いろは」から学習することになり、それと一緒に内弟子の一色小太郎について文武両道を学ぶことになりました。一色は武芸では達人というほどではないが、読書家なので、文武両道に通じているということのできる人でした。平三郎は一色について学び、昼間は武芸をみがき、夜は習字、読書に励みました。平三郎の教育は順調に進みました。特に平三郎は学問が好きで一生けん命にはげみましました。兄の英太郎は学問よりも武道に適し、大いに進歩しました。

## 尾高、渋沢家の若者たち

平三郎の祖母はこの様子を見て、平三郎は学問にばかりふけっつていて弱々しい子とみて、

「この子には横沼の家を継がすわけにはいかない」といつてなげきました。

このような間に上野国に一大事件がおこりました。それは平三郎の母の一門、尾高家と渋沢家の間で時勢を変え改めるために、同志を寄せ集めて兵を挙げる計画がなされたことです。尾高家には三人の男子と二人の女子がありました。長男を新五郎、次男を長七郎、三男を平九郎といました。長女みち子は尾高家に嫁ぎ、次女千代子は渋沢家に嫁ぎましたが、これが後の栄一夫人です。三人の男の子は学問にはげみ、武芸をみがいて当時の支配階級である武士の仲間たちを越えていました。例えば新五郎は文武両道に通じ、字を<sup>あざな</sup>倬忠といい、雅号を藍香といて江戸においても認められた学者でした。次男長七郎、末弟の平九郎の二人もまた相当の学問があり、中でも長七郎は武術にもすぐれ、立派な郷紳<sup>ごうしん</sup>士でした。その他に渋沢栄一のいとこに誠一郎（後の喜作）という人がいて、これまた意気さかんで、人の道を守る心の堅い人でした。

このように、渋沢、尾高、それに尾高などの数家が同地方で勢よく団結したようすは、広く平らかな水田の中に鎮守の森が高くそびえているようなものでした。

中でも渋沢栄一は、まだ西洋の国々のようすを見聞きしない前から、徳川幕府を中心として大名がこれをとりにまいて組織する封建制度は、いつかうちこわさなければならぬという考えをもっていました。それは、当時の大、小名は年貢米<sup>ねんぐま</sup>だけで



若者、立ち上がる

生活してゆくことができず、時どき、その地の豪族に対して御用金をとりたてました。はじめのうちは少し遠慮していましたが、だんだん当然のように割りあててとりたてるのでした。

栄一はこのことに強い不満をもちました。このようなわがまま勝手な政治は必ず改めなくてはならないと思い、惇忠、喜作等の親戚同志と時どき相談しました。

文久三年の冬、天下を改めようという志をもった人たちが立ち上がりました。惇忠は理想家として尊王攘夷から、栄一は眼前の悪政を正そうという実家としてでした。彼等は数回の相談の末、二、三百人の同志を集めて反乱をおこす計画をたて、六、七十人の同意を得ました。そのころ、惇忠の弟長七郎は日々にかわる世の中を観察するため、京都、大阪方面をまわり、

※土兵 その土地で集めた兵士

「世の人々が幕府の政治にあき、心が変ったとはいうものの、幕府を倒すことができるのは、組織のあるしつかりした力がなければだめだ。二、三百人の土兵<sup>\*</sup>で大勢をかえることは、とても無理である」

といって倒幕のための行動を止めさせようとなりました。それで、兵をあげて戦うか、戦わないかということで、親族同志の間で何回か議論をしいました。渋沢栄一は頑固に長七郎のいうことをきかないので、長七郎は、

「それならば、まず私を斬り殺してから戦うように」とまでいいました。それで他の同志たちも、そこまでののならと、いったん計画を中止しました。

しかし、「天知る、地知る」のたとえがあるように、隠しごとはいつまでも隠せる

※夫人千代子と娘うた子

夫人千代子は平三郎の母の妹。娘  
うた子は後の穂積陳重男爵夫人

ものではありません。いつの間にかこの陰謀がもれてしまい、いつ召し捕りの役人がやってくるかわからないありさまで、同志の人々は朝に晩にびくびくと恐れていました。

この時、渋沢栄一は夫人の千代子と娘うた子を残し、後のことは父親にたのみ従弟の渋沢誠一郎と共に郷里を出たのでした。

渋沢家では栄一が既に大望を抱いて郷里を出てしまったので、尾高家の末弟平九郎を養子として迎え、渋沢家を継がせることにしました。こうして栄一は事のなりゆきがうまくいって京都へにげましたが、まだ召し捕られる恐れがありましたので、安心して住みつく場所を見つけないたいへん苦労しました。そのうちに、徳川十五代將軍慶喜の家老平岡四郎という人の家に入りますようになりました。平岡は栄一の人柄を見こんで彼を自分の家にかくまってくれたのです。

そのうちに栄一は平岡の推薦によって、將軍慶喜にも近づくようになりました。彼は慶喜に、

「京都で何かやりたいと思っても、將軍でもなく国持大名でもなく、部下の兵隊を持たない身では何事もすることができません。ですから慶喜公の手許に諸国から兵を集めるより他方法がありません」

と申し上げました。この言葉は將軍の心を動かしたらしく、栄一は慶喜から内密の命令をうけ、岡山、広島地方をつぎつぎに訪ねました。

栄一が阪谷朗慮と親しくなり、後に渋沢・阪谷両家が交際するようになったのは、この時の面会がもとでした。栄一は後に徳川民部大輔に従って歐洲に渡ることにな

## 飯能戦争

※振武軍

この名前は惇忠がつけました

り、誠一郎は徳川慶喜の奥御祐筆おくごゆうひつとして文書を書く役人になりました。そのうちに徳川慶喜の大政奉還となり、江戸城明け渡しとなりましたが、血気さかんでたかぶりやすい関東男子はこれを見て、「ふがいない」と立ち上がり、彰義隊しょうぎたいを作りました。その頭には幕府の家来だった人もいますが、中心になったのは旗本といった侍階級ではなく、この国の将来を心配して立ち上がった郷土の人が多かったのです。これからみると旗本の無力さに比べ、平民の意気さかんなことがわかるでしょう。

洪沢栄一、尾高惇忠、洪沢平九郎などの仲間はみんな彰義隊をはじめて作った人、またはその仲間です。ですから、この彰義隊という名称は惇忠の考が基になっています。その中で誠一郎は彰義隊長の一人となって、上野の森にたてこもりましたが、彰義隊の中には彼らのよい評判や信用をねたむ者があって、ともすれば暗殺されるといふ心配もありました。それで三人はこの彰義隊をぬけ出し、別に志を同じくする者三百人といっしょに振武軍＊を作り、飯能の能任寺にたてこもりました。こうしているうちに、程なく彰義隊の敗け残りの兵たちも加わり総勢五百人となりました。そして五月二十二日官軍をむかえうちました。しかし、官軍の大勢にはかなわず、大敗して四方に散り散りになりました。

誠一郎と惇忠の二人は伊香保に逃げ、更に前橋の大川家にひそみ、惇忠は米搗男つきつきの風をし、誠一郎は剣客と名乗って隠れていました。二人とも身を隠す身でありながら、町の中を堂々と歩きまわって、誰が見ても彰義隊の落武者に見えるのです。それで大川家の人々もたいへん心配しましたが、さいわいなことに前橋藩士の多くは大川家の門弟でしたから、二人をあばいてお上に知らせようとする者はいません

でした。そのうちに誠一郎は榎本＊えののもとかまじろう鎌次郎といっしよに函館に走り、更に五稜郭にたてこもって官軍と戦ったが間もなく降伏し、後に許されました。惇忠は明治維新政府になってから召しかかえられ、勸業大属となりました。ただ一人、平九郎は隠れしので秩父地方に逃げようとしたが、入間郡黒山街道まできたとき、官軍にさえぎられ、華々しい最期をとげました。

以上述べてきた尾高・渋沢両家の政治改革運動は、大川家には直接関係ありませんでした。しかし、このような政治運動がおこった時、そのまわりには一種の不安感がおこるのは当然なことです。まして、これらの政治改革者は大川家の親類縁者です。この人たちが京都、大阪へ走ったこと、江戸で兵をおこしたこと、そして戦に負けてさんざん苦勞したことなど、大川家の人々やくらしに、多くの刺激を与えたであろうと想像されます。

母みち子の心配と悲しみ、そして偉大さ

このような公私のいさかい、家の内外の心配ごとについて最も心を痛め、悲しむ立場にあったのは、平三郎の母みち子でした。

上野の彰義隊をのがれて帰った渋沢誠一郎は、みち子の義弟渋沢栄一の従弟です。誠一郎と共に大川家の米搗男となった尾高惇忠はみち子の兄であり、上野から敗けて逃げ帰る途中、官軍の攻めにあい切腹した渋沢平九郎はみち子の弟です。

また世の中の激動をうけて前橋藩の財政は非常に苦しく、それに仕える武士の生活も、貧しくなってきました。こういう状態の中にあつて、前にのべたようないろいろな事がおこり、大川家の精神的な苦しみをのりこえ、貧乏な家計をやりくりし

※扶持米

今の月給のようなもの、金ではなく米をあたえていた

※南京米

インド・タイ・インドシナ、中国等から買った白米、粒は細長くねばり気が少ない

※樽柿

空いた酒樽に渋柿をつめ、樽の酒気で渋味をぬいたもの

貧しいくらしと平三郎の心

て、子供たちを育てた母みち子はすばらしい人といわねばなりません。

前にのべたように、その頃の前橋藩の貧しさは、只今では想像もできない程のものでした。藩の財力がないので士族に払う扶持米<sup>\*</sup>は、日本米の高いときは、ねだんの安い呂宗米、すなわち今の南京米<sup>\*</sup>でした。

士族は朝は味噌汁で南京米を食べるのですが、晩飯は南京米に大根の細いせん切りをまぜて炊いて量をふやし、これに醤油で作ったうす味の汁をかけて食べるのでした。

また士族一般のならわしのように、みち子は晩御飯の後、夜中まで下駄の鼻緒や足袋を作る仕事をしました。そして秋になると樽柿<sup>\*</sup>を作って家族に食べさせるのが常でした。士族の子どもはこの作り方を習わせられたのです。しかし、柿に使う酒樽を買うには、少なくとも一円の金が必要でしたが、大川家にはそれがなかったので、近所の心安くしている人からわずかのお金を借りるといふありさまでした。このような生活は明治の初めごろまで続きました。

平三郎は「自分もだんだん成長して後には、このような貧しいくらしをしていかなければならないのだろうか。これはほんとうに我慢のならないことだ。出来るならばいつまでも子供でいて、その難儀から遠ざかりたい」と思うようになりました。

平三郎は初めは早く大きくなって母を助け、一日も早く家計の苦勞から母を救い出したいと思つたのですが、後には何時までも子供でおりたいと思うほどに、士族の貧乏世帯のやりくりは、いやなものに思うようになりました。しかし、後に平三郎がよく働き、儉約に努力したため、多くの財産を残したのは、実に幼い時の貧し

くつらい生活が教訓となったといえましよう。『白龍魚服』のたとえ話のように平三郎の幼年時代の不幸は、幸福が不幸の衣服を着てかくれていたものであるかもしれません。

その頃、平三郎の父は前橋藩の飛地である松山町に住み、川越藩の昔からの弟子に剣道を教えていました。こうして大川家は一時、三芳野村と前橋と松山の三か所に別かれていました。そのうちに昔からの封建社会制度がゆらぎ、それが崩れようとする不安定の中で、士族の生活はますます貧しくなりました。大川家では経済上から三つの所帯を一つにまとめる必要を感じました。それには、長く住み慣れた川越藩に近い松山の陣屋の方にまず母みち子が移りました。そして、しばらくの間、大川兄弟は祖父平兵衛や叔母ふさ子といっしょに前橋にとどまっていました。

前橋の向町裏に金毘羅神社があり、それが平三郎の家に近いので、平三郎はしばしばその神社の境内で遊びました。その神社の奉納額\*に天狗の絵がありました。平三郎はこの絵に見とれている中に、知らず知らずに絵を画きたくなり、家に帰って記憶をたどって画いているうちに、自然に絵が画けるようになりました。そして自分の作った風天狗の絵を画いたりしました。これは後になって工場で図面をかきような時に役に立ち、又中年になってから、一種のスケッチ絵を画くようになる手引ともなりました。

そのうちに前橋の向町裏の屋敷を道場と共にそっくり、速見堅曹という藩士に百両で売ることができました。

※奉納額 神社に捧げた絵の額

平三郎神の力を信じる

※銀一分 昭和十一年当時二十五銭

そこでいよいよ一家は松山に移る用意をしましたが、その時、平三郎の兄英太郎が疱瘡にかかりました。この時平三郎は前橋市外にある総社村の神社に、「兄の病気が直りますように」と、二週間毎日熱心に祈りました。その祈りは子供らしい純情な心そのままでした。「どうぞ兄が病気のために死なないように助けてください。又疱瘡は伝染しやすいものですから、私がそれにかからないようにしてください。もし、万一かかるようなことがありましたら、松山へ引越してから軽くてすむようお願いします」というのでした。兄の病気は二週間で直りましたので、いよいよ松山へ移ることになりました。そこで荷物を納めるために一個の駕籠を買ったのですが、それは漆でぬった立派なものでした。そして値段が銀一分※でした。それは明治維新後の、「貧しい者と金持」「階級の上の人と下の人」との入れかわりのために生まれたひとつのあらわれです。その駕籠に赤い布で鉢巻をした兄英太郎を乗せ、その中に菓子や身の廻りの小道具を入れ、平三郎は弟の栄八郎といっしょに駕籠の両側に立って歩いていきました。

こうして途中は所々で大川家の門人の家に泊まりましたので、別段旅費という程のものも出さずに松山に着くことができました。そして松山へ着いた翌日、平三郎は疱瘡にかかりましたが、それは極めて軽くすみしました。平三郎は「自分が前に神様にお祈りして、お願いしたことに答えてくださったもの」と思い、それ以後深く神を信じるようになりました。

学問にうちこむ平三郎

松山には陣屋があり、藩の学校がありますから、武士の仲間が文武の修業をする



には一通りの設備があります。そこで平三郎はこの学校に入り、学校から帰ると撃剣を学びました。藩校では北村恕三郎という人が、特に平三郎に親切にして日本外史（頼山陽著）などを教えてくれました。平三郎の読書力は同じ友達に比べて非常に速く、どんどん進むので、先生も教える本について苦心をしたということです。その頃学校には読書、習字、算術の先生がおり、読書、習字、撃剣は普通に勉強できますが、算術については心掛けのある少数の人だけが学ぶ科目でした。しかし、平三郎は算盤もできなくてはだめだと考え、算盤のけいこをしました。その頃の普通の教え方として「十二万三千四百五十六石七斗八升九合」の数字を並べて、まずこれを二で割る方法を教えます。それには「二一天作の五」「二進の一進」というような方法で割るのです。多くの学生はただ黙って先生の教える通りにしていましたが、平三郎は、

「『二一天作の五』というのはどういふことですか」と質問します。すると先生はこれに答えて、

「これは割言葉というもので、この言葉を利用してやってみれば、算術は自然にできるものである」というだけで他に説明はありません。そこで平三郎はよくよく考えて、「かりに十の数があるとすれば、十の中に二が五つある。それが『二一天作の五』というのだろう。それならば……」といって他の数にも自分で割言葉を工夫するなど、先生の一通りの言葉に満足しないで、深くその訳を知って進もうとしました。そのため先生の間でも、

「この子は幼いのに、たいへん賢いから、のちには大きな進歩をするだろう」と

期待されていました。

松山の陣屋に移ってからも、大川家の経済状態はもとと同じく貧しく困っており、ました。家のやりくりの重荷は一方的に母みち子にかかっています。それについて平三郎は、前橋の家屋敷を売って得た百両のお金を、叔母ふさ子がひとり占めして、大川家の財政の助けとして差し出さないのが、どうしても正しくないと思いました。そこで平三郎はある日、叔母に対してこのことを言いました。

「前橋の家を売った百両の金を、叔母さんが全部使うのはよくないと思います。あれは父上に半分差し出して、叔母さんが半分使うというならばまだよいが、全部使ってしまうのはよろしくありません」といいました。これに対して叔母は、「お前のいうことは一応はもつともであるが、お前の父は大川という家があって、藩公からのお手当があります。そして沢山の弟子がいます。それから相当の収入もある。でも私はお嫁にも行かず、頼るべき何物もなくこのまま生涯を送らねばならない。そこで私が前橋の家を売った金を貰っているわけですから、お前のいう通りにはいきません」といいました。平三郎は叔母ふさ子によって世間を見る眼も開けたほどですから、その人を尊敬していません。しかし母みち子が一家を支える負担が余りにも重いもので、その苦しみを思うあまりいったのですが、後になつて叔母の言葉を「もつともなことだ」として承知したのでした。

明治三年ころのこと、大川家の名譽をあげた祖父平兵衛が、脹満※にかかつて床についてしまいました。祖父平兵衛が平三郎を可愛がるのは一通りでなく、幼い時から平三郎を抱いて寝たほどでした。平三郎は兄栄太郎といっしょに、脹満※に特に効

## 祖父平兵衛の死

※明治三年 一八七〇年

※脹満

腹に水やガスがたまつて腹がふく  
れる病氣

※明治四年 一八七一年

き目があるという薬をさがしました。そしてある薬屋に「畳屋薬」という特効薬を  
みつけ、平兵衛に飲ませましたが、結局、この病氣がもとで平兵衛は明治四年九月  
に亡くなりました。七十歳でした。

何年かたつて平兵衛の弟子たちが相談して、立派な墓碑を三芳野村の邸の前の墓  
地に建てました。

平三郎は貧しいくらしの中に育ち、不幸な母みち子に対する思いやりから、孝行  
息子としてふるいたちました。貧しい家の子どもとしてよく働き、儉約をするとい  
う性質や心を自然のうちに作りあげました。昔の人の言葉に「物を大切にしてい  
にせず、よく仕事をして得た富はなくならない。又人の行なうべき道徳は沢山ある  
けれども、これは孝行のおこないの中から生まれるのである」とありますが、これ  
は平三郎のおこないそのものでした。

### 3 渋沢家の書生になる

平三郎上京する

※明治五年 一八七二年

※明治五年、平三郎が十三歳の時、いよいよ東京へ出るようになりました。当時、一人の少年を東京へ出すということは、旅費や当座の小遣いだけでも容易ではありません。貧乏士族の次男が、どのようにして東京へ出て勉強することができたか、これについて平三郎は次のように語っています。

不思議なことだから覚えていますが、松山に富蔵という博徒の親方がいて、その人が私の家に稽古に来ていました。彼の長女でおりんという娘が私の家の手伝いに来ていましたが、ある時、おりんが私に向かって、

「坊さん、これから銭湯に行くのをやめて、油屋の家に行ってお風呂に入れてもらっていらつしゃい」といいました。それから私はおりんに連れられて油屋へお湯をもらいに行きましたが、ある時、入浴して出て来ようとすると、ガタンピシンという大騒ぎがして、家の中でけんかが始まっています。

油屋の主人の深沢嘉兵衛は土地の物持ちで、顔役でもありました。いつも田舎には珍しい絹の着物を着て、袂の中にお金をたくさん入れて大通りを歩くので有名でした。困っている人がいれば、惜し気もなくその札ピラをまいて助けるという、一風変わった人物で、土地の人気者でした。

その妻は、平素は実におとなしいよい人なのですが、酒ぐせが悪く、その時も茶わんなどを投げ付けるなどの大騒ぎで、娘さんがおかあさんを押さえ付けています。私はそこを通り抜けなければならぬので困りはてたのですが、しかたが

ないから、見ないようにしてかけぬけて行きました。

店を出ると、油買いの客が七、八人いて、おもしろそうにその騒ぎを見ています。私は、

「そんなに大勢で見ているは、この家で困ります。見世物ではありませんからあっちへ行つて下さい」と言つて、追い払つてしまいました。これが私の出世のもとになったのです。

後で、おりんの話でわかつたのですが、油屋の家では私のことを大層感心して、  
「普通の子供なら、どうなるかと皆と一緒に見ているくらいだろう。それを気の毒そうにその場をかけぬけて行つて、外で大勢たかつて見ていた人たちを、家の者が気の毒だからといってどかせるといふことは、普通の人ではできないことです」と言つていたそうです。

そのうちに、油屋の主人が私の家にやつて来て、母に向かつて、

「あなたの家の二番目の坊さんは、学校の出来も良いし、なかなかえらい坊さんだ。そのうちにきつと出世をなさるに違いありません。ここに置いて剣術をやらせておいてはいけません。なんとかして東京へおやりになつたらいいでしょう。渋沢さんはお宅の親類ですから、渋沢さんに頼んで東京の学校に入れて修業をさせることにしてやつたらいいのではありませんか。見込みがあると思いますから、一切の費用を私が出します。とにかく私に任せて下さい」と言いました。とてもいい話でした。

今の世の中で子供を育てるには、そんなことをしなければやっていけないだろ

う。それでは深沢さんの言う通りにしようと言いました。深沢さんは、いろいろ親切に用意を整え、羽織や帽子などもあつらえてくれ、小遣いまでくれて、私を東京へ出してくれました。それから渋沢さんの書生になったわけです。

明治五年十一月一日、平三郎が十三歳の時のことでした。

政治でも実業でも、ずばぬけて成功する人の立身出世のはじまりには、似たようなことがよくあります。フランスのクレジー・リオネー銀行の創立者は、少年の時、ある銀行家を訪ねて就職のことを相談しましたが断られました。やむなく少年は銀行家の家を退出し道路に出たところ、一本の古い針が落ちていたので、これを拾ってハンカチでぬぐい、ポケットに入れました。銀行家は窓からこれを見て彼を呼び戻し、その注意深さとまじめな態度を見ぬいて、採用することになりました。これがフランス第一流の銀行家の立身の基です。

また、太閤秀吉が羽柴筑前守だったころ、狩の途中、のどがかわいたので、ある寺院に立ち寄った時、寺の小姓が最初はぬるま湯をさし出しましたが、次は熱いお茶でしたので、細かいところまで行き届いたこの心づかいに感心して、近侍に取り立てました。これが後に、徳川家康を相手に天下をかけて大戦争をした石田三成であることは、誰でも知っていることです。

このようなことは、人に採用されたいという下心からではなく、その生まれつきの性格から自然にじみ出て、それが心ある人に理解されたのだと言えるでしょう。

さて、平三郎が渋沢家の世話になった時、すでに埼玉県深谷の医者の子である福岡健良と尾高惇忠の長男の五郎が、書生としておりました。五郎も平三郎も栄一に

とつては甥にあたります。栄一は大川家の稼業が思わしくないのを知りましたが、平三郎が志を立てて東京へ出て来たのを喜んで、平三郎をとてかわいがりました。この時、平三郎はどのような学校で、どのようなことを勉強しようかと、いろいろ研究した結果、本郷の壬申義塾という学校に入学しました。

当時のことを平三郎は次のように言っています。

「洪沢の家から学校へ通うのにも、朝早く起きて、まず自分のふとんをあげ、それから三人で台所から主人の居間、客座敷から玄関までをすっかり掃き出して、雑巾がけをしてから学校へ行きました」

平三郎が壬申義塾にいたのは、わずかの期間でした。ハーンというドイツ人教師が、政府の管轄する大学南校の教師に転任となり、平三郎も一緒に大学南校に通学することになったからです。この大学南校は、最初、幕府が藩書取調所というものを開設し、後に開成学校と名を変え、さらに大学南校、そして帝国大学と名づけられたもので、現在の東京大学の前身です。

このようにして平三郎は、大学南校でドイツ語の会話、地理、歴史などを勉強し、ドイツ語を話せるようになりました。その間に英語を独習して、これも相当のものを読むようになりました。



#### 4 王子製紙会社に入る

##### 王子製紙創立

※明治六年 一八七三年  
※抄紙会社 製紙会社のこと

明治六年二月、王子に抄紙会社<sup>※</sup>ができることになり、平三郎は開成学校をやめて、この会社へ入ることになりました。これは栄一の世話によるものです。

当時の産業は農業を中心としたもので、一般の産業はとも幼稚なものでしたが、いちはやく合資会社を作つて西洋式の機械をとり入れ、大量生産を行うことは、非常にめずらしいことであり、不思議なことでした。このことは、明治六年三月の『新聞雑誌』という新聞が、次のように書いているのを見ても想像することができます。

府下商人三井治郎右衛門、島田八郎右衛門、小野善右衛門ら協議して抄紙会社を創立し、すでに官許を得、十萬円の株金を募り、米英に注文して器械を買入れ、洋人四人を雇い、大いに諸紙を製造し、上は諸官省府県の使用に供し、下はあまねく世人の需要にあて、内は国恩万分の一を報し、外は洋人をして売紙の利を独占することあたはざらしめんとせり。この社開業に至りては、実に国益の大なるものにして、世用便利これに過ぐる者なからん。

以上のように王子製紙会社は三井、小野組と島田組三家の合同組織で、初めはわずかの資本金でしたが、その後次第に増加していきました。

その頃は会社組織の方法などを知るものは、誰ひとりいないといつてもいいくらいでした。渋沢栄一は「会社弁」という小さな本を書いて、合本組織<sup>ごうほん</sup>の方法を人々に教えたのですが、これは栄一がフランスにいた時の研究の発表であると思われま

す。王子製紙は実はこの本を参考にして組織されたものです。

この会社が創立して、外国からいよいよ機械が到着したとき、意外にも経済界に変動が起こりました。第一に島田組が倒産し、続いて小野組もまた倒産したので、この会社の株券は、大部分を三井で引き受けなければならぬようになりました。

このとき栄一は大蔵省三等出仕で少輔の職務についていましたが、この事業の発案者でしたので、両家倒産の後始末にはかなり苦心をしました。そして整理後は社長と同じくらいの実権を握って、すべてのことをさしずしました。

このころ栄一の家には、高い官職の人や各界を代表するような人がかなりひんぱんにやって来ました。平三郎は書生として玄関でその取次ぎをするたびに、小さい胸がおどりました。自分も大いにがんばって、これらの人々のように立派に出世をしたい。工部卿きょうにでもなってみたいものだと考えました。このときの少年の頭脳には、えらい人というのは工部卿と写ったのでした。

けれども運命は、彼のこの大きな希望を投げすてなければならぬとさせていました。平三郎の家は、このころ貧乏のどん底に落ちていたのです。母のみち子は家計の苦しきのあまり、ときどき妹の洪沢夫人のところへ来て、少しずつ借金をしていました。それがたび重なると、さすがの洪沢夫人も良い顔ばかりを見せられなくなり、時には平三郎に対し父親の働きのないことを非難することもありました。平三郎はこれを聞いてひどく腹を立て、これは学校どころではない。また、むやみに未来の工部卿などを夢見てはいけません。私は今、早く職業を持って給料を取り、

※工部卿 工部省の長官

※明治八年 一八七五年

父母の苦しみを減らしてあげなければならぬ、と決心しました。

ちょうどこのとき、王子製紙が出来て、渋沢栄一がこの会社のめんどうを見ている最中でしたので、平三郎は自分から進んで栄一に頼んで、入社させてもらったのです。これが平三郎が実業界へ入った理由であり、はじまりでした。のちに実業界の重要な地位にたつ平三郎ですが、もとは、このようにただ父母を助けようとする少年の一筋の思いつめた心から出発したのです。それは明治八年三月二日で、平三郎が十六歳のときでした。こうして平三郎は会社員となりましたが、わずかな給料を封とうに入れたまま母親に渡し、その中から小遣いをもらっていました。

平三郎は王子製紙で絵図面を引いたり、機械の据付けを手伝うというような仕事をしていました。図をひきながら平三郎は、外国の技師が紙を漉く仕事をするのを見て、この仕事では紙を漉く仕事が一番大切なようだ。最も大切な仕事をする人が最も重要な人となるわけだから、私もいつまでも図工などやってはいけなないと決心して、自分から機械を始末する職工になりました。この決心は平三郎のこれからの運命をきりひろくもとなりました。

当時の日本は、ヨーロッパやアメリカの機械装置について、まだ何もわかっていませんでした。そこへ巨大で複雑な機械を据え付け、それをただ二人の外国人によって運転させようとするのは無理な計画でした。「新聞雑誌」の記事には、外国人技師四人に来てもらったと書いてありますが、実際はチースメンというイギリスの機械技師と、ポットムリーというアメリカの紙すき技師の二人が来ただけです。その上、機械技師は人格も立派な大学出の機械専門の人でしたが、製紙業についての知識は

まったく無く、紙漉き技師は原料製造の専門家でしたが、紙漉き技術の経験は少しもなかったのです。こういうことで、機械は次々と故障が出るばかりでした。やっとなし紙が出たと思うとすぐに切れてしまい、今日は少しいいと翌日また切れるという調子で、どうしても完全な製品が出来ません。今からは想像もつかないおそまつな状態でした。

この会社には他にも高給をとる日本人もいましたが、工場で職工を指揮して働くという実際の仕事に詳しい人はいません。洪沢栄一は平三郎を呼び寄せて、

「王子製紙にも実に困ったものだ。どうしたらよいか見当がつかない」とため息をもらすことがたびたびありました。

ヨーロッパやアメリカでも製紙工場は、機械、原料、紙漉きとそれぞれ専門の技師がいて、一人でその二つなり三つなりを兼ねる人はいないのです。王子製紙は最もむずかしく、最も大切な紙漉き技師がいまま、何も知らないたくさんの日本人が寄り集まって紙を漉くことを始めたのですから、うまくいくわけがありません。

栄一のなげきを聞いて平三郎は非常に心をふるいたたせ、全力をつくして自分が王子製紙の難問を解決する人物にならなければならぬと考えました。そこで平三郎は朝から晩まで機械のそばに立って、一生けん命に機械の運転を研究した結果、自然に機械のことにくわしくなり、とうとう平三郎が手をふれば機械が動き、紙が出てくるといような状態になりました。そして平三郎がいなければ事業が進まないため、工場のすべての人が平三郎を信頼するようになりました。

この信頼は、平三郎の毎日の苦心と努力の結果でした。平三郎は朝は五時に出勤

し、毎夜九時か十時ころまで工場にいて、機械の運転や故障などに心をくばりました。このため、かかりつけの医者が患者の心身の隅から隅までくわしくわかるように、機械通となったのです。また、当時は大量生産といっても、今日の大量生産のように、一日二十四時間、一年三百六十五日、同一の品物を作るというわけではありません。新聞の紙も漉けば、雑誌や本の紙も漉き、鳥の子の模造紙まで漉くのです。そしてその紙の種類によって、ベルトとベルトの間に毛布をはさみ、毛布の厚さによって車輪の回転を調節するのですが、その紙質や厚さの変わるたびごとに、この毛布の厚さを全部変えなければなりません。ですから、多くの人がそのたびに大さわぎをするわけですが、平三郎は紙質によって、これに使用する毛布の厚薄の度を一つの表にして手帳につけておき、たちまちのうちにこれをととのえました。今から見ると、それほど驚くことではありませんが、当時平三郎がこの方式を立てたというので、すべての人に調法がられたのです。

平三郎はこのように努力して、できるかぎりの注意をはらって機械を動かす練習を積んだばかりでなく、科学的にもとづけることを怠りませんでした。当時、石炭を焚いて蒸気を起こし機械を動かすのに、ただ十馬力とか二十馬力とよんでいるばかりで、この計算がどのようにして行われるか、知る人がいませんでした。外国の技師の命令で、何も考えずに火力や蒸気をコントロールするだけです。平三郎はこれらの動力の原理を知るには、物理学を基礎からくわしく知ることが必要だと感じました。

あるとき、小石川の水道橋を通過して小川町の方に帰宅する途中、古本屋で何気な

※ガノー

一八〇四―一八七、フランスの物理

学者

※窮理書 物理書のこと

しに本をあさっていると、英語に翻訳された『ガノーの窮理書』があったので、買って来て読んでみると、とてもむずかしい本でした。けれども平三郎は、昔の洋学者は字引さえなかつたので、まず字引を自分で作ってから外国の本を読んだということだ。今はその字引がある時代なのだから、ひとりで勉強できないことはないと思つて、字引を相手にこの書を読んでいったところ、大気の圧力などの説明があつて、一ページ読むごとに知識がひろがっていくのが自分でもわかり、まるで新しい別の世界が平三郎の目の前にひらけてきました。

どうしても窮理学をもっと深く広く知りたいと思い、山崎、上村などという友人と一緒に、『クワッケンボスの物理学』を研究しました。彼らは大学南校を出ていまして、平三郎よりもよく英語を知っていて、大変、勉強になりました。このころは友人を杜宅に呼んで、熱心に読書研究をしました。平三郎は、

「『ガノーの窮理書』は私の科学についての知識の手引書です」と言つて、これをいつまでも大切に保存していました。

平三郎は食事の間も何をする間も手から本をはなさないほど、熱心に知識を吸収し続けました。そして平三郎が特別に深い感銘を覚えたのは、スペインサーの、「あらゆる科学の知識を総合して、その上に新哲学を樹立しなければならない」、という説のようでした。実業家となつて事業を行うときは、その事業に関係ある、あらゆる知識を身につけ、その損得の影響しあう方法を比べてみて、科学にもとづいた、しっかりした基礎の上に、事業をおこななければならない、という考え方を持つようになつたからです。

※スペインサー

一八二〇―一九〇三、英・哲学者

社会学者

## 東京での大川家の生活

多くの人は、本を読んで吸収するだけですが、得た知識をただちに生活の実際に活用しようとしたところが、平三郎を特にすぐれた事業家にしたのです。これこそ、いきなりの学問と言えてでしょう。

こうして平三郎は王子製紙に入って、めざましい活やくの第一歩をしるしましたが、東京へ移って来た大川家の生活は相変わらず楽ではなく、渋沢夫人は神田小川町神保小路の渋沢家の近くに住まわせ、平三郎の母に渋沢家の子ども達の養育を手伝わせて、大川家の生計を維持させました。のちに渋沢家が兜町に移った時は、八丁堀北島町へ大川家を移らせ、その後また渋沢家が深川福住町に移った時は、大川家もやしき内に移り住まわせました。このことから察すると、渋沢夫人と平三郎の母みち子とは、よほど仲良しの姉妹であったと思われます。そして渋沢夫人千代子は明治十五年、流行の病気で急に死んでしまいました。その病気の間、みち子はずっと夫人をだきかかえ、伝染のことなど少しも気にかげずに看病したことも、二人がどんなに親密であったかを示しています。

当時、王子製紙には増田安久（後に坪内と改姓）という支配人心得の人がいて、その上に谷敬三という人がいました。谷は元、幕府時代の金座役人谷八左衛門の養子で、金銀分析の技能を備える化学者でした。彼を王子製紙会社の技師として入社したの推せんしたのは、三井の益田孝です。益田は渋沢栄一から王子製紙創立の時に、「技師としていい人がほしい」と相談を受けたので、前に造幣局にいた時の知り合いで英語も多少話せ、数学も得意で人物も確かな谷を推せんしたのでした。

※明治十五年 一八八二年

※金座

金貨のちゅう造を取り扱った役所

平三郎は入社したとはいふものの、十六歳の小僧にすぎませんので、増田副支配人の家に住まわせてもらい、会社へ通っていました。この時の生活状態について、平三郎は次のように語っています。

当時谷さんは東京にいて、増田さんは王子の海老屋という料理屋の別荘にいました。そこに私が行ってその家の玄関番になり、食べさせてもらって、大将が出かける時にお供をして会社に行き、帰ってくる時には、また一緒に帰って来るということで、毎日、忙しかった。私はどうしても早く出世しなければならぬ身の上なので、どうしたらそうなるだろうかとしきりに考えました。まず主人にいつは感心な者だと思わせるのが第一だと思いました。それには、朝早く起きて女中代わりに働く。女中が台所で働いているうちに主人が起きたら、寝室に飛び込んでいって夜具ふとんを片付け、主人が顔を洗いにいったら机の上まで掃除をして、ちゃんと用の足りるようにしなければならぬと考えて、一生けん命やりました。そして夕方帰って来るとランプのしんを切り、掃除をし、木の葉が落ちていゝ庭の掃除をしました。

初めて行った時は、もう日暮れ近かったのですが、庭に木の葉が散っていたので、縁側を掃除してから庭をきれいに掃いて、雨戸をしめました。その時、主人の増田さんは、

「感心な小僧だ」と言って、とてもほめてくれました。それから、私は相変わらず居候のつとめを完全に果たしていました。

ある休日、渋沢さんの家に行くと、渋沢さんの書生たちに、



「オイ大川君、君はなかなかよく働くに見えるね。王子製紙では「大した小僧が来た。ああいう小僧が会社にいることは会社の誇りだ」と皆がほめていよう」と言われて大変でした。その時の私の得意さはおわかりでしょう。

王子製紙は飛鳥山あすかやまの下に建設され、飛鳥山から見れば、それははるか下の方に見えました。けれども飛鳥山近くの暗闇坂には、ときどき追いはぎが出るというほどの状態でもありました。

ある日曜日、平三郎が渋谷家を訪問すると来客の一人が平三郎に、「飛鳥山の下に高い四角なものが出来たが、あれは何ですか」とききました。そこで平三郎は「あれは煙突というもので、その下で石炭を燃やすと、長い筒の中を煙が上昇しながら吸い出されるので、石炭がよく燃え、蒸気ができて機械が動くのです」と説明したので、みんな感心したというほど泰平で、のどかな社会状況でした。

こうして平三郎は増田副支配人の家から会社へ通っていました。増田は支配人の谷と意見が合わず、言い争いをした結果、退社しましたので、その後、平三郎は谷氏の家においてもらうことになりました。この人は性質がおだやかで間違いがなく、平三郎に対しても非常に厚意をもって、なにかと世話をしてくれました。

平三郎は全力をつくしてつとめに励んだので、工場第一の仕事通となり、平三郎がいなくては工場経営が出来ないほどになりました。そのかわり日夜の苦勞のあまり、指やてのひらにけがをして、長く入院したこともありましたが、平三郎の力は外国技師よりも上であるということが、みんなに知られるようになりまし

## 王子製紙の事業

※明治初年 一八六八年

※明治十年 一八七七年

た。平三郎は谷支配人に、

「多額の月給を取る外国人技師の必要がないから、やめてもらってはどうか」と意見を言いました。この意見はすぐにききいれられ、外国人技師を断るようになりました。

数年の後、平三郎が社命によってアメリカへ行った時、その技師はわざわざ平三郎のところに来て、自分の家に立ち寄りてくれと言うので訪問してみると、彼の地位は工場の夜警にすぎなかったのを見て、驚いたそうです。当時は外国人と言えば、みんな有能と信じ、高い給料を払ったものですが、これもそういう一つの例にすぎません。

こうして名義はともかく、平三郎が工場の責任を持つことになりました。

それでは、王子製紙会社の事業はどのような状態であったか、次に平三郎の談話を見てみましょう。

※明治の初年に政府が地券状を発行しましたが、この地券状は、日本全体の土地一筆ごとに一枚交付されるので、この紙ばかりを約二年間、専門にやりました。

※明治十年に西南戦争が起きて、紙が盛んに売れるようになりました。それまでは、王子で出来る紙を全国の新聞社へふりまいても使いきれませんでした。当時の新聞といえますと、東京には「読売」と「東京日日」、「東京絵入」などで、ほんとうにわずかなものでした。

当時、紙の原料はポロ布ばかりでしたが、出来上がった紙は、むっくりした軟かい紙でした。普通はポロを蒸して洗って、これをもう一度蒸してやったもので

## 古河市兵衛

すから、ずい分手数がかかり、ねだんは高くなりました。

そのうちに私はうまいことを考えました。それは貯蔵場を建設し、一度煮たボロを二週間ほどここに積んでおくのです。すると発酵してかびがはえてきます。これを機械にかけますと軟かいのでドンドンこなれます。機械運転の馬力もいらず、たくさん作ることが出来るこの方法は非常によいと評判になりました。注文も大幅にふえ大変な人気になりました。とうとう私は印刷局からも呼ばれ、出かけて行って印刷上の相談までうけるようになり、大いに名をあげました。

西南戦争が終わると、政府は財政整理のために紙幣を発行しなければならなくなりました。その紙幣用紙を一カ月間で作れるかということ、私はすぐに引き受けました。そして千葉地方はじめ大阪の堺まで人をやって、漁網の古物を買って占め、これを苛性ソーダで煮とがして、紙に漉きあげました。これは非常に丈夫で結構だということ、ずい分高い値で御用を達したのです。そういう特別のこととがなくなると会社はすぐ困るという不安な状態でした。

平三郎の見聞談の中に、おもしろい一事があります。

小野組の番頭に古河市兵衛という人がいました。この人はチョンマゲで、洋服は着ず、袴もはかず、いつでも着流しで羽織を着て、朝に夕に洪沢さんのところへ来ました。洪沢さんが兜町の第一銀行の裏に屋敷をもっていた当時のことで、いよいよ小野組がつぶれるという時になって、古河さんは洪沢さんの家に来て、二晩も三晩もいろいろ相談をして朝になって帰って行く。その時の有様は、古河

さんは石につまずいて倒れはしないかと心配するほど心身ともに疲れていました。とにかくあれだけの大家がつぶれるのですから、その大番頭としてはもったもな話です。

いよいよ小野組をやめるについて、古河さんは足尾の銅山をやることになりましたが、自分一人の力ではやっていけませんので、渋沢さんにもたすけをかりてやるということになりました。それはまったく渋沢さんに協力を頼んできたに相違ありません。ところが着手してからわずかに掘り進んだところで、一大鉾脈に掘り当たったのです。それから隆々として古河家は発展しました。

日本橋室町の古河の店では、大将自身、大火鉢の前に座って、相変わらずたいへん親切な商売ぶり、人がよろこんでついてきました。感心したのは、手形はすではやり出していたにもかかわらず、買物一切現金払いにして安く買うというやり方でした。

その後、明治二十四、五年のころでしようか、中国へ向けて銅が盛んに売れました。通貨を造るのに、みな日本の銅を使ったからです。

こうして足尾銅山の事業は非常にもうかるので、古河さんは渋沢さんの三万円の株を五十万円で譲ってもらいたいと言いました。すると渋沢さんは、

「おれはわずか三万円しか出してない。確かに十何年たっているけれども、五十万円というのは余りにも多いから、受け取ることとはできない」とことわりました。ところが古河さんは古河さんで、何と言っても承知をしない。

「本当に五十万円上げてよいから上げるのです。私は無茶なことをするのは

ありません。立派に計算が合うので差し上げるのですから、どうぞご承知を願いたい」と言い、いろいろと押問答の末に、とうとう承認することになりました。そこで渋沢さんは初めて五十万円の財産家になりました。

渋沢さんはいつも私に、「人間は物質的にさっぱりしていなければいけない」というはなしをなさいました。なるほどと感心して聞いていたのですが、だんだん世の中の事を経験するに従って、その説の通りばかりでもないと思ひ、ある時、渋沢さんにこう言いました。「物質的にさっぱりしていなければいけないというお説はごもつともと思ひ、一生けん命守っております。また、男子が世の中で働くには、力だけではとても独立的な人間にはなれない。努力して儉約をして貯蓄をし、資本と力と両方でやらなければならぬというお話も肝に銘じ、自分も守りまた皆々にも機会あるごとに強く話して聞かせております。要するに、これは程度問題として考えなければなりません。大変失礼なことですが、一例として申し上げることをお許し下さい。どんなに偉大で、世間がよろこんでついてこようという渋沢さんご自身でも、渋沢さんの財力というものを除いてみたら、現在ほどあなたのお説を感心して聞くでしょうか、疑問です」と言う

と、「それもそうだよ」と言つて、それ以上弁解なさりませんでした。

## 5 アメリカへ研究に行く

渋沢栄一のことば

※武断派

薩摩と長州の、武力によって政治を行なおうとする人達

※上表

意見をしるした文書を一番えらい人にさし出すこと

平三郎の先祖からの知りあい、恩人でもある渋沢栄一は、明治政府に求められて、大蔵省三等出仕として、財政局で働いていました。けれども明治六年、薩長の武断派の説を支持する、大蔵省事務総裁、大隈重信と意見があわず、二人とも上表して仕事をやめました。

その上表文が公表されると、朝廷、民間ともに、初めて日本の財政方針を心配するようになったくらい、この上表文は有名なものでした。

そのころ平三郎は渋沢家に住んでいたのですが、那珂通世という漢学者が、たびたび渋沢栄一を訪問するので、何事だろうと不思議に思っていたところ、数日たつて、渋沢栄一が辞職をし、上表文が公表されたので、初めてそのわけがわかりました。

渋沢栄一が、政治にたいする意見を、那珂通世にくわしく話し、通世がそれを文章にしたものに、さらに栄一が書き加えたり直したりして、あの名文ができたのです。

このような理由で仕事をやめた渋沢栄一は、三井、小野の二人と話しあって、第一銀行を設立し、その頭取になりました。少しひまな時間ができて、平三郎と将棋をさすようなこともありましたが、その時平三郎に、働くことと儉約することを教えました。そして、

「三千円貯金をすれば、一人前の人間といえる。これを越えれば、案外楽に貯ち

アメリカ行きを希望

※明治十二年 一八七九年

くができるものだ」と話しました。平三郎は、一生けん命にその一言を守りました。

※明治十二年、アメリカの前の大統領、グラント將軍が日本に來ました。国中で歓迎し、明治天皇は、將軍を浜離宮にまねいて、いろいろお話をされるなど、明治の歴史の中で、もつとも記憶に残る年でした。

平三郎にとつてもこの年は、もつとも記憶に残る年になりました。会社の命令でアメリカへ行くことになり、このことから、太陽が昇るいきおいで、運命がひらけてきたからです。

— そのころ平三郎は、王子製紙にとつてなくてはならない大切な人となり、工場の管理の力は、外国技師よりすぐれていることが、証明されていました。けれども、それだけで満足しない平三郎は、会社全体の経営の方法、経済のくふうなどについて、重役に、次のような意見書を出しました。

### 建 白 書

明治十二年大川翁が二十歳の時に書かれた建白書であります。

明治八年三月、王子製紙に絵図引として採用され、ついで職工となり、創立当時の抄紙会社で僅か四年の実地の経験を積んだ青年が書いたもので、巧妙精緻、理路整然、会社の運命を双肩に担わんとする気魄のこもった雄渾な文章であります。

翁の人柄の全貌を知る上に役立つ最良のものと信じ、ここにご紹介する次第であ

ります。

### 建白書

製紙會社ハ創業以來既ニ五閱年ニ垂ントス。退イテ既往ノ景況ヲ顧ルニ百般ノ艱難ヨリ來レルノ慘狀ハ實ニ之ヲ今日ニ云フニ忍ビザルモノ有リト雖モ、幸ニ社員諸君ガ誠實ニシテ其任ニ熱心ナルニ依テ、工事ノ進歩ハ殊ニ迅速ナルヲ得、今ヤ其營業全體ハ素ヨリ意ニ満足スベキニアラズト雖モ、又故サラニ痛慮ヲ要スベキニアラザルノ場合ニ進メリ。然レドモ、是ノ如キハ唯々ニ損ヲ蒙ラザルニ安ンズル者ニシテ、決シテ製紙會社ガ其銳意ヲ怠ルベキノ場合ニアラズ。製紙會社ハ宜シク正理ニ應ジテ満足スベキノ利益ヲ得ン事ヲ忘ルベカラズ。

### 正理に應じて満足すべき利益の保證

正理ニ應ジテ満足スベキノ利益トハ何ゾヤ、其資本ヲ以テ世間平均ノ利益ヲ得ルヲ云ウ。而シテ茲ニ世間平均ノ利益ト云フモ、世間ノ事業ハ極メテ多難錯雜ナルモノタルガ、故ニ、其利益ノ平均ハ素ヨリ甚ダ知ルニ艱難ニシテ、工業最モ然リトス。看ヨ同一ノ資本ヲ用ユルモ、其使用者ノ智愚ト、其事業ノ幸不幸トニ因ツテ、其得ル所ノ利益モ亦甚異ナルニアラズヤ、故ニ有名ナル經濟學者スミス氏ハ、世間普通ノ利息相場ヲ以テ資本ノ平均ノ利益ト定メタリ。此ノ事ノ當否ニ於テハ、吾輩今其



如何ヲ知ラズト雖モ、假リニ其見ヲ以テ至當ナリトスルモ、現今製紙會社ガ得ルノ利益ハ未ダ決シテ充分ノ點ニ達シタリト云フベカラズ。

今ヤ世間ノ利息相場ハ査シテ其何程ナルカヲ知ラズト雖モ、大概一割二三分ヲ以テ當トスルガ如シ。此ハ是レ貨幣ノ取引ニシテ、然ル事ナレバ製紙會社ノ如ク全ク其資本ヲ擲ツテ機械ヲ購フニ當ツテハ、又其業ノ危險ニ向テ幾分カ餘量ノ利益ヲ要求セザル可ラズ。假ニ之ヲ資本ノ八割分ト見做サバ製紙會社ガ正理トシテ満足スベキノ利益ハ其資本ノ二割即金六萬圓ナリトス。(資本ヲ三拾萬圓ト算ス)

#### 利益僅少の原因は技術の未熟練

此ノ如ク論ジ來ツテ、能ク製紙會社現時ノ景況ヲ見レバ、其利益ハ未ダ資本ノ一割ダニモ達スルヲ得ズ。實ニ嘆息ノ他ナキヲ奈如センヤ。而シテ仔細ニ其利益ノ多カラザル原因ヲ探索スレバ、主トシテ其熟練ニ達セザルニ據ラザルハナシ。熟練増加スレバ品位ハ進ミ、製出ハ増ス。實ニ熟練ハ工業家ガ利益ノ元素ト云フモ可ナリ。然リ而シテ此ノ如ク熟練ハ會社ニ於テ甚シキ關係アルガ故ニ、能ク其既往ノ景況ト現時ノ事情トヲ考察シ、創業以來進歩ノ速力ヲ以テ比シ來ルトキハ、現時ノ速力ハ更ニ甚ダ遅々タルヲ見ル。蓋シ當初ニアリテハ其業ノ段階甚ダ卑キヨリ其進歩モ殊ニ平易ナル事ヲ得タルモ、今ヤ然ラズ。漸クニシテ既ニ簡單ノ科業ヲ踏ミ來リ更ニ艱難ノ蘊奧ヲ求メントスルノ場合ナレバ、其進歩ノ遅々ナル敢テ怪シムニ足ラズ。然ト雖モ、如何セン吾輩ハ實ニ目的トシテ進行スベキノ標準アル事ナク、恰モ暗夜

ヲ行クニ燈ナキガ如キノ狀ニシテ、殆ンド爲スベキノ術ニ盡キタリト云フベシ。是ニ於テカ銳意其策ヲ研究スルモ唯其蘊奧ヲ海外ニ求ムルニ他ナキヲ知ル。依テ今左ニ彼ニ就キテ問フベキノ事項ト其理由トヲ列記スト雖モ、唯其概略ニシテ一モ據ルベキ所ナク、僅ニ全貌ノ一斑ト云フベキ而已。

### 破布の性質に關する研究

破布ハ製紙上最モ緊用ナル者ニシテ、其性質ニ於テハ頗ル研究ヲ要スベキアリ。其大略ヲ論ズルニ同一ノ木綿ナルモ、其產地ニ因テ性質ニ異ナル所アルヨリシテ、甚シキ差異ヲ製紙上ニ生ズル事アルガ如シ。外國ノ製紙ヲ見ルニ其質滑澤緻密ニシテ且光輝アリ、之ヲ水ニ投ズルモ、乾燥ノ後日本洋紙ノ如ク、甚シク其様ヲ變ズル事ナク、之ヲ火ニ燃スニ其殘燼亦大ニ日本洋紙ニ異ナル所アリ。此段ノ事項ハ一ニ含有スル混和物ノ成跡ナルベシト信ズルト雖モ、又少シク破布ノ性質ニ關スルヤノ疑ナキニアラズ。是事ニ附キテハ是迄随分注意ヲ加ヘタレドモ、未ダ必然ノ理由ヲ確知スルコト能ワズ。若シ一旦其理由ト醫方トヲ確知セバ大ナル改良ヲ和製洋紙ニ起スベシ。

其他破布ノ製法ニ關シテハ、藥品ノ用量、汽壓ノ量、煮ルベキ時間等ニ於ル如ク、皆齊シク緊用ニシテ研究ヲ用スベキ事多シト雖モ、其細密ノ事實を詳記スルニ於テハ、徒ラニ文章ノ冗長ニ涉ラン事ヲ恐レ、余ハ唯緊切ノ事項ヲ摘シテ之ヲ記セント企テタルナリ。

## 麻布使用に關する研究

元來製紙ハ多ク麻ヲ用ユルニ隨ツテ、抄造モ益便利ニシテ品位モ愈々精良トナルハ疑ナキモ、現時日本ノ景況ニテハ麻布ハ供給僅少ニシテ、實ニ百分ノ五以上ヲ用ユル事ハ到底爲シ能ハザル事ナリ。故ニ今外國ニテハ果シテ幾何ノ麻ヲ用ヒザルヲ得ザルカヲ探聞シテ、若シ多量ヲ用ヒザレバ到底抄造ニ難儀ナリトノコトヲ確知セバ、麻ニ代用スベキ料ヲ見出ス事ヲ研究セザル可ラズ。現今外國ニテハ抄造ヲ便利ニスルノ目的ニ向ツテハ、一ニ麻ノミヲ用ユルカ、或ハ既ニ麻ニ代用スベキモノヲ用ユルカ是又切ニ探知セン事ヲ要スルナリ。

## 破布代用纖維の研究

破布市場ノ景況ハ、今如何ノ場合ニ及ビタルヤ、各製紙書及新紙等ニ就キテハ考察スルニ、其供給ハ常ニ需要ニ及バザルニ苦シムヨリ製紙場ニ於テモ競ツテ破布ニ代用スベキノ纖維ヲ得ルニ汲々タルハ、最下等ノ紙ニテハ木材ヨリ製シタル纖維ヲ混用シタル物多キニテ知ルベシ。而シテ其場合ノ茲ニ至レル以上ハ破布市場ノ有様ガ極メテ微忽ノ點ニ行届キ居ルハ決シテ疑ヲ容ル可ラズ。日本ニテハ現時破布ノ供給充分ナレバ敢テ是ヲ憂ウルニ足ラザルガ如シト雖モ年月ヲ經ルニ從ヒ自然供給ニ向ツテ眉ヲ蹙ムルニ至ルベキハ實ニ明々タルモノアリ。然ラバ則チ外國ニテ今日ノ場合ニ進ミタル經營ト、現時取引ノ方法トヲ探知シテ之ヲ營業ノ模型トナスコトハ

非常ノ利益ニアラズシテ何ゾヤ。

### 製紙原料としての藁

此ノ如ク果シテ破布ノ供給ニ向テ痛慮ヲ要スベシトセバ、又一ニ破布ニ代用スベキ纖維製法ヲ學バザル可ラズ。

今ヤ外國ニテ製紙元質ノ破布ニ次グモノハ藁ナリトス。幸ニシテ日本モ又藁ノ供給ニ乏シカラザレバ破布ノ代用品ニシテ先第一ニ望ヲ屬スベキモノハ蓋シ藁ナリ。之ヲ紙ニ製シテ破布ヨリ低價ナルコトヲ得バ破布ノ拂底ニ至ルヲ待タズシテ之ヲ今日ニ用ユルモ利ナリ。況ンヤ藁ハ價格ノ如何ニ係ハラズ、自然其硅素ヲ含保スルヨリ著シク製紙ノ質ヲ滑澤緻密ト爲スベキノ望アルニ於テオヤ。

### 破布買入手續と運搬

破布ハ元來其價甚ダ高カラズ、而シテ其容積甚大ナルガ爲ニ頗ル運搬ニ不便ナルヨリ沿海ノ地ニアラザルヨリ之ヲ遠地ニ求ムル事難シ、是實ニ吾輩ノ憾トナス所ナリ。

然レドモ外國ノ如ク供給ノ不足ニ至リタル場合ニテハ其運搬ノ法ニ於テモ亦必ラズ盡シタル所アリテ遠地ノ破布ト雖モ敢テ之ヲ棄テザルハ論ヲ俟タズ、然ラバ其運輸及荷造ノ方法等ハ必ラズ見テ以テ益スベキアルヲ信ズ。破布買入ノ手順ハ如何ナ

ル方法ヲ以テ之ヲ至便利ナリトスルカ是又探聞ヲ遂ゲザル可ラズ。

### 機械の調和は製造の眼目

機械ノ調和ハ製造ノ大眼目ニシテ苟モ其調和ニ於テ缺クル所アレバ精良ノ紙品出ス事能ハズ。機械固有ノ製法ヲ爲ス事能ハズ。而シテ其機械ノ調和宜シキヲ得ル事ハ單ニ人々ノ熟練ニアリテ唯久シキ習慣ノ成課ナレバ口以テ云フ可ラズ、筆以テ書ス可ラズ、是故ニ余ハ今茲ニ於テ唯一言スルヲ得ルノ他ナシ。曰ク機械ノ調和ハ製造ノ眼目ナリ。調和整ハザレバ精良ノ紙品ヲ出スコトナク、機械固有ノ製出ヲ爲ス事能ハズト、此ノ如キガ故ニ機械ノ調和ヲ得ルヲ學ブ事ハ切ニ緊要ナル事ニシテ余ガ銳意シテ其蘊奧ヲ得ンコトヲ望ム所ナリ。製出ノ増加ハ工場ガ富營ノ進歩ナリト云フベク、製出ノ分量ハ工場ガ幸不幸ノ分量ヲ表スルト云フモ可ナリ。余ハ常ニ外國ノ製紙所ノ製出高トノ割合ヲ比較シ來ル毎ニ未ダ會テ嘆ゼズンバアラズ、同一ノ機械ヲ以テ彼ハ果シテ何故ニ夥多ノ製出ヲ爲シ得ルカ何故ニ製紙會社ハ充分ノ製出ヲ爲シ能ハザルカハ專ラ同一ノ種類ヲ製造スルト各種ノ製造ヲ爲サザルヲ得ザルノ利害ニ在ル可シト雖モ又他ニ百般ノ事項アルナカラシヤ。若シ能ク審カニ彼我ノ事情ニ通ジ得テ其得失ヲ辯ジ短ヲ棄テ長ヲ採リ攷々怠ル事ナキ時ハ彼ト同一ノ製出ヲ爲スニ至ルベキハ理ノ最モ見易キ者ナリ。

其他機械ノ調査ニ係リテハ汽力ノ儉約法元質ヲ儉約スルノ術又或ハ抄紙具ノ使用法等一モ緊切ニシテ研究ヲ要セザルモノナシト雖モ事多端ニシテ一々之ヲ託スルニ

暇アラザルヲ憾ム。

### 製出増加と品位改良

製出ノ量ヲ増加スルノ法ト品位ヲ改良スルノ法トハ共ニ工業ノ基礎ニシテ實ニ第一ニ研究ヲ要スベキ事ナリトス。製紙會社ハ此法ニ於テハ兩ナガラ未ダ完全ヲ得ル事能ハズ。就中製出高ノ増加ハ追日進歩ノ勢アリテ其速力ハ之ヲ前日ニ比スレバ極メテ迅速ナルヲ覺ユレバ到底左マデニ痛慮ヲ要セズシテ外國ト同一ノ場合ニ進ムベキヲ信ズルナリ。然レドモ同一ノ費用ヲ以テ同一ノ製出ヲ爲スニ非ザレバ共ニ力ヲ較フルニ足ラザルガ故ニ彼ハ如何ナル經濟ニ依ツテ幾何ノ費用ヲ要シ以テ幾何ノ製出ヲ爲スカヲ研究セザル可ラズ。尙是ノミナラバ自今製紙會社ガ製出スルノ量ハマダ機械固有ノ量ニ達セザル事遠ケレバ今ニシテ外國ガ實行スルノ道ヲ探知シ得テ以テ一日モ早く同一ノ費用ヲ以テ同一ノ製出ヲ爲スコトヲ企望セザル可ケンヤ、品位ノ一事ニ在ツテハ是迄社員諸君ガ頭腦ヲ煩シタル幾何ナルヲ知ラズ其試験ノ爲ニ會社ガ費シタル金額モ實ニ少詳ノ事ニアラザルベシ。此成果ニシテ品位ノ改良ニ趣キタルハ亦甚ダ尠カラズト雖モ未ダ會テ著シキ成果ヲ顯ハシタル事ナシ。

### 日本紙固有の害

日本ノ製紙ハ其質軟柔ニシテ密ナラズ聊カ光澤ヲ帶ルモ僅ニ水分ヲ受ル時ハ其光

澤ヲ失イテ表面忽チ粗造トナル。之ヲ印刷スルニ細末ノ纖維板面ニ粘附シテ容易ニ活字ヲ填塞スルノ害アリ、加之黒汁ノ透過ヲ許シテ酷シク印刷物ノ體裁ヲ汚ス、此般ノ害ハ更ニ洋紙ニ見ル事ナク日本紙固有ノ害アリトス。而シテ日本紙ト外國紙トガ此處迄其性質ヲ異ニスルハ理由果シテ何レノ點ニアリヤ或ハ破布ノ性質ヲ異ニスルト云イ或ハ混合物ノ効ナリト論ズ。

若シ夫レ是ヲシテ破布ノ性質ナラシメンニハ又如何トモス可ラズ。然ト雖モ余ヲ以テ之ヲ見ル時ハ幾分カ破布ノ性質ニ關スルモ多クハ混合物ノ効ナルガ如シ。

新聞社印刷所ヲ論ゼズ、總テ紙ヲ以テ生計ヲ營ム者ハ其紙ヲ外國ニ仰グヨリハ日本ニ求ムルノ廉價ナルト便利ナルトニ依リテ頻リニ日本紙ヲ用ヒント渴望スルモ前述ノ害アルヨリシテ深ク望ヲ失ツテ只管改良ヲ待ツノ狀アリ。

是ノ故ニ社員諸君ガ頭腦ヲ盡クシテ其方法ヲ研究スル、敢テ怠ラズト雖モ未ダ其目的ヲ達スルヲ得ズ、若シ彼我實地ノ景況ヲ目撃シテ審カニ其原因ト醫防法トヲ知り、能ク宿弊ヲ去リ和製洋紙ノ名譽ヲ回復スルニ至ラバ其需用モ又大ニ増加スルハ決シテ疑ヲ容ル可ラズ。

### 製紙と藥品

製紙ヲシテ黒汁ノ透過ト濕氣ノ侵入トヲ受ケシメザルハ一ニ藥品ノ効驗ナリ。而シテ其同一ノ藥品ガ異様ノ現象ヲ現ハスコトハ實驗ニ富ミタル化學士ト雖モ頗ル其理ニ苦シムコトハ往々製紙等ニ見ル所ナレバ探聞ノ任ヲ擔ツテ外國ニ行ク人ハ專ラ

精神ヲ此點ニ凝ラシ、敬禮ヲ厚ウシテ人ノ教示ヲ受ケルコトヲ勤メ傍ラ化學ノ大意ヲ理解シテ日常藥品ノ試験ニ従事シ精勵倦マズ以テ其目途ヲ達スルニ孜々タラザレバ決シテ其目途ヲ誤ラザルヲ保チ難キナリ。

### 工場に使用すべき人員の多寡

工場ニ使用スベキ人員ハ可成丈僅少ナルヲ望ム。人員多ケレバ畜ニ夥多ノ給料ヲ要スルノミナラズ、併セテ又百般ノ雜費ヲ増シ大ナル不經濟トナルコトナリ。是故ニ工場ノ機構ハ可成丈人員ヲ減ズル様爲サザル可ラズ工事ノ都合ヲ謀ツテ適切ノ方法ヲ設クル時ハ五人ニテ爲スベキヲ四人ニテ辨ジ、十人ニテ爲スベキノ業ヲ七人ニテ辨ジ得ルノ方法ナカラシヤ。外國ニテハ如何ナル約束ヲ以テ職工ヲ使役スルヤ、如何ナル方便ヲ用イテ職工ノ勞働ヲ獎勵スルヤ、又職工ハ其方法ニ向ツテ如何ナル感想ヲ懷クヤ否ヤヲ探知スルハ又缺ク可ラザル事ナリトス。

### 給料支拂の方法

同一ノ出金ヲ以テ可成丈多量ノ返報ヲ要スルハ經濟ノ大主義ナリ。而シテ其同一ノ出金ニテ返報ニ大差異アルハ給料ヨリ甚シキ者ハアル可ラズ。給料支拂ノ方法ヲ失スレバ決シテ其應分ノ返報ヲ得ル事能ハザルナリ。而シテ其支拂法ハ孰レガ最利ナルカハ、識者ノ研究ヲ待ツコトニシテ容易ニ此ヲ知り難キナリ。確ト支給ノ金額



ヲ定ムレバ職工ノ氣風自ラ儉安ニ流ルルノ弊アリ。製出ノ高二依テ給料ヲ支給スレバ工事自カラ粗鄙ニ流ルルノ害アリ。畢竟給料ハ僅ニ職工ノ感想ニ依テ返報ニ差異ヲ生ズルニ過ギザレバ外國ノ製紙所ガ支給ノ方法ト職工ガ勞働ノ景況ヲ見テ其長短ヲ取捨シタランニハ大ニ我ニ利ナルノ道ヲ得ル事アラン。

### 學士ヨング氏の說

學士ヨング氏曰ク財産ノ魔術ハ能ク砂ヲシテ金ニ化セシムト旨アル哉言矣。蓋シ物一度ビ人ノ所有トナル時ハ其擁護琢磨ニ據リテ遂ニ著シク變化ヲ爲スヲ云フナリ。サレバ給料支拂法ノ完全ニシテ其當ヲ見ルガ如クナルヲ望事云フモ唯職工ガ其工場ヲ見ル事已レガ財産ヲ見ルガ如クナルヲ望ムニ過ギズ。聞ク處ニ據レバ外國ノ製紙所ハ賞與金給法甚ダ完全ニシテ其職工ハ競ウテ多量ノ製出ヲ爲サントス。余ハ未ダ其如何ヲ知ラズト雖モ實驗ニ富ミタル外國製紙所ガ爲ス處ハ必ズ大ニ據ルベキ所アルベキヲ因信シ一日モ早く其方法ト成果トヲ實驗セン事ヲ望ムナリ。

現今米國等ニテハ製紙需要供給之割合ハ如何ノ景況ヲ市場ニ顯ハスカハ詳カニ之ヲ知ラズト雖モ、製紙新聞等ニ就キテ考察スルニ市場ハ常ニ供給多キニ過ギ製紙家ノ技師ノ進歩シテ製出ノ増加スルニ係ラズ、品位ノ益精良ニ趣クニ係ハラズ、頗ル其實捌ニ困難スルノ如シ。著シキニ至ツテ製紙家中條約ヲ設ケテ互ニ夜業ヲ廢シテ市場ノ過積ヲ減ゼント論ゼシ者アルヲ聞ケリ。此ノ如キガ故ニ製紙ノ原價ト賣價ノ差異ハ益僅少ノ場合ニ陥リタルハ疑ウベキニアラズ、而シテ其困難ノ多キニ從ツテ

製造ノ經濟ヨリ賣捌ノ方法ニ至ル迄悉ク能ク綿密ノ點ニ達シタルベキハ又疑ヲ容ル可ラズ。

製紙會社ガ現時營業ノ體裁ハ素ヨリ之ヲ幸福ナリト云フベキニアラズト雖モ、未ダ必シモ斷ジテ之ヲ不幸ナリト云フベカラザルナリ。製紙會社ガ充分ノ利益ヲ得ルニ由ナキハ需用ノ僅ニ依ルニアラズシテ製出ノ不充分ナルニ據ルナレバ、漸々技術ノ進歩ニ應ジテ其事情ノ安樂ニ達スベキハ論ヲ俟タズ。余ヲ以テ此ヲ云ハシムレバ製紙會社ハ不幸ナリト云ハズシテ寧ロコレヲ幸福ノ位置ニアリト云フベシ。

既ニ斯ノ如ク幸福ニ進ムベキノ位置ナル製紙會社ニシテカノ艱難ナル米國ノ製紙所ガ研究セル方法ヲ解得シタランニハ其幸福ハ蓋シ余アルニ至ランハ決シテ疑ヲ置クベキニアラザルヲ信ス。

この文章は、名文とは言えませんが、二十歳の青年が、明治十二年に書いたことを考えれば、力のこもった、なかなか立派なものでした。

この意見書は、渋沢栄一と谷敬三支配人が見たのですが、平三郎は自分がアメリカへ行きたいのだろうということを二人は見ぬきました。

ある日渋沢栄一が、平三郎にむかって、

「外国へ行っても、英語ができなければ、何の役にも立たないのではないか」といいました。平三郎はすぐにはつきりと、

「たいていの用事は英語でできるつもりです」と答えました。

そこで渋沢栄一は、三井物産の益田孝あての手紙を平三郎に渡し、返事をもらっ

アメリカ行きと平三郎の決意

て来るようにといたしました。平三郎は益田をたずね、手紙を渡したところ、益田は、手紙を読んだあとで、平三郎に、しきりに英語で話かけるのでした。

平三郎も英語で返事をしましたが、これは渋沢栄一が、平三郎の英語の能力の試験を頼んだもので、益田から、

「平三郎は、自分の用事くらいは十分話せるようです。外国へ行けば急に語学力が発達するでしょうから、心配いりません」と返事がきました。

こうして平三郎は、会社の命令でアメリカへ行くことができました。この時平三郎の上席に、社員が三、四人もいましたが、一人だけアメリカへ行くことになったのですから、平三郎は大得意でした。

明治十二年七月、いよいよ平三郎が発することになり、職工が七、八十人、新橋駅まで見送りにきて、発車の汽笛が鳴ると同時に「大川さん、ばんざい」といきました。けれども社員は一人も見送りに来ませんでした。

平三郎は、汽船ゲーリックの中で、この日の新橋駅のことを考えました。遠いアメリカへ行くのに、社員が一人も見送ってくれなかったことを、不愉快に感じました。

「これは、多くの社員の中から、自分一人が選ばれてアメリカへ行くことを、社員達が不満に思い、申し合わせてしたことだろうが、これからは、私も気をつけなければいけない」と、平三郎は思いました。

「外国へ行って見聞きしてきたことの中には、秘伝や、人に秘密にしたいことも



「社会科新高等地図」  
東京書籍 昭和60年2月10日発行

地図「ニューヨーク・ホリヨーク」

多くあり、帰国した時、それを他の人には何も教えないという人が多いが、私はそんなやり方をしてはいけない。いろいろなことを覚えて帰っても、一人で得意がっていたのでは、まわりの人が動かないばかりか、仕事のじゃまをされるようなことになるかもしれない。力でおさえるのではなく、自分をすてて、彼らの頭の上から親切のかたまりを注ぐことで、帰国するまでには、彼らを降伏させなければならぬ」と、航海の間に平三郎は決意しました。

そして、アメリカで見たたり聞いたりを、かくすことなく、すべてを手紙にして本社へ知らせました。その頃は、二週間に一度しか船が出ませんので、重役をはじめ社員は、これを読むだけで大変でした。

こうして平三郎はアメリカで一年半を過ごし、帰国したのですが、出発の時とはちがいで、大勢の社員が新橋駅に集まり、よろこんで平三郎をむかえました。

平三郎のおもい出話によると、このころのアメリカ人は、明るくて円まんな人が多く、日本人にも、

「遠くからよく来てくれた」と仕事をくれるほど親切でした。平三郎も、最初から仕事をもらうことができました。

平三郎が始めに入った工場は、ホリヨークのビーブ・エンド・ホルブロックで、この工場には小野寺政敬や村田一郎など、名前の知られている人が多くいました。

次にホワイティング・ペーパー・カンパニー、続いてホリヨークのコロツケル・マニファクチャー・カンパニーで、八ヶ月ほど働きましたが、社長コロツケルは本当の紳士で、親切に世話をしてくれました。平三郎は、日本では工場の管理までし

たほどの力がありませんでしたので、この工場の八ヶ月の実験で、たくさんのお金を身につけました。

次に平三郎はコロケルの世話で、コネティカット州のモンテギュー・ペーパーカンパニーに入りました。社長マーシャルは、グラウンドパルプの製造に有効な、発明専売権を持っていて、麦わらを使って、さかんに紙を製造し、新案を取り入れることで有名な人でした。

何年かたって、平三郎が二度目にマーシャルをたずねた時は、マーシャル・トレインというコーンポレーで、紙すき各部の速度を自由に調整できる機械のデザイン中で、平三郎はこの設計に参加することができました。

こういう人の下で勉強できたことは、ふしぎなくらい幸運なことでした。マーシャル氏について数か月勉強したことが、平三郎の将来を支配したほど、やくに立ったのです。

ここで、わらを原料とした紙の製造法を習い、これを日本へみやげとしてもち帰りましたが、この時平三郎は、わらは毎年できる、かぎりない物で、ねだんも安いので、これまでのボロを原料とする方法の、いろいろな心配ごとがなくなる。今後はこれを事業の基礎にすればいいと思いいきました。

その上、マーシャルの率直、簡易、勤勉の社長ぶりは、その後の平三郎に、大変役立ったのです。

こうしてそれぞれの会社で学んだことで、王子製紙への平三郎の十分なおみやげができましたので、平三郎は日本へ帰って、早く新しい方針を實行したいと思った

のですが、もっと経験を加えようと、今回はニューヨークのシヤワンガムに雇われました。この会社は麦わらだけを原料としているのがめずらしかったのです。この会社の工場経営について、平三郎は次のように話しています。

この会社は、わらばかりを近くの農家から買い集めて白紙を製造している、アメリカ中でたった一つの工場でした。そこで感心したのは、事務員が一人もいないことでした。社長とトランターという技師長の老人が一人いて、その息子が紙の仕上げ方をうけていました。原料がわらばかりで、いつも同じ紙をすいているので、それで大じょうぶなのです。

その社長が、

「私もここには家がなく、工場の近くに下宿をしているのだが、あなたも来なさい」とさそってくれましたので、そこに一ヶ月ばかりいたのですが、ここで感心したのは、近所の百姓がわらを馬車につんで運んでくると、社長の部屋の窓の下にすえつけている大きな計量器に馬車ごとのり、社長が自分の腰かけている所にある分銅で目方をはかり、オーライと声をかけるのです。こうして原料の受け入れは社長が全部やり、工場は老人が一人で見まわっていました。ちょうど暑いころでしたが、村中にふる場がなく、水車のあまり水で、はじめてあった社長と背中を流しあったのですから、どれほど質素だったか想像がつくでしょう。

平三郎のアメリカからの報告書に、渋沢栄一は忙しい中、何十回も返事をしていきます。それは二十一歳の平三郎に、第一銀行の便せんに細かい字で、本社のようす

を、くわしく説明しているのです。まるで社長が重役の出先へ、会社の報告をするようなものでした。渋沢栄一は、平三郎の年齢をわすれて、手紙を書いていたのではないかと思えるくらいです。

その手紙の中には平三郎の家のようすなどもありました。

「手紙のたびに向上しているのが見られ、大変よろこんでいます。しかし、すべて、うぬぼれは害になりますので、これからも一生けん命がんばってください」と父親のような、愛情にみちた言葉もたくさん書かれていました。

また、平三郎がけがをしたという知らせには、

「大変心配をしていますが、だい分よくなつたようで安心しました。工場で働く人にとって、けがはさけられないことですが、よくよく注意をして下さい、あなたは左手でかくことも上手ですので、これからも便りをくれるそうで安心しました。会社への手紙は、いつものように右手で書かれたようで、全快をよろこんでいます」と、こまかく注意して、平三郎の手紙を読んでいたことが想像できる文章もあります。

また、

「支配人への報告ぜんぶ読んでいます。事務上のことは、その時、その時各課長へも見せています。いつも、あなたの手紙が、社員の勉強する心を高めるいいチャンスになると思っています」という文章もあります。

平三郎は支配人の谷敬三にも便りをおこたらず、王子製紙が原料のボロの買入れで、神戸の外国人の製紙会社とあらそうのは、決して得にならないのでやめた方が

## 時計のくさりの話

よいという忠告から、製紙に使うのりや薬品のことまで、気づいたことは何でも報告しました。

谷支配人もくわしい返事を書いています、彼もまた、平三郎がアメリカから帰つてからの活やくを、強くのぞんでいたことが想像できます。

こうして一年四か月、アメリカの会社、工場で研究をかさねて、平三郎は帰国しました。アメリカにいる間、平三郎はホテルには泊まらず、下宿ばかりでした。そして日本からの手当はほとんど全部貯金をしていましたので、日本に帰るときは、千円を持っていたのです。

### 余録 平三郎の時計のくさりの話

ニューヨークに、日本人がよく泊まるミセス・ダットリーと言う下宿屋がありました。ダウンタウン八丁目、当時そこに住んでいた人達はみんな、百万円貯金をするといつてがんばっていました。中でも、福井信という生糸屋が、

「ぼくは百万円もうけなくては帰れない」といつていましたが、そうもうかるものではなかったようです。

めだつていたのは森村豊という、背の低い赤ら顔の人で、六丁目に店を出して、じつによく働き、ひまさえあれば見本品をかついで、ボストンやポルティモア、フィラデルフィアなどを歩いていました。メキメキ店が大きくなるのを見て、平三郎はわれわれの仲間で成功するのは彼と自分だけだと決めていました。予想どうり森村豊は大成功をして、海外貿易の功績によって、兄の森村市左衛門は男爵になりました。



た。けれども豊は死んでしまいました。

のちに、私が大きな時計のくさりをぶらさげているのを見た森村開作男爵が、

「なぜそんな時代おくれの物をぶらさげているのですか」というので、

「ニューヨークであなたの伯父さんから買ったものです。私はこの一本のくさり  
で一生を送ろうと思って、ぶらさげているのです」というと、

「家の宝にするから、ぜひゆずって下さい」というので、これをきれいにみが  
いて、持たせてやろうと思っています。

と、語ったということです。

## 6 浅野セメント会社のできるまで

叔母千代子夫人をたずねる

※明治十三年 一八八〇年

平三郎は、明治十三年十月、リオデジャネイロ号で帰国しました。王子製紙からは、昨年背をむけた社員まで、横浜へむかえに来ました。二十一歳の平三郎は、誠意の前には敵がないことがよくわかり、ひそかに満足していました。

平三郎は、新橋駅につくと、すぐに人力車を走らせて、渋沢栄一の家をたずねました。そして、したい書生がするように、玄関からは入らず、台所の書生の出入口から入りました。書生達に、彼らに別れて以来の話をしていると、叔母の千代子夫人からよばれました。奥座敷へ入ると、用心深い平三郎は、次の間にすわって深く頭をさげ、

「出発の時、研究科目を書いておいたものを、アメリカで一とおり研究学習してきましたので、もう大丈夫です。ご安心ください」といつてさがりました。

まもなく、老女こよが書生部屋に来て、平三郎にむかつてにつこり笑い、

「たいへんなことになりました。奥様が、平三郎をお客様として、今夜から八丈紬のふとんで、奥の八畳間にやすませなさいといわれました」と告げました。

これを聞いて平三郎は、これまでの、さまざまなことを思い出しました。

千代子夫人は、平三郎にむかつていつも、

「お前の父は無能の剣術つかいで、一家をつぶしてしまった。お前はしっかりしなくてはならない」と、大勢の女中の前でさえ何度もくり返し言うので、平三郎は悲しく、いかりを感じたこともありました。何とかして、この叔母にほめられた

いと、幼いころからずっと思っていたのです。

アメリカから帰って来ても、細心の注意をして、まず一番に洪沢家へ来たのですが、それがこのようにいい結果になって、うれしいと同時に、胸にせまるものを感じていました。

平三郎は母に会い、一年半で貯金した千円を渡しました。平三郎が東京へ出たあとも、大川家の家計は苦しく、毎月少しずつ、洪沢家から借金をしていました。わずかのお金ですが、母はこのことをとても苦にしていましたので、おもいがけなく平三郎が千円もの大金をくれたので、海で船に泳ぎついたように安心したのです。母は涙を流してよろこび、すぐにその中から洪沢家へ借金を返しました。

こうして平三郎は、もとのように王子製紙の社員として、早朝から夜おそくまで努力をし、アメリカで学んだことを生かして、新しいことをはじめたり、改良を重ねたり、いそがしく働きました。

半年ほど過ぎたころ、洪沢栄一から呼ばれました。そして栄一から、思いがけなくよい話を聞かされたのです。

浅野総一郎が、深川にある政府のセメント工場が安くはらいさげられるので、自分は今商売の方をやり、工場は平三郎にたのみたいというのです。

平三郎は、

「セメント事業は非常におもしろいと思いますが、私には資本の工夫ができません」と答えますと、洪沢栄一は、

「浅野の案では彼が三分の二、平三郎が三分の一の割合で合同したいというのが、平三郎の分は私が出そう。万一事業が失敗するようなことがあっても、平三郎の損は私が負担しよう。失敗した時は、資金を返す心配をしなくてもよい」というのです。

平三郎はこの思いがけない提案に、天にもものほる喜びで、すぐに承知しました。このような大金を二十二歳の一書生に与えるのは、平三郎が身うちでかわいかったこともありますが、たとえ父子でも、金銭的信用がなくてはできないことです。これは平三郎がアメリカで苦心して貯金をし、それを母におくったことから、彼を信賴できると思つたのでしよう。

それでは浅野はどうして平三郎を選んだかといいますと、次のように、おもしろい事情がありました。

平三郎はアメリカへ行く前は王子製紙の職工でしたが、彼はただ機械を運転するばかりでなく、石炭はこび入れのかんともしていました。石炭は浅野商店から買入れていたのですが、そのころ商人の間では、約束の品質より悪くしたり、目方をごまかすために、石炭に水をかけたり、立ちあい人にごちそうをするなど、悪い習慣がありました。

この少年職工は、きびしくていねいに監督をし、しかも意地悪く出入りの商人の悪事をあばいたりせず、やさしく説得して悪い習慣のものをなくすというやり方でしたので、店主の浅野総一郎は大変信用して、この人なら大丈夫だと思ふようになりました。そして、セメント会社を、共同経営したいと思ふほどの、信賴になつて



地図「柵木県葛生町」

きたのです。

そのころ国の事業を民間にはらいさげるといことが、多く行われていました。佐渡の鉱山は三菱に、兵庫の造船所は山崎正蔵にというぐあいでしたので、セメント工場を管理する、工部省工作局長、大鳥圭介の名によって許可され、わずかな資金で個人の会社のものになりました。後に株式会社にあらため、渋沢、安田、徳川などの有力な株主も加わって、今では巨大な会社になったのです。

このようにして平三郎は、浅野セメントとかかわりを持ったのですが、その組織は、かりに浅野工場といって、浅野が総長で平三郎は副長という資格でした。

平三郎は新しい別の世界へ入ったわけですが、これまで王子製紙では、工場作業を中心としたものばかりで、商売にはあまり関係がありませんでした。けれどもセメント商売は、原料の仕入れから、工場の整理、商品の販売まで、仕事のはんいが広く複雑で、ここではじめて平三郎は商売というものを、実際にくわしく知る機会を得たのです。

当時のセメント工場は、現在のものに比べれば規模が小さく、機械もかん単なものばかりでした。原料は石灰が主で、これに粘土を加えたもので、両方を一定量の水でよくかきまわした後、水分をしぼり取り、これをどろのような物にして、れんがの形に切っかわかし、大きなかまどにつめて焼き上げたものを、細かい粉にしたのがセメントです。

その原料のうち粘土は、工場前の大川の底から、どろ土をすくい上げたものです。石灰は柵木県葛生方面から来たもので、大量に集めるのは、なかなかむつかしいこ

※葛生町

栃木県南西部に位置し、セメント工業の町として知られる。昭和30年に常盤氷室2村と合併。秩父古生層の石灰岩に恵まれ、石灰・セメントなどの土石工業が盛ん。江戸時代後期には渡良瀬川の水運を利用して江戸に送られ、野州石灰の名で八王子石灰と対抗していた。

## 石灰の買いつけ

とでした。そこで石灰を買い取る約束をするため、浅野は平三郎といっしょに葛生に出かけることにしました。平三郎に商売のしかたを教えるのが目的だったようですが、

「相手を見て商売をしなくてはいけないので、洋服などぜったい着て行つてはいけません」といって、二人とも着ながしに尻はしよりで、わらじをはいて出かけました。

葛生地方には数十の石灰屋があつて、自分でかまどを作り、山から石灰石をはこんできて、まきで焼いて石灰粉を作るのです。

二人は料理屋と宿屋をかねたところに泊り、近くの石灰屋を集め、

「私達は東京で石灰を使用する商人なので、石灰を売ってください」と言い出し、手つけ金をはらって、半年間使用できるほどの石灰を買い取る契約を結びました。

平三郎はその時のことをふり返って、大変おもしろいことがあつたと話しました。

石灰屋を料理屋に集めた時、彼らに大いに飲食をさせたのですが、その時廊下へ百本以上のから徳利が並べてありましたので、平三郎が女中に訳をきくと、

「こちらでは徳利の数で飲んだ酒の量を計算する習慣です。いってみれば、ごまかしたりしないことを証明するためです」といったそうです。

吉沢兵佐という人に、葛生の石灰屋の元じめをたのみ、吉沢が責任をもって、石灰を深川の工場に積送りにすることになり、数十の石灰船が、たえず工場の川岸に到着するようになりました。

このようにして、深川のセメント事業が順調に進んだところで、数年の後、浅野はさらに門司にセメント工場をはじめることになりました。それは、大倉喜八郎が門司で精米会社を起こしたのですが、いろいろの理由から廃業したのを見て、浅野がこれを買取り、セメント工場にしたのです。

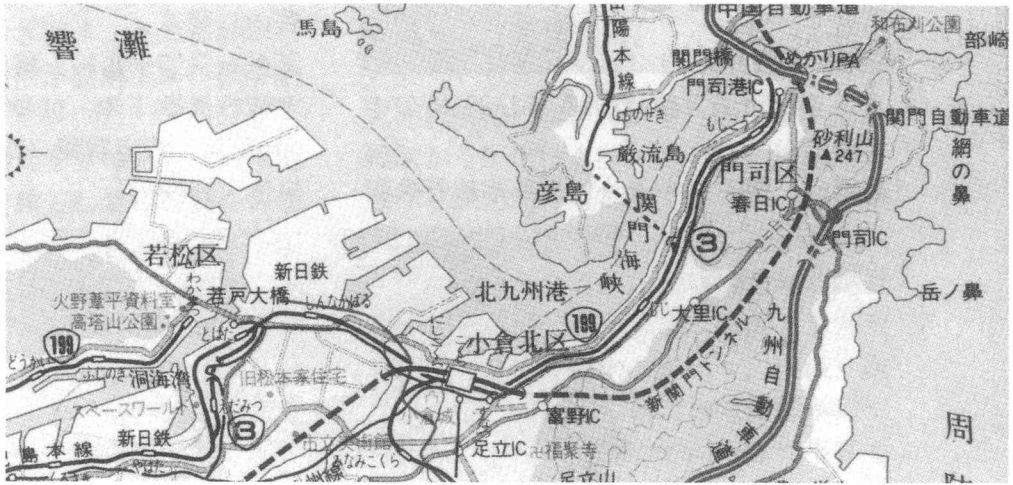
浅野の見る所によると、門司は海運でもっとも大切な場所で、いつか海外へセメントを輸出するにしても、すべてに都合がいいという、大きなことを好むところから、第一にここに目をつけました。

第二には、日本の鉄道の発達が未熟なので、セメントを大阪地方の工業中心地に送るにも、門司からなら、海運を利用することができるということです。

こうして浅野総一郎が基礎を作ったところで、平三郎は長く門司に滞在して、工場の経営を続けたのです。浅野の目のつけどころはさすがにすばらしく、東京、門司ともに成功しましたが、そのころのセメントは大変そまつなものでした。その後製造方法が非常に進歩して、現在では申し分のない完全なものになったのです。

こうして二十二歳の平三郎は、セメント会社の重役になりました。王子製紙の方にも、支配人心得兼技師として関係していたので、夕方五時ごろまで王子製紙にいて、それから浅野セメントに行き、工場を見まわった後、浅野と夜中まで、事業上の計算や、設備の改良などの相談を毎日のようにするのでした。この時平三郎は一頭の駿馬を飼い、夕方王子製紙から、この馬に乗って深川のセメント会社へかけつけたのです。

こうして王子製紙の仕事をしながらセメント会社の仕事に力をいれることは、大



地図「門司」

「九州」(トラベルメイト36)

近畿日本ツーリスト 平成2年4月20日発行

変なことでしたが、平三郎が全身の力をこめて働いたので、王子の社員達も一人として不平を感じる人もなく、むしろ船がいつぱいの風をうけて走るように、仕事を楽しんでやっているようにも見えました。



## 7 欧米に留学する

「わら」から紙を

平三郎がアメリカにいたころは、アメリカの製紙会社では、主にほろを原料にしており機械も紙すきの方法も、使われる薬品も、ほろを原料とする方向で考えられていました。

麦わらを原料とする製紙会社は、わずかに二つの工場だけで、平三郎がいたコネティカットのモンテギユウ社は、アメリカでも二、三をあらそう大工場で、マーシャル社長はアメリカ中に名をとどろかせた技術家でしたが、ここが麦わらを原料とする工場でした。

日本には麦わらは多くはありませんが、稲わらはたくさんあって、農家ではこれを燃して暖をとるような、非生産的な使い方をしていました。農家がこれを有効に利用するのは、米俵を作るといっただけで、最上のわらで作った米俵は、東京に送られ、空き俵になったあとは、穴があいたり破れたりして、安い値段で焼芋屋に引き取られたりしていました。

この米俵をとかして紙をすくようにすれば、麦わらをとかすよりさらに簡単です。しかもわざわざいなかから買い集めなくても、米俵として自然に東京に集まってくるものの中から、使えなくなってしまうものを使用するのですから、ねだんは安く、運賃もかからない、ということにヒントを得て、平三郎は全力をつくして、モンテギユウ社の紙すき法を研究しました。

日本に帰ってすぐに、平三郎は米俵を原料とした製紙を始めましたが、アメリカ

※「アダム・スミス」

一七二三—一七九〇、イギリスの  
経済学者・哲学者。

「国富論」は産業革命の思想的さ  
さえとなった。日本では一八八二  
年訳された。

の方法をそのまま使うというのではなく、自分の考えをいろいろ加え、米俵に  
ように改良しました。それは技術界では最も尊重される貢献の一つでした。

こうして王子製紙がこの新製法によって売り出した紙は、少しねずみ色で紙の質  
も悪かったので、消費者からさまざまな苦情がよせられました。

消費者の大多数は新聞社でしたが、その苦情を代表するものは、数寄屋橋外の秀  
英社活版所の社長、佐久間貞一でした。当時は東京日日新聞、報知新聞をはじめ、  
いくつかの新聞社がありましたが、自分の印刷所を持っていたのはこの二社だけで、  
その他の新聞雑誌は、原稿だけを作り、印刷は秀英社にたのんでいたました。

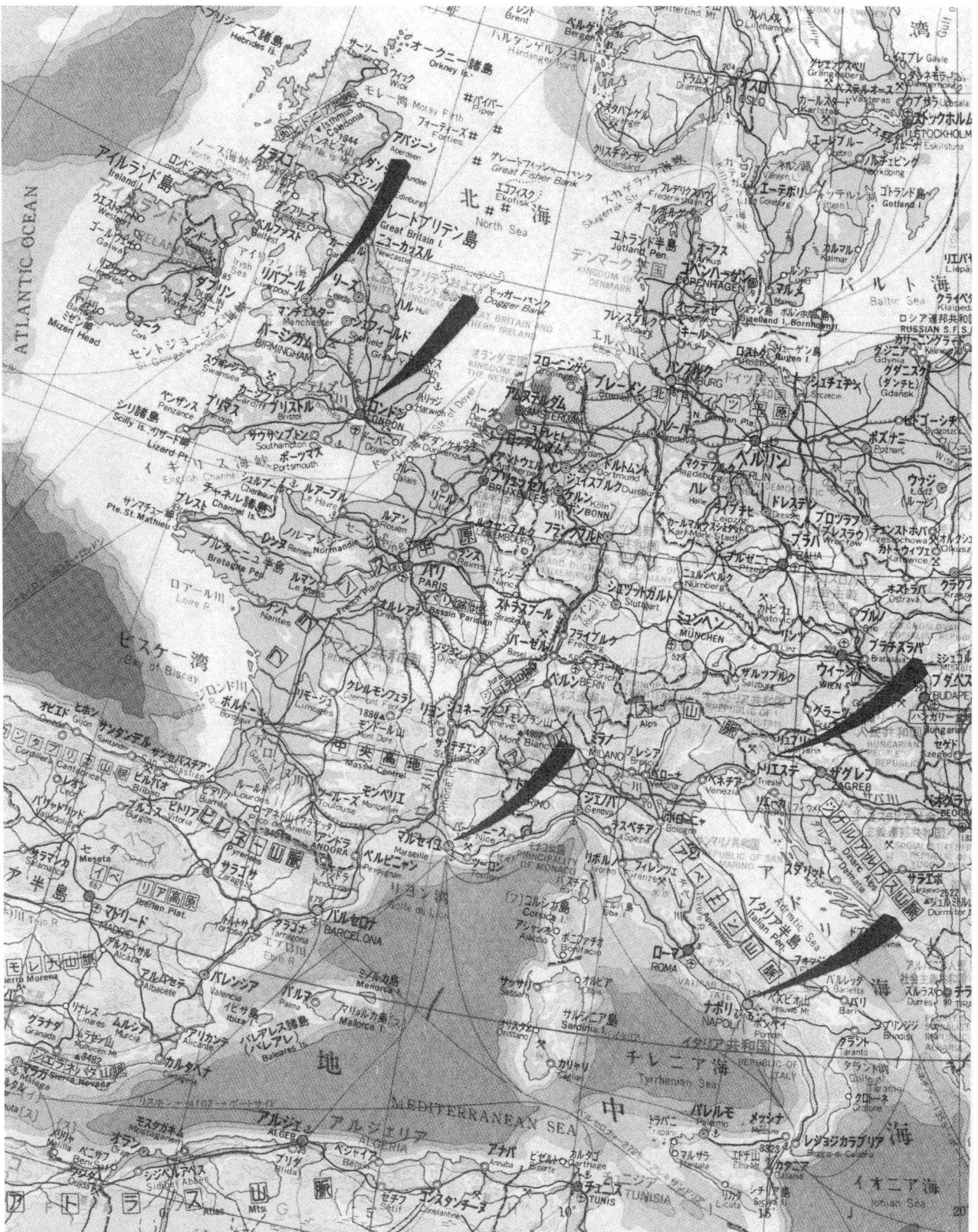
そのため秀英社から、もう少し紙を白くして光沢を出してもらいたいと注文がき  
ましたが、平三郎はなかなかこれを承知しませんでした。それは若さのせいもあり  
ましたが、このころ平三郎は「アダム・スミスの『経済学』」などに熱中していたので、  
国民経済の上から一種の議論を組み立て、

「新聞はどんな紙でも印刷ができて読むことができればよい。日本のような貧乏  
国で、新聞に改良紙を使って高い紙代をはらうのは、国のためにならない」

などと、製造者でありながら、消費者の経済状態まで考えるような議論で、うけつ  
けなかったのです。

そうかといって当時は、外国の紙を使えば非常に高くつくばかりか、大量輸入の  
方法もなかったので、新聞社では王子製紙を非難しながらも、その紙を使わないわ  
けにはいきませんでした。

このようなことから佐久間貞一は、平三郎を、



地図「ナポリ・マルセイユ・ロンドン・マンチェスター・トリエステ」

「標準高等社会科地図」 四訂版 帝国書院 昭和63年3月25日発行

※犬猿の仲 非常になかが悪いこと

「出すぎた小僧」とののしり、平三郎は佐久間を、

「国家経済を知らない見とおしのきかない人だ」と笑い、二人は犬猿の仲となり、ぐうぜん会合などで顔をあわせても、言葉もかわさない有様でした。平三郎は後にこのことをふり返って、

「私も今ならあのような頑固ないいあらそいをしなかつたらろう」と人に話し、笑っていたそうです。

王子製紙は平三郎がアメリカから帰ってから、めきめきと能率を上げ、一日の生産量が四倍近くになりました。原料を安く買うことができるので利益も増し、一割の配当をするようになりました。平三郎は明治十三年十二月、平社員からいつきに副支配人になり、まもなく支配人になりました。けれどもこの支配人殿の月給は、たった五十円という、なんともあわれな少なさだったのです。

平三郎ヨーロッパへ

※明治十六年 一八八三年

平三郎は明治十二年に二十歳でアメリカへ行き、約一年半の後帰国しました。ところがこの二、三年の間に欧州（ヨーロッパ）の製紙界は大変な進歩をし、明治十六年には、木材のパルプを原料とする工業がおこってきました。

※明治十七年 一八八四年

そこでこの新事業を研究し、一日も早く日本に取り入れようと、明治十七年五月、平三郎はさらにヨーロッパへ行くことになりました。この時平三郎は二十五歳でした。

今ではインド洋は日本の船がさかんに行き来していますが、そのころはイギリス船の勢力はんで、インド洋から一度イタリアのナポリへ行き、ナポリからマルセイ

コレラさうどうのヨーロッパ

ユへまわらなければなりません。当時のイタリアのようすはどのようなものであったかは、次のような平三郎の話によつて、現在との大きなちがいがわかります。

ナポリへ降りて、泊つたのはたった一晚ですが、上陸しておどろいたのは、道の両はしで、あつちでもこつちでも、さかんにかがり火をたいていたことです。

「どうしてこんなことをしているのですか」と聞くと、

「ここには今コレラが大変はやっているので、ばいきんを全滅させるために火をたいているのだ」と言うのです。

材木を山のように積んで、銀座のような町の道路の両がわで、どんどん火をたいて悪い空気を消毒するつもりなのですが、そのくらい人の知恵がまだ幼稚だったということがわかります。

上陸したけれど、きみが悪かったので、船でいっしょだった人達と歩いて帰つて来て船でねました。それからマルセイユを通り、パリに着いたのですが、こんどはパリでどうだったかという、船をおりて、むかえに来てくれた岩下清周といっしょに汽車に乗ろうとすると、駅員が、

「どこを通つて来たのですか。あなたはナポリで船をおりたでしょう」

ときくので、

「ちよつと下りて市中を歩いて来た」と答えました。

「あなたの家はどこですか」とさらにきくので岩下君の住所を教えました。

イギリスで

※爵位 準男爵、卿

そこへつくと、すぐに警察の人がやって来ました。

「気分にかわりはないですか」

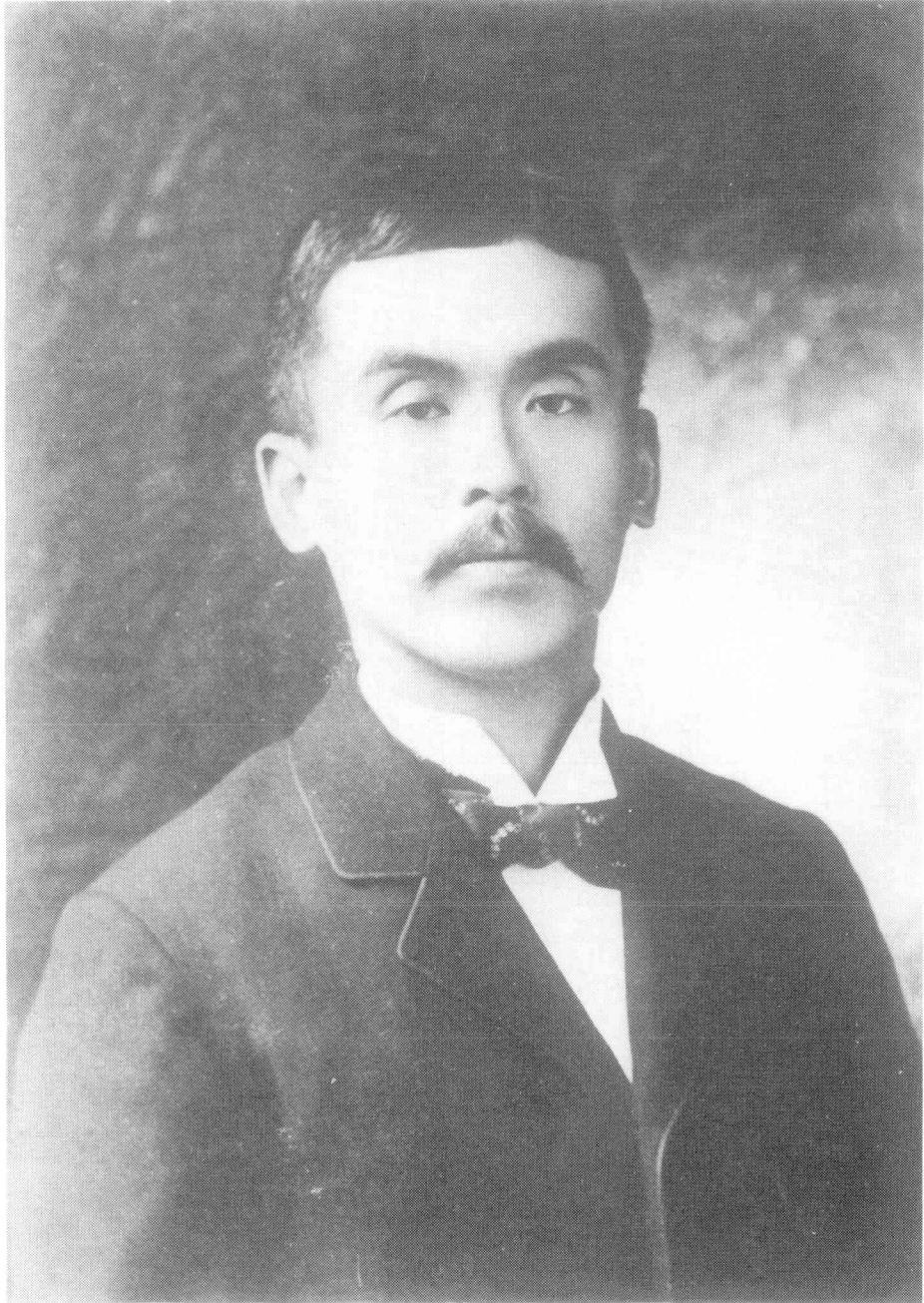
「ナポリを通って来たのですか」

「何も異常はないですか」といいます。それはもう、いたれりつくせりで、よく注意が行きとどいていると思えました。

平三郎はパリに入ってから、諏訪という海軍書生の古手の通訳といっしょに、あちらこちらの工場を見てまわりました。そして最後の目的のロンドンに入り、イリス商会の主人カールイリスの紹介で、マンチェスター近くのクロウソにあるハージントンの工場に入ることができました。

この人は職工から成り上がって、サーの爵位※をもらったほどの人ですが、はじめてサルファイトパルプ工場をイギリスに建設したのです。ここで、つてをさがしてお札を渡し、パルプ製造の方法を見せてもらいました。もちろんそれは今から見れば幼稚なものでしたが、方式だけはよくわかり、これからの運用は、もう自分の心がけだけにあるところとなりました。

平三郎はそれからドイツへ行って研究を重ねたいと思いました。平三郎が前年アメリカへ行った時、同じ下宿屋に住んでいたフリンシュというドイツ人がおりました。彼は日本を見物したいというので、平三郎の帰国に同行し、渋沢栄一に紹介したり、いろいろ世話をしあげた人です。



「洋行中の大川平三郎 26歳ころ」

フリンシュはドイツのフライブルグに小さな製紙工場を持っているので、手紙を出したところ、すぐに返事が来て、自分の家にとまれといひます。行ってみると彼は意外にも男爵になっていました。それはフォン・ヒルレルンという男爵の娘と結婚をした結果で、両家の名をとつて、フォン・ヒルレルン・フリンシュとなつておりました。

平三郎は一ヶ月ほどフリンシュ男爵家の客となつておりましたが、その工場はドイツでも旧式のものでしたので、とくに役に立つものはありませんでした。けれども男爵の多くの友人関係から、ためになることがたくさんあつたのです。

平三郎はいろいろ考えた結果、トリエステ市にあるバーロン・リッテルという人の工場を見学することにしました。この技術長はケルネルというとてもえらい化学者で、熱心に仕事をしておりましたが、この人はのちに、前に書いたイギリスのハージントンといつしよに、ケルネル・エンド・ハージントンカンパニーという大工場を建設したのです。

平三郎はこの工場に行くのに、非常に苦心しました。この上さらに礼金をはらつて技術を学ぶわけにはいかないのですが、何としてもこの工場の研究はしなければなりません。どうすればこの目的を達することができるだろうかと考えた末に、ある一つの手段を使うことにしました。

平三郎はアメリカでは、ホテルにはとまらず、下宿住いをして、生活すべてを節約し、工場での体験から知識を吸収することにつとめたのですが、今回は一番良いホテルにとまり、いげんのあるようすで、日本での自分の立場を大げさに人に話し、



身分の高い人のようにふるまい、二頭立の馬車に乗り、えらそうな顔をしてリッテル邸の表玄関に名刺を出して面会を求めました。

この策略は大変うまくいき、男爵リッテルの夫人がすぐに出てきて平三郎にあつてくれ、手あつくもてなしてくれました。そして、工場を開放して、自由に研究させてくれたのです。平三郎のかしこく鋭いものを見る力で見学すれば、二、三度見ただけで、二、三人の技師が二、三か月かけて研究したよりも早く要点をにぎることができましたので、まもなくアメリカを経由して帰国しました。

そしてすぐに王子製紙の構内に、ケルネル式のサルファイトパルプ工場を建設したので、それは明治十七年で、この時アメリカには、まだサルファイト工場はありませんでした。

これについて平三郎の考え方は正しかったのですが、事業の成績はあまりよくありませんでした。その時製紙の原料は、秩父の山林を目当てにしていますが、この原料の供給が思うようになかったのです。

そこで平三郎は静岡のみつまたの殻に目をつけました。そのころ静岡ではみつまたを原料にして、駿河半紙をさかんに製造していました。みつまたは皮をはいでこれを紙にしますので、その骨は全部ゴミとして捨てられていたのです。それを西洋紙の原料として使うのは名案だと思い、浅野といっしょに富士川の上流の地方を歩きまわり、この計画を進めました。そのため静岡のみつまたの骨はほとんど買いしめの形となり、秩父から来る材木と合わせてパルプを作ることになりました。

もしこのころ、今のように優秀な技術があれば、大変大きな利益を得ることがで

きたのですが、思ったほどの利益を得られなかったのは、技術が未じゅくだったせい  
です。これについて平三郎は次のように話しています。

これまでヨーロッパでは釜が破れつするなどの、いろいろな困難があつて、その  
のバルブという産業のために何人が死んでしまつたか、何人が財産をつぶしてし  
まつたかわからないくらいです。私はそのまつただ中に入ったのです。このよう  
にヨーロッパの国々でもまだ大成していない困難な事業を、一人の力で日本へう  
つそうと計画したのは、大胆というより、らんぼうすぎると言うべきでした。

このサルファイトバルブに対する考え方が、ヨーロッパの人々と私とは、だい  
ぶちがう所があつて、私は成功をいそぎすぎたのでした。それは、このバルブが、  
日本のみつまたや楮にとてもよくにいて、日本紙を作るのに一番安く、一番べ  
りなので、もしこれが世に出たら、日本の紙業界はたちまち一変し、みつまた  
や楮は必要のない物になり、パルプ業者ばかりが、大きな利益をひとりじめにす  
るようになるだろうという考えが、非常に強かつたためでした。

これが正直な気持です。けれどもこのような大事業をあまり重要視しないで、  
見とおしや研究が不十分で、何度もおもいがけない故障にあり、第一回のこころ  
みは失敗しました。

薬のために設備の各部がどんどんくさる、薬のかげんが思うようにいかないで、  
釜の内がわにはつてある鉛薬は変質する、木材もだんだんくさつてくる。その上  
みつまた殻は話にならないほどやっかいなものでした。かさばつて、たくさん積  
むこともできないため、運賃が非常に高くなり、材木より割高になるばかりか、

まっ白のものが薬で煮るとまっ赤に変色し、これを白くするためには木材より費用がかかるなど、大変な問題が過ぎ過ぎにおこりました。

そこで早くこの仕事をうち切り、もう一度アメリカで研究してからやりなおそうと決心し、木材の煮釜を急にわらの煮釜に作りかえたのですが、これが非常に成功し、木材やみつまたを使用するよりも、はるかに有利でした。このため、王子での失敗は、問題にならないですみました。

木材煮釜をわら釜に変える時の私が考え出したことは、なかなか名案でした。くわしいことは省きますが、私は何か一つ大きな困ったことにあうと、すぐにそれをいいことに変えていく考えが、いつの場合でも頭にうかびます。ですから「どんなことがあっても困らない」という自信をいつも持っていましたので、仕事をしているうちに困ったことになっても、何かきりぬける方法が浮かんできました。

このようにして、王子でのパルプ事業はうまくいかなかったので、もう一度わらを原料にすることになり、釜やその他の設備を変え、同時に材木がくさらないように、木場の商人に全部売ってしまいました。

そして遠くから原料の材木を東京へ運ぶことはあきらめ、近くで材木を集められるところに工場を置かなければならないと、多くの人の意見が一致しました。

まず、大きな川の上流には、必ず材木があるという考えから、富士川、大井川、木曾川などの上流に材木の取れる場所を発見しようと歩きまわりました。けれども木曾川の上流にはたくさん材木がありますが、川の流れがはげしくて、はこび出



地図「富士川、大井川、木曾川、天竜川」

「名神高速道路」平成4年  
「東名高速道路 中央自動車道」平成2年  
道路施設協会発行

す方法がありません。富士川もよいのですが、多くは皇室所有の森林で、かんたんに買い取ることはできません。

そこで天龍川の上流の秋葉山の奥をさがしたところ、非常に広い森林があり、また遠州の牡丹谷という所に、ちょうどいい林野を発見しました。

牡丹谷は、もともと大蛇がいるということで行かなくなった場所ですが、そこには縦の木がはえていました。この木は育つ力が強すぎて、他の木を植えても生長することができません。そこで人々は費用を使って、縦の木を枯れさせる工夫をしていました。そのように費用をかけなければ、植林もできないほど奥深い山ですので、彼らはよろこんで、これを売りはりました。

こうして大きな山林が手に入ったので、天龍川の上流、秋葉山の奥の院の下、気田川にそって、パルプ専門の工場を建設する計画をたてたのです。

けれども、この計画を実行するためには、もう一度パルプ製造の技術を、研究する必要があります。これはケルネル式をとり入れて失敗したことから、念には念をいれよという結論に達したからです。

平三郎はふたたびアメリカへ旅行して、いろいろのことを見学しました。これが平三郎の第三回目の外国旅行で、明治二十九年<sup>\*</sup>に出発して、翌年四月に帰国したのです。



※気田  
現在静岡県天竜区春野町気田

## 8 気田<sup>※けた</sup>の工場で努力する平三郎

平三郎の今回のアメリカ行きは、非常に短い間のことでした。それは平三郎が、パルプ事業については、だいたいの理解ができているばかりか、すでに試験までしていたのですが、好成績が得られなかったので、これを改良するためのものだったからです。

そしてアメリカのプロヴィデンス市外のリッチモンド製紙会社で研究したことに、自分が考え出したことを加えてでき上ったものが、大川式ダイゼスターとよばれる、パルプ製出機でした。

牡丹谷というところ  
そこでいよいよ静岡県下に新工場をおこすことになりました。ふつうに考えれば、東海道に工場を作り、奥山から木材を運びおろす方法を取るだろうと想像されました。けれども木材は大変量がかさばりますが、これを紙に作りあげれば三割くらいの積荷の量になってしまうことから、平三郎は、むしろ森林の現地に工場を建て、木材の運搬にかかるよけいな費用を、少なくしようと思惟しました。こうしてこの目的のために選ばれたのが秋葉山でした。

平三郎が目をつけた秋葉山の奥の院の下に、気多という山村がありました。このあたりはわずかながら小船の運送ができる終点で、ここに工場を建築したのです。さらにその奥山には、京丸の牡丹谷という、平家の落武者のかくれ屋といわれるところがあります。

ここが牡丹谷とよばれるわけは、そのあたりは山が幾重にも重なっていて、のぼるのが大変で、その上大蛇がたくさんいるという伝説もあったので、人々は、はるか遠くからこの山を見るだけでしたが、そこに牡丹のような花があちらこちらに咲くを見て、牡丹谷と名づけていたのです。

けれども平三郎が、この深い山にわけ入って見ると、花は牡丹ではなく石楠花しゃくなげでした。石楠花は高山植物に近いものであることから考えても、この牡丹谷の奥深さが想像されます。

平三郎が山林を買うための交渉をした相手は、京丸の藤原左衛門という、もとの庄屋の主人でしたが、その村は人家がわずかに七、八軒しかありませんでした。山のふもととの行き来は何もなく、数百年の間、同族結婚をつづけて、原始的な生活をいとなみ、その住いや、人々のすがたかたちは、なるほど平氏の落人の子孫だと思えるところがありました。

※欧米 ヨーロッパとアメリカ

この平氏のかくれ家、京丸の牡丹谷が欧米\*で一番新式の機械をすえつけて、文明の活動をおこす場所になろうとしているのは、ふしぎな運命といえます。

こうして土地もきまり、注文した機械もどいて、すべてがつこうよくはこんだのですが、ここで平三郎の頭をなやます問題がおこりました。それはこの新式機械をどのように運び入れるかということでした。

## 機械運ばん

そのころ東海道鉄道は、ようやく天龍川の鉄橋ができて、鉄道用貨物車が走っていたくらいで、鉄道局にねがい出たところ、天龍橋のたもとに仮りホームを作り、

※二百五十トン

一トンは一〇〇〇キログラム

※見積書

前もってだいたいの計算をしたもの

夜なかの十二時に列車がつくようにして、二時間以内に荷物をおろしなさい。そして、午前六時には、ホームをきれいにかたずけておきなさいという命令でした。

この場所は線路が地面より六メートルも高く、しかも夜間のわずかの時間で始末しなげらばならないのです。そのうえ、その機械というのが直径二メートル、長さ九メートルあまりのボイラー四個をはじめ、合計二百五十トンという大変な重量でした。これをずい分苦心し、いろいろ工夫して、何とかうまく機械をおろしました。

こんどはこれを気田の工場まで送るのですが、これがさらに大変なことでした。まずこのあたりの請負師を集めて見積書を出させたところ、おどろくほど高い金額を要求してきました。

この時平三郎の胸のうちには、すでに名案があり、自分の力で運搬することを決心していました。そして長さ十二メートルほどの河船を作り、七日間でこれを気多村まで運びました。

この運送のようすについて、平三郎は次のように話しました。

私はまず一ばんに、気田工場のうら山で大きな樅の木を見つけ、造船材の板を切り出し、はば三・六メートル、長さ十二メートルの箱船を作りました。これにあの大きな釜をのせて、水線下四〇センチにかばせる計算をしました。

この船で川をのぼるのに、船上の人足六人、曳子<sup>ひき</sup>二十人、ほかにウインチ船の人足四人、合計三十人で出発し、途中民家に五泊して気多につきました。

何しろ米、みそなどは、すべて船にのせて持って行き、農家を一晚かりとめてもらい、次の日、まさ代や家賃などを支払うのです。



こうして、請負師にたのむよりはるかに安い費用で、機械をはこぶことができ  
ました。ものごとは、少し頭を使つて、やり方を考えればこうもちがうものかと、  
自分でもおどろきました。

けれどもこの船でこぎ上る途中には、ところどころに滝のような小げき流があり、  
水があさく、船底は小石や砂にふれて、人の力ではどうしても動かないのですが、  
平三郎はこのことを前もつて考え、船の底には鉄板がはつてありましたので、大じよ  
うぶでした。このむずかしい場所を通りぬけるには、小船へウインチ\*をすえつけ、  
これを滝の上の方の木や石にしっかりとつなぎ、大きなロープを本船に結びつけて、  
四人の人夫の手でまき上げる工夫をして、わけなく解決しました。すべて平三郎ら  
しい新しい考えでした。

ところが機械をはこんでいた時、めずらしいことがおこりました。天龍川を約二  
十五キロのぼつたところで、急に強い風がふき、船はてんぷくして、のせていた直  
径三・五メートルの釜は、川の中に落ちてしまいました。これは大変ということであ  
る。すぐに現場にかけつけてみると、もうその大釜のすがたは見えません。

これは水中におちたとたんに、激流がはげしく釜にむかつてつきあたり、そのい  
きおいで川底に大きな穴ができ、その穴の中に釜がおちこみ、じやりの下になって、  
あり場所がわからなくなつたのです。天龍川では物を落とすとすぐ見えなくなると  
いう、言い伝えがあるのはほんとうで、このような水のはたらきの結果です。

しかし、これらの出来ごととも従業員の努力で、たいしたことにならないで、たす  
かりました。

## 釜はれつ

こうして工場もいよいよ建築されましたが、動力としては水力を利用する計画でした。このことは、日本ではおそらく平三郎が最初の考案者だったでしょうが、水力利用については、さらにべつの研究が必要ということで、その実行はあとまわしにして、とりあえず、蒸気釜を進めることにしました。

けれども山奥へ石炭を送ることは大変ですので、近くの山の木材を買い取り、これを燃料にして蒸気釜を動かすことにしたのです。

この工場で平三郎は、大川式セメントラインド・ダイゼスターという釜を使用しました。

大川式ダイゼスターは、アメリカのホイーライト式を改良したのですが、その作り方は、高さ七十五センチあまり、直径約三・六メートルの鑄物の釜を十個積み重ね、その内部を鉛で張り、釜と釜との重ね目へ深くハンダをほどこし、直径五センチのボルトでかたくしめつけるのです。けれども高度の熱にあうとハンダと鑄物となまりとの伸縮しんしゆくに差があるため、その間から蒸気もれ出す危険がありました。

これには非常に苦心したのですが、やはり平三郎が東京にいる時に、釜に異常があると、技師長からの電報が来て、すぐに釜の使用をやめるようにと電報をうち、平三郎がかけつけてみると、もうすでに釜は破裂していました。工場の三階のゆかは吹きとばされ、天井は全部吹きぬかれました。

おどろいた平三郎は、ここで職工が死んでいたら、人にあわせる顔がないと思いました。五人の職工はみんな助かったので混雑の中にも、ほっとひといきつきま

した。

けれども助かったといっても全く無事というわけではありませんでした。平三郎はこの時をふり返って、次のように語りました。

その五人の中の二人は、この釜がはれつして床がとぶ時、その床の上において、そのまま草原にとばされました。あけ方四時ごろのことで、まっくらで何もわからない。仕方がないから、下に行ってみようと手さぐりで歩きはじめて、二人は草原の中に吹きとばされていたのによく気がつきました。

別の一人は三階で働いていました。階下に何か用事があって、はしご段まできた時ぱく発はおこりました。家がふきとんでしまいましたので、もちろん階段の下に落ちてしまい、手をはさまれて動けません。上からパラパラ木ぎれが落ちてきて、この男の体を深くおおってしまいました。その上蒸気やふつとうした薬品が吹きかかったのですが、ガスでちっ息しただけで、やけどもしないで助かりました。もし亜硫酸のにおいをかいでいたら死んでしまったかもしれません、気が絶していたので助かったのです。

もう一人は木ぎれを釜につめているうち、釜がほとんど一ぱいになったので、もうこれでいいだろうと、木のじょうごをおろし、釜の中をのぞいていました。そのとたん、ドシーンときて、本人はじょうごの中にコロコロ落ちてきて、けがもしないですぐ蒸気をしめたのです。平三郎はこのさいなんを一生で一番大きな事故として、その絵をかかせて、自分の家にかけていました。

こうして平三郎は、じまんの新式蒸気釜もこのままでは失敗ということになりま

すが、これは、かんたんな方法で回復することができました。それは蒸気釜の内がわに、鉄筋コンクリート式にセメントをぬりつけることでした。平三郎は浅野総一郎と共同で、セメント会社を経営しているので、ふと考えついて、セメントのれんがを作り、これを蒸気釜の中に十日ほどつり下げて試してみました。何の変化もありません。そこで、セメントで釜の内面を舗装することになり、あれほどのむずかしい問題も、解決してしまいました。

それなのに、ふしぎなことに、平三郎がこのセメント、ライニングの方法を考え出すのとほとんど同時に、アメリカでもボストンのラッセルという技師が、セメント、ライニングで特許を取り、ラッセル式の釜を作り出したのです。世界各国の製紙家は、ぼろを原料としていた時代から、いろいろ変化して、木材からパルプを製造する時代になり、もつとも必要なのは最高で最良のダイゼスターであるため、これを得ることで心がいっぱいでした。

たとえば、アメリカのリッチモンドという大金持ちは、むすめむこホイーライトが発明したダイゼスターを最良の釜と信じて、大きな資本をかけて一大工場をおこしましたが、実験の結果があまりよくなくて、ついに没落してしまいました。

またアメリカのウイスコンシン州のカクワナという小さな都市の、コロネル、フランバハという製紙界に知られた人が、一つの合金を発明し、これでダイゼスターを作ったのですが、ホイーライト式と同じように約三・五メートルの釜十個をつみ上げ、それぞれの部分のつき目に、非常に大きなボルトを入れてしめあげるので。これまでのホイーライト式よりすぐれていると思われましたが、これもまた実さい

## 仇山の木材切り出し

に使ってみると、破壊してしまいました。

それなのに平三郎が、気田工場の一つの経験から、突然セメントでかためてじょうぶにする方法を発見したことは、何といっても工業界の大変大きなできごとでした。平三郎はこの釜の発明のために、髪の毛がまっ白になるほどの苦心をしました。その後、釜の内がわにぬる何種類もの充てん料や塗料などが発明されましたが、ほとんどのものが、このセメント舗装法をもとにしたものでした。

こうして秋葉山奥の山林は、その後数年の間、休みなく材木を供給しました。またその後、工場の裏の方にある仇山という山を買い取りましたが、ここは十年間も、まきになる木を供給し、気田工場の宝庫となりました。

この京丸牡丹谷の買い取りは、おもに平三郎の弟、田中栄八郎が担当しました。栄八郎は平三郎より四つ年下ですが、平三郎とほとんどいっしょに王子製紙に入り、このころはすでに主事になり、事務を担当しておりました。栄八郎はこの山の買い取りのために、深い山に分け入り、不けつなところで何十日もすごし、その苦労は大変なものでした。

仇山から薪をきり出すことについて、平三郎は次のように語りました。

山奥で仕事をするので、石炭はとても問題になりません。そのかわり、まきをたくさんですが、毎日たくさん使うので、楽な仕事ではありません。けれども運がいいことに土地の人で、このような仕事をするのが得意な、鬼久という人がいて、この男にむずかしい仕事をたのんだので、私達はとても助かったのです。

※明治二十六年 一八九三年

彼は仇山の山奥から気田まで、仇山川に数十か所のていほうをきずき、そこに水をため、一メートルあまりに切った木を水中に投げ入れ、せき止めていた水を切り落とすと、木は川しもの気田まで流れつくという、すばらしいくふうをしました。もとの木はただのような値だんで、きり出しにはこの名案ありで、まきは非常に安くつきました。この現場をひとめ見て、私は「ゆかい、ゆかい」と大声をあげました。

この仕事は大雨のあとがもつとも効果的ですが、堤を切り落とし、木材を流すのは大変危険な仕事でした。鬼久は足をすべらせて、木材の中に落ちて死んでしまいました。これは忘れられない、悲しくむごたらしいできごとでした。

こうして気田の工場も成功し、明治二十六年九月、平三郎は三十四歳で早くも専務取締役になったのです。

## 9 王子製紙会社を去る

谷敬三突然去る

東京の工場では薫紙を生産し、遠州では材木からパルプを製造し、王子製紙会社の社運は日まじに上昇してきました。

ところが失敗の悪魔が、いつの間にか、平三郎の後に付きまといまいました。

会社ができ来た時から、ずっと力をつくしてきた谷敬三が、突然会社をやめなければならなくなりました。谷は、それまで平三郎に、いろいろと力添えをしてくれた大切な人です。

温厚で、勉強家で、何一つ非難されるような所のない人が、三井という大きな会社の力で、別の人を重役にするために、やめさせられることになってしまいました。それまで王子製紙の相談役のように、すべてのことに指図をしてきた渋沢栄一も、三井のたのみを断ることができず、仕方なく谷を別の会社へ推せんして、藤山雷太を重役にしたのです。

これは藤山が、平三郎を王子製紙から追いはらおうとする計画のはじまりでした。

岩下清周との争い

平三郎がはじめてアメリカへ行った時、

「国が栄えるには商業が一番」という意見の人々とよく議論をしました。

「あなた達は商業が一番だというけれども、国にとって、産業が盛んでなければ、商業も成り立たないでしょう。まず工業を盛んにして、その産物を動かすのが商業なのだから、もとの工業をおろそかにして、末の商業でいくらがんばっても、

あまり役に立たないではありませんか」と、何度も言い争いをしているうちに、岩下清周という人との間に、おもいがけないほどきつい言葉が出てしまったこともありました。そして、誰が一番出世をするか、かけをしようということになったのですが、岩下は、

「平三郎は大きなことをいっても、百万円の財産を作るのがやっとだろう」と、ののしったのです。

このようなことがあって、平三郎と岩下の方に感情のへだたりができ、岩下が日本へ帰ってから、しきりに平三郎のことを悪く言って歩きました。

三井の中上川彦次郎にも、

「平三郎が財産を作ったらしいから、用心してください」と言いました。

中上川からの、この不満を聞いた平三郎の友人は、すぐに平三郎に忠告しましたが、平三郎はやましい所がなかったので、中上川にも、何一つ弁解したり説明したりしませんでした。

後に平三郎はその頃のことを思い出して、

「谷君が会社をやめた時、一緒にやめなかったのは、私の生涯の失敗でした」と人に話したそうです。

平三郎は年少で成功し、アメリカ人の間で生活することも多かったのですが、欧米の個人主義の社会生活に慣れ親しんでいました。

谷敬三がやめた時も、心の中では、古くからの友情を思いおこして、悲しみ惜しんでいたのですが、自分は自分の責任をつくせばそれでよいと思って、踏みとどま



木材を求めて

※信州 長野県

※ランキンの測量学

英 工学・物理学者、一八七一年  
伊藤博文が日本へ近代工業教育の  
導入を要請、新しい工業教育のシ  
ステムをつくった。

※土佐 高知県

りました。

けれども、谷敬三という、長い堤のくずれた所から侵入した水は、やがて平三郎をおぼれさせることになりました。

紙の需要が非常ないきおいで増加してきましたので、平三郎はさらに事業を拡張しなければならぬと思いました。そこで、まず木材を手に入れるため、新しく山林を獲得しようと考えていました。

弁護士の沢田俊三が、

「信州の飯田近くの遠山というところの大山林を、本願寺が寺院造営のために所有しているのが、もう必要なくなったので売りたいようです」というので見に行きました。

平三郎は前もって、「ランキンの測量学」を読んで勉強し、自分で作った簡単な測量機を使って、水力に利用できるものがあればどんどん測量しました。

富士川の上流、土佐の山林、熊野川の上流など、各地を歩きまわったのち、遠山附近の中部という土地に工場を建設しようと、安い土地を買いました。

中部は天龍川が信州飯田町の下流の方に折れ曲った所で百戸ばかりの村落です。ここで川の水をきりかえ、約二十三メートルの落差を作り、これを利用して動力を起しました。

それまで天龍川は、急流を命がけで下る、もの好きな人がいたことはいたのですが、船で飯田と東海道の宿駅とを往来することは、冒険的なことでした。

※明治三十一年 一八九八年

平三郎王子製紙を追われる

平三郎は、この急流に二十そうあまりの運送船を浮かべ、一そうごとに四人の船頭を乗せ、外国製の重量のある機械を高地に送ろうとするのですから、人々がおどろかないわけはありません。

最初はうまくことがはこび、西渡という部落に無事到着しました。船を支流の小川に引き込み、船頭達は農家に泊めてもらいました。

ところがその夜、豪雨が降り小川の水が急に増えて、船をつないでいた綱が切れ、船はすべて転ぶくしてしまいました。

次の朝、平三郎は数十人の潜水夫をやとい、天龍川の川底をさがさせました。幸運なことに、川底は平らで、すべすべした岩ばんだったので、すべてを拾うことができました。

こうして、人の力が自然を征服して、工場ができたのは、明治三十一年の暮のことでした。

信州遠山は天龍川上流の川はばがせまくなつた所ですが、一年に一度、規則的といつていいほど、浜松を通過してくる台風の道筋でした。

いよいよ工場ができ上がり、運転開始の日もまもなくという時になって、台風がおそい来たのです。

平三郎は様子を見ようと外へ出たところ、突風と共に何か腰に当たつたような気がして地面に倒されました。よく見れば、突風が鉄か石のかたまりのようないきおいで当たつたのでした。突風は家屋や樹木をなぎ倒し、せつかくでき上つた工場の屋

根も、吹き飛ばしてしまいました。さすがの平三郎もこの時は、どうしてこのように困難な土地で、事業を起こそうとしたのだらうと、ため息をつきました。

こうしている間に、平三郎失落の災いがおこりはじめました。

その頃平三郎は、遠州気田の分工場に全力を注いでおり、王子の工場のこととは、鈴木徳次郎という技師長に任せきりでした。鈴木は王子製紙会社が最初にできる時、吉野屋という仕事師の所にいたとび職で、背中にいれずみのある江戸っ子でした。

当時は、重量のある物を動かす時に使う、機械や道具などは何もなく、とび職が経験から、縄の強さを信じて、重量物を上げ下げするので、危険の上もないうむずかしい仕事でした。

鈴木は決して無理なやり方をせず、失敗のない、なかなか注意深い、気のきいた男でしたので、平三郎にかわいがられ、とうとう技師長まで昇進していたのです。

平三郎は、機械をすえつける時に必要な技術や方法や、てこを利用するわけなどを、いろいろ鈴木に教えました。鈴木は、平三郎のいうことを、すぐにきちんとのみこんで、実行しました。

このようなことから、平三郎は、紙すきの部分でも彼に手伝わせて、アメリカで研究したことをすべて教えました。けれどもとび職あがりの彼は、我がままで、使いこなすのは大変でした。

ある時、平三郎が遠州の工場に行ってるすの間、下谷の待合に入りびたって、三日も会社をさぼってしまいました。これを見た藤山はひどく怒り、

「大川君がいれば、朝早くから夜おそくまで一生けん命勉強するが、るすとなれ

ばこのありさまだ。このような者に、工場のかんとくができるか」といって、すぐに鈴木をやめさせてしまいました。

鈴木はこれまで何度も部下に飲食させていたので、部下は彼がやめさせられたことを怒り、三十人あまりの人達が、いっしょに職場をすててしまいました。

電報をもらって平三郎がかけつけてみると、製紙工場は、ほとんど止まってしまっていました。二日あとに時事新報社へ送る紙もなくなるという有様で、平三郎は自分が工場に入り、社員の中で役に立ちそうな人を集めて、機械を動かす、時事新報社にたいする責任だけは、ようやくはたしたのです。

これが明治三十一年のできごとで、日本でのストライキのはじまりでした。

鈴木たちは静岡の浮月楼というところに立てこまりましたが、お金がなくなり、どうすることもできず、平三郎に助けを求めてきました。平三郎は二度彼らにお金を与え、こんこんと、

「会社へ帰って罪をあやまり、職をなくさないようにしなさい」といいきかせました。

けれども藤山が、ストライキの責任者は平三郎だと攻げきしてきました。平三郎は、

「では私がすべての責任をとりましょう」といって、会社をやめることになりました。

洪沢栄一も王子製紙を去る

この時同時に中上川が洪沢栄一に、  
「王子製紙について、長年お世話になったことは深く感謝しますが、そろそろ私

達にまかされるほうがよいのではありませんか」と言いました。

こうして平三郎は、明治八年以来、自分の力のかぎりをつくしてきた王子製紙と関係のない人になり、同時に渋沢栄一も、この会社との関係をたつことになりました。こうして藤山は、平三郎を追い出すチャンスをうまくつかんで、目的を達成しました。

けれども平三郎が王子製紙をやめてまもなく、ほう風雨で川の水があふれ、会社の設備がひがいをうけました。そればかりか工場の一部が火事でやけ、機械にもそんがいがあって、藤山もまた、すごすごと会社を去ることになりました。

10 ビール会社の合同と上海華章造紙公司かしようこんす

王子製紙が大会社になるために、平三郎の才気と努力が大きな役わりをはたしました。けれども二十五年のいたましいほどの苦心のお返しは、追われるように去ることでした。平三郎は一時不平でいっぱいでした。

しかしこれまでの人生をふりかえって、人をうらんだり、おこったりすることは自分のねうちを下げるもので、感謝の心で通すことの方が幸福につながることでと考えなおしました。

「王子製紙は二十歳の少年である私に、この大会社を思う存分まかせてくれた。このために私は工場経営・会計・経済など、あらゆる方面にわたって勉強することができたのだ。私が財界の一員になれたのは、王子製紙のお陰なのだから、けっしておこつてはいけない。むしろ感謝すべきだ」

というのが、半年後の平三郎の心境でした。このように考えてみると、身体も心もさわやかでさっぱりと心地よくなってきました。これについて平三郎は、次のように語りました。

「それ以来四十年が過ぎ、王子製紙は藤原の努力で立派な事業となりました。あの時藤原が一席を用意し、藤山雷太と私を招いてくれました。その席には思いがけず三井の幹部の団琢磨男爵、早川千吉郎、福井菊三郎、有賀長文などが出席しており、藤原はていねいに、

「先年の王子問題は藤山と大川の二人の争いのようにみえますが、実は三井家事

## 札幌ビール会社の役員になる

※明治三十二年 一八九九年

※明治三十四年 一九〇一年

業整理のため、藤山は平三郎に決して反感を持つていたからではありません。ここに関係者一同においでいただき、めでたくすべてを水に流していただくとうと席を設けたのです」というような挨拶をし、藤山も悪意があったわけではないことを述べ、私と藤山はすつきりした心で握手をしたのです。藤原の好意と二人を仲直りさせようというほねおりによって、長い間のわだかまりが消え、私はとてもうれしい気持で、感謝の思いは今も胸にあふれています。それなのに、もともとと礼儀を知らない私はこの藤原の心づくしにお礼にも行かず、三井の重役の方にも一度の挨拶もしないで過ごしてきた失礼は、本当にはずかしく思っています」

平三郎は王子製紙会社を退職後、自分の財産を調べてみました。その財力は相当なもので、それだけの財産と収入があれば、普通の人ならひと休みしようとするほどのものでした。けれども働きの平三郎は休もうとはせず、札幌ビール会社の植村澄三郎にたのまれて、明治三十二年八月二度目の監査役となり、さらに同三十四年八月には常務取締役となりました。当時札幌ビール会社は、エビスビール会社と対抗するために東京に大工場を開設する計画があり、平三郎にたのんでその仕事をしてもらおうとしたのです。

このようにして吾妻橋の近くに赤レンガの工場が建てられましたが、それは平三郎の計画と監督によって出来たものです。それまでビール工場の多くは山のふもとに建てられ、山の中腹に横穴を掘り、その中でビールを醸造させていました。けれどもその頃新しい研究が行なわれ、太陽の熱をさえぎるためには、横穴よりは空気が

※明治三十九年 一九〇六年

## 華章造紙公司設立

をいっばいにした壁で、醸造室を囲う方が有効であるということで、新工場は厚さ約一メートルの壁で囲いました。その壁は二重の処もあり、三重の処もあってその間に空気をつつみこんで太陽熱をさえぎり、これによって完全な氷室を造ることができたのは、平三郎の主張によるものです。こうして札幌ビールがここから売り出され、はげしい販売競争の結果、明治三十九年札幌・エビス・朝日の三ビール会社の合同となりました。

平三郎が札幌ビール会社のことに熱中していたある日、前から親しくつきあっていたアメリカン・トレーディング・カンパニーのモールスという人がたずねてきて、ひとつの相談を持ち出しました。

「それは今度、上海にフランスの宣教師が主な株主で、アメリカ人もドイツ人も中国人も株を持っているという国際的な製紙会社を建設します。すべてを世話するのはモールスですが、彼の考えとして、東洋で事業をするには日本人を使うのが良く、特に平三郎が一番良いと思うので、多額の株券を設計料として出すから技師長として工場を経営するだけでなく、支払いなどもすべて受け持つてほしい。そしてこれは発起人たちも了解していると言うのです」

この申し出に平三郎は喜んで同意しました。それはこの事業がおもしろいばかりでなく、平三郎が王子製紙の本社や分工場で使用した技師や社員で、今は失業者となっている者が数多くいたので、今この事業を担当すれば、これ等の失業者に仕事を与えることが出来るからです。

平三郎はすぐにこれを引受けました。そして王子や気田や中部の工場での経験か



ら、数日もたたないうちに完全な設計が考え出され、明治三十四年むかし部下であった新井要之助、鈴木実、鈴木徳次郎ら数十人を連れて、上海に入り、まもなく浦東<sup>うらひがし</sup>に立派な工場をつくり、華章造紙公司（会社）の名で開業しました。

部下のうち、新井要之助は後に平三郎が中央製紙会社を創立した時、その支配人となり、さらに樺太工業会社の創立に参加してその重役となりました。

鈴木実も気田工場時代からの部下で、上海には新井より長くいました。平三郎が後に木曾興業会社を創立した時、その支配人となりつづいて中央製紙、樺太工業の重役となり、王子製紙の参事の他日本人絹、樺太工業、上毛電力等の重役をしています。

ただ一人鈴木徳次郎は上海在勤中胃ガンにかかり、帰国後ついに亡くなりました。このようにして華章造紙公司の株主は技師長である平三郎に、毎日支払い小切手にサインすることまでまかせました。当時日本人が、外国人の会社で小切手にサインすることなど思いもかけないことなので、外人居留地ではだいたい問題になったほどでした。

さて工場も出来、いよいよ事業に取りかかるために必要なのは製紙原料のボロを集めることですが、これが中国商人のつけ目でした。

その頃中国では、外国人の会社にはコンプラドルという取引のなかだちをする中国人がいて、売買一切の事務を取りしきり大勢力を持っていました。彼らは会社の株主でもなければ商品の消費者でもありません。会社と一ばんの人々との間に立つて、勝手なことをして利益をしばり取る寄生虫のようなものです。

平三郎はこの害になることの多いコンプラドールを退け、ローチという中国人を使って製紙原料を直接買い集めようとしたのですが、コンプラドールたちはあらゆる方法によってこれをじゃましたので、平三郎も大変こまりました。

けれども上海の原料商人はコンプラドールの妨害のため、華章造紙会社に原料をわたすのをことわりましたが、上海以外の地方には、コンプラドールの勢力は及ばないというのが平三郎のねらいで、直接寧波や広東、漢口から原料を買い集めて、上海に送らせたので会社は少しも原料にこまらず、この戦いはコンプラドールの負けで終わりました。

そしてりっぱな紙が予定どおり盛んに出来、ミスター大川の名はほうぼうに宣伝されました。モールスが平三郎に着眼したところは、なかなかりっぱといわなければなりません。

この上海華章造紙会社の設立について、はじめからかげになり、ひなたになり力をつくしてきた人は、フランスのキリスト教会の総監督ファーザー・ロベータです。この人は牧師というよりも優秀なレーマンといわれ、商売のうえでチャンスをつかむことがじょうずなことで感心されていました。

当時の外国人重役の中には、平三郎ら日本人をかげでジャップと呼んで非常にやがった人もあり、アメリカ側の支配人でモールスの娘むこのポールという人は特にそうだったので、ロベータは日本人にとっても好意を持っていました。ある時ポールがロベータに、「それほど大川が好きなら、ほくの株を全部買ってくれないか」と、できない相談を持ち出しました。ところがロベータは、

※レーマン

世間の事情によくつうじている人

※明治三十六年 一九〇三年

「よろしい、引き受けましょう」といって、すぐそのたくさん株を買い取ってしまいました。この人が平三郎を信頼して、思いどおりに手腕をふるわせたのです。こうして平三郎は、三年ほどの間にモールスらの知人の好意にこたえることができ、自分が日本で事業を起こしたいというのぞみもあって、その持株を高い値段で中国人に売り、日本に帰ったのは明治三十六年のことでした。

## 11 独立した平三郎

東肥製紙会社たてなおす

平三郎が長崎に着いたとき、モールスから、

「熊本にある東肥製紙会社が破産して、買い手をさがしているが、やってみてはどうか」という相談を受けました。

それはもと山梨県知事であった藤村紫朗が計画し、熊本県の富豪を株主として出上がった会社で、同じ熊本出身の印刷局の技師であった安場末喜男が、技師長になつていました。

この会社はかなりの借金があるので、機械の代金をはらうこともできず、そのうえ工場の規律が乱れているため火事を起こし、大きな損害を受けました。その後ようやく再開したのですが、設計のまちがいから機械が動かないという、常識では考えられないような状態で、誰かこれを引き受けてくれる人をさがさなければならなかつたのです。

そこで平三郎はこれを引き受けてもよいと提案しましたが、議論好きの熊本人はなかなか承知しません。なかには、

「平三郎は強情だから何をするかわからない」などという、かたよつた意見の人もいたので、株主の中の高橋長秋という人が、とにかく平三郎に会ってみることになりました。ところが平三郎は、この会社をたて直すことについて、考えていることを堂々と発表したので、高橋はすっかり安心し、

「平三郎なら必ずこの会社をたて直すことができるだろう」と主張するようになり

ました。

平三郎の提案は、

「この会社には多額の借金があるので債権者に一たん会社を引き渡す。そして債権者だけでたて直しをせよ」というのです。

このときモールスもこの会社にお金をかしていたので、平三郎が交渉したところ、  
「全部平三郎に任せるから一番いいようにしてほしい」と言ってきました。そこで平三郎はモールスの代理人として、債権者会議に出席したのですが、結局、今までの株主はこの会社から手をひき、新会社はこれまでの株主に責任を負わせない、ということに決定しました。そして債権者から、

「持っている株の三分の一位はなるべく熊本地方の人にわけてもらいたい」という希望がでたので、平三郎はこの希望をなるべくかなえることに努力をしました。

株主の中に山内栄作という老人がおりました。以前は自分で盤台をかついで魚を売っていた人ですが、今は立派な財産家で油や砂糖、肥料などの商売をして、熊本第一の金持ちと言われるようになっていました。この人が平三郎に、

「あなたがモールスの代理人であることは承知しています。けれどもこの会社を経営するのなら、あなた自身も出資するのでしょうか」と聞いたので、平三郎は、  
「もちろん出資します」と答えました。そこで山内老人は、

「もしあなたがモールスの代理人というだけで新会社を経営するのなら、私は一株も持たないつもりでしたが、あなたも自分で出資するのなら、私も出資しましょう。あなたが五万円をだすなら、私も五万円、あなたが十万円だすなら、私も十

## 九州製紙会社の船出

万円だしました。」といました。平三郎は、

「私ははじめ五万円を出資するのですが、モールズの株も、結局は自分で買い取らなければならぬので、だんだん増えることでしょう」と答えました。このようにして、山内老人、玉木直太郎、田村久八などの富豪が、地方では最大の株主となりました。

このほかに東肥製紙会社の工場が火災を起こしたとき、再築を担当した長谷川太郎吉は、代金をもらうことが出来なくて、それが債権となりました。平三郎はこれを新株にあらためるほかに、石川島造船所が、もとの製紙会社に対して持っている債権を、三分の一ほどの安い値段で長谷川に買い取らせて新株主としました。石川島造船所は平三郎と親しい仲なので、平三郎自身が利益が欲しければこれを買取る方法もありましたが、長谷川に買い取らせて同人に男を築かせたのです。

その後平三郎はモールズの持っている債権に対しては、これまでの親密なあいだがらを気づかって、損をさせることはできないので、元価で自分が引き受けてしまいました。こうしてモールズは安心してアメリカへ帰ることができました。

また熊本九州商業銀行が持っていた九州製紙会社の債権は、平三郎が三分の一ほどの値段で買い受けました。このような事情で東肥製紙は九州製紙会社と名前をかえ、その人間としてだけでなく、財力の面でも、平三郎を中心とする新会社になりました。

平三郎は三井の勢力の下にある王子製紙会社の経営に、人生の半分を費やし、どのように努力をしても使用人のわくをぬけだせなかったのですが、今こそ自分を中

## 平三郎の努力

心とする会社を造りあげることができました。こうして大川財閥を建設する第一歩を踏み出したのですから、この会社を引き受けたことは、平三郎の一生で、最も記念すべき出来事でした。

これまでも工場における平三郎は、ほとんど努力勉強という言葉のうまれかわりのようでしたが、今こそ自分の全財産を投入する新会社ができたのですから、その努力勉強は言葉で表すことができないほどでした。このことについて平三郎は次のように話しています。

これからは今までよりも、もっとたくさん働かなければならないというので、工場のそばにある一軒の家を借りました。そこは六畳と八畳と、脇にふとんや色々な物をしまふ四畳の部屋があります。そういう河端の小さな家を借りて、私はここに三年間おりました。朝はまず五時ごろに一度会社へ行きます。そして皆が出勤し、それぞれ仕事をはじめのを見て家に帰り、朝食をゆつくり食べて、それからまた工場へ行って一生けん命に仕事をしました。

そうなると機械に自分の魂が乗り移ってしまうようになります。人が機械をただの道具として使うようではいけないのです。こちらの魂が機械に移ってしまうに、心身の力をこめて働かなければなりません。

その一例を言うと、ある日曜日、私は紙の断裁機\*の改造をしていました。これが非常に面倒な機械で、とうとう徹夜をしたのです。その夜は大暴風雨だったのですが、機械の改造を色々工夫している間それを知らずに働いておりました。明け方になって全部仕上がり機械を運転して、「これでよし」ということになり、

※断裁機

紙のふちをきりおとす機械

家に帰って食事をしようと思つてでてみると、一面の大水で、家に入ることができません。近くに六メートルもの高さの鉄橋がありますが、その下が六〇センチほどしかすきまがない位の出水でした。これに気がつかなかつたほど機械に精神が入っていたのです。本当に一つのことのうちこむというのはおそろしいものです。

ここで成功してしまえば私は安全地帯に進める。勝負はこの一つのこととあり、と覚悟してやりました。

朝は早く起き、昼間は自分の仕事をして、夜はたいいていの日は主な社員を集めて、いろいろ機械の説明をしてやります。社員の方からもいろいろ意見が出て、相談をすることもありました。そして夜十二時頃になって、又寝る前に必ず工場を全部見廻つてから、安心して寝るのです。

なぜかという、夜の十二時過ぎにはくが行つて見るといふことは、徹夜をして働く人が、自分の努力を見てもらえるので、どれほどうれしく思うかわからないからです。この時の家は、永久に記念にしたいので、大事にしてくれとたので、今でも保存してあるはずで。

又、当時この会社にいた社員たちは、

「大川さんの努力は本当にことばでは言い表せないほどのものであり、機械がとまったといえ、真夜中でもすぐに行つて提灯をつけて機械をくぐり、水道を調べる。まったく職工以上の職工でした。大川さんが酒を一滴も飲まないのは、いつでも工場へ出て行ける用意をしていなければならぬからだと言われましたが、



※明治四十二年 一九〇九年

ほんとうに酒は少しも飲まれなかった。趣味といってもよほどひまな時に夜半に鰻を釣る位のことであって、大川さんは真の趣味は仕事だということを、その通り実行されたのでした」と言っています。

このような特別な努力の結果として、一度破産した九州製紙会社でしたが、第一次世界大戦がおこり、欧米と東洋との経済関係がすっかり変わってしまい、かなりの利益をあげるようになりました。

明治四十二年八月には、東洋汽船会社をどうしたらよいかという大問題がおこり、浅野総一郎から平三郎に至急東京へ帰って、力をかしてほしいと言ってきました。九州製紙会社の事業は、今はもう安全な基礎の上に立っており、みだれていた会社の内部はもはや完全に一つにまとまり、社員は平三郎の性質の影響をうけ、一つの工場気質も育ち、十分の能率を発揮してはいたのですが、平三郎はこの会社にはほとんど全財産を投入したのですから、とても気になっていました。けれども東洋汽船会社のことは、国家的大問題ですので、これもまた軽く考えるわけにはいきません。平三郎は数日考えましたが、結局「九州製紙会社は、基礎がすでに安全なのだからもう大丈夫である。すすんで東洋汽船会社を担当しなければならぬ」と決心しました。そして長谷川太郎吉に製紙会社の支配をまかせて、平三郎の借家に長谷川を住ませ、東京に向かって出発したのです。

## 12 四日市製紙と中央製紙

四日市製紙会社をたてなおす

※伊勢 三重県

※明治二十年 一八八七年

平三郎が、まだ王子製紙会社に関係のあったころ、四日市製紙会社の面倒を見ていたことがあります。四日市製紙は、伊勢の四日市にあり、多額納税議員の木村誓太郎が中心となって、八巻、九鬼、中井などと共に、明治二十年の暮に設立したものです。工場が思うようにいかないの、平三郎に頼んで整理してもらっていました。それは平三郎が二回目のアメリカ旅行から帰って来たころのことです。

当時四日市には鉄道の便がなく、名古屋で下車して小さな舢船はしけに乗り、熱田あつたの沖で百トン位の小型蒸気船に乗りかえて行くのでした。一回二晩泊まりで、それほど多くない報酬で行くのですから大変ですが、この大川医師が毎月一回来診する結果として、四日市製紙会社はその健康を回復して、その後利益を生み出すようになりました。このような関係から三十年の八月、平三郎は四日市製紙会社の取締役の一人となりました。

そこで四日市製紙会社は、いよいよその事業を大きくしようと、静岡県の富士川に近い芝川に、分工場を立てることを重役会議で決定した時、四日市の本社が火災を起こし、丸焼けとなってしまいました。

それは保険証書に判をおす前のことでしたので、保険金を取ることもできなかつたため財政は困難になり、四日市の本社はそのままにして、分工場の予定地の芝川に工場を建設することになりました。

※報酬 お礼のお金

※明治三十年 一八九七年

このころ平三郎は、王子製紙会社のために、遠州の中部に工場を建設しようとして山に入り、中津というところを通った時、ここにたくさんの山林があることを発見しました。大量の木材がある上に水力も利用できそうで、付近には官林があつて、拡張するゆとりもありました。

そこで平三郎は中山道に鉄道が通じるようになれば、ここに工場を起こそうと思ひ、山林、敷地、水利権を合わせて買い取り、田中栄八郎、小西安兵衛と平三郎の個人的な事業として、その日に備えておりました。これが明治三十年のことで、この山林が後の中央製紙会社です。

明治三十一年王子製紙会社に革命が起こり、平三郎が会社をやめなければならなくなりましたが、その間に平三郎の四日市製紙会社との関係は、ますます深くなりました。はじめは工場の病気を診断し治療する医師として、時々よばれる位の関係だったものが、今では四日市製紙会社の工場のすべてが、殆ど平三郎の命令のもとに動くようになり、その勢力は社長以上に大きくなりました。

そして、王子製紙でストライキのために運命を共にした新井や二人の鈴木以下四十余人は、平三郎のもとでこの工場で働くことになりました。彼らは皆うでききの人達なので、その事業はメキメキと進行しました。

平三郎は王子製紙にいた時考え出したセメント張りのかまど三本を、そこに築き上げたのですが、そのかまどの内張りは平三郎自身で仕事を引き受け、かまどの中に二日間も入り込み、食物も上から繩をつけておろすというほどの努力をしました。

これこそ本当に血の出るような働きでした。

このようにして工場が完全に出来上がったのは、明治三十一年十二月ですが、平三郎はまもなく専務取締役となりました。

平三郎が四日市製紙の工場敷地として買い入れた芝川の土地は、芝川の支流が富士川にそそぐ地点にあつて、水力を得るのに絶好のものでした。

富士製紙はこの方面にも拡張のため多くの土地を買い入れておりましたが、平三郎はそのようなことは知らず、その中心の土地と水力を自分のものにしてしまつたのです。そのため富士製紙の連中は大いに怒つて、これにしかえしをしようと四日市製紙の買い入れた水路の敷地の中で、代金支払は済んでいるが、まだ登記をしていない持主二、三人にうまく話をして二重売買をさせ、先に登記を終えました。

登記を先にしたものが土地の権利の先取権があるという法律のために、四日市製紙は富士製紙に水路をさえぎられ、工事ができなくなりました。四日市製紙側はもちろんこれを承知しません。

「代金支払ずみとしりながら無知で欲の深い者をさそいこみ、二重売買をさせたのは事業をじゃまする悪事だ」と反抗し、ドンドン工事を進行させ、一時は百姓一揆の騒ぎをひき起こし、おだやかならないようすになりましたが、裁判で三年を争つてとうとう四日市製紙の勝ちに終わりました。

けれどもこの事件から、平三郎の身にまた一つの災難がふりかかつてきました。

そのころ富士製紙会社は、河瀬秀治、村田一郎、色川誠一などに経営されていま

したが、その中でも色川は鬭争的な人で、このことについて平三郎をうらみ、どんなことでもそのうらみをはらそうとしている時、たまたま平三郎は四日市製紙会社に新案を提出しました。四日市製紙は火災以来、財政が豊かでないので、平三郎は節約に努めたのですが、生産能力をふやすために、四日市の本社で火災にあつた機械を直して、芝川工場で使用すれば、さらに利益を得ることができるので、その財源のために増資したいというのです。

財政困難である会社の重役が、これについて苦心しているうちに、富士製紙から誘惑の魔の手が伸びてきました。平三郎に対して深いうらみをもっている富士製紙の色川は、四日市の専務松岡忠四郎に、

「四日市製紙と富士製紙は互いに競っているが、その工場は隣合っています。この際、二社が合併すれば利益を上げることがはつきりしています。ですからあなたの努力によつて合併することができれば、資金は富士製紙から出してもよい」といふのです。また四日市製紙の専務になりたいという野心のある重盛信近が、社長以上の勢力を振るう平三郎一派をやめさせたいというたくらみもあつて、

「田中栄八郎が山下亀三郎商店から石炭を買い入れているのはけしからん。山下は評判の男であり、この間に必ず不正があるに違いない」というありもしないことを株主中に広めて攻撃したのです。

このようにして、増資問題は一転して平三郎追放問題となり、重役がそれぞれ平三郎にやめてもらいたいと言ひ出しました。平三郎はこのようなたくらみのあることを知らないで、平然としていたところに、いきなり会社をやめてもらいたいと言

い出されて、驚きましたが、静かに考えるうちに、原因もだいたい想像がつかしました。この会社で富士製紙がこわいのは、平三郎一派なのです。

「平三郎を追放すれば、工場能力が減り、そのために会社の死活が問題となったとき、安く買い取るつもりだろう」

このように原因が想像できれば、自然にこれに対する道があります。平三郎は会社の重役に対して、

「あなた方の要求通り、会社はやめますのでご安心下さい。しかし、やはり始めた仕事を途中で投げ出してやめることは私の良心が許さないので、報酬をもらわずに働いてでも、この工場の設備を完備しなければなりません」と言って、翌日から何事もなかったように、いつもの態度で工場へ出て作業を進めました。このことは重役から社員職工に至るまで、すべての人を驚かせました。

このように親切と誠意の火のかたまりを頭上から注ぎかけられては、どんな氷のような心も暖まらないわけはありません。重盛は、明治四十二年専務になり、熊沢一衛かずえとその一派を集めて中心勢力を作りましたが、重盛に引張られた人たちがみな平三郎の許にしがたってしまったので、とうとうあきらめ、平三郎が社長にならなければこの会社はつぶれると感じ、平三郎に願い出て社長になってもらったのです。このようにして四日市製紙会社は、完全に平三郎のさしずのものに、大きな利益を生んできました。

こうして平三郎は、四日市製紙会社と九州製紙会社を自分のものとし、それをよ

※明治四十年 一九〇七年

りどころに、自分が計画して新会社をおこすことになりました。明治四十年、漸く鉄道が開通し、平三郎は前からの計画どおり、中津に製紙会社をつくる準備にとりかかりました。普通の企業家は、前に安く買い取った山林や土地に、高い値段をつけて自分の株式とするのですが、平三郎はそのようなことをせず、山林土地、水利権のかわりとして、元金だけの株を貰うことができればいいと主張しました。

こうして平三郎の他に、洪沢栄一や地方の人々が発起人賛成者となり、新井要之助を支配人とし、斉藤平治郎を工場長として中央製紙会社がうまれたのです。

当時すでに平三郎の事業は、必ず繁栄し、必ず大きな利益を得るといふ信用がありました。

### 木曾興行株式会社おこる

こうして中央製紙会社生まれようとしている時、別の会社を計画するものがありました。木曾の須原駅の近くに大きな御用林があり、木曾川の支流である伊那川の上流に、水力を利用できる場所もあるので、この水力を利用し、御料林の材木を払い下げてもらって、製紙会社を起こそうとするものでした。けれども力のない地方の企業家だけでは成立できず、結局平三郎はこれを引き受けて、木曾興業株式会社と命名し、鈴木実を支配人としました。これもまた十分の利益を生み出し、後に中央製紙会社と合併したのです。

このようにして、はじめ平三郎は、四日市製紙会社と九州製紙会社を持ち、その次に出来る会社は、四日市と九州の両社が新株を持ち、その次に出来るものは、更

に三会社が新株をもつというようにして、会社の成立はやりやすくなり、そのため会社の基礎も固く、ここに近年アメリカで盛んに行われる、ホールディング・カンパニーに似た組織が行われるようになってきたのでした。



### 13 東洋汽船会社との関係

海と日本人

日本人はもともと海洋国民でした。古事記を見ても、私達の祖先に関する記事は海に縁のあることが多いのです。けれども徳川幕府が鎖国をしたために、日本人の海洋心はほとんどおさえられてしまいました。

その後徳川時代の末になり、外国のしげきを受けて広い海へあこがれる気持ちは急げきに起こり、明治の中ごろ、インド洋の航海権を手に入れようとしていましたが、太平洋は相変わらず外国船ばかりが自由に走り廻っており、なかでもパシフィック・メール社の船が主なものでした。

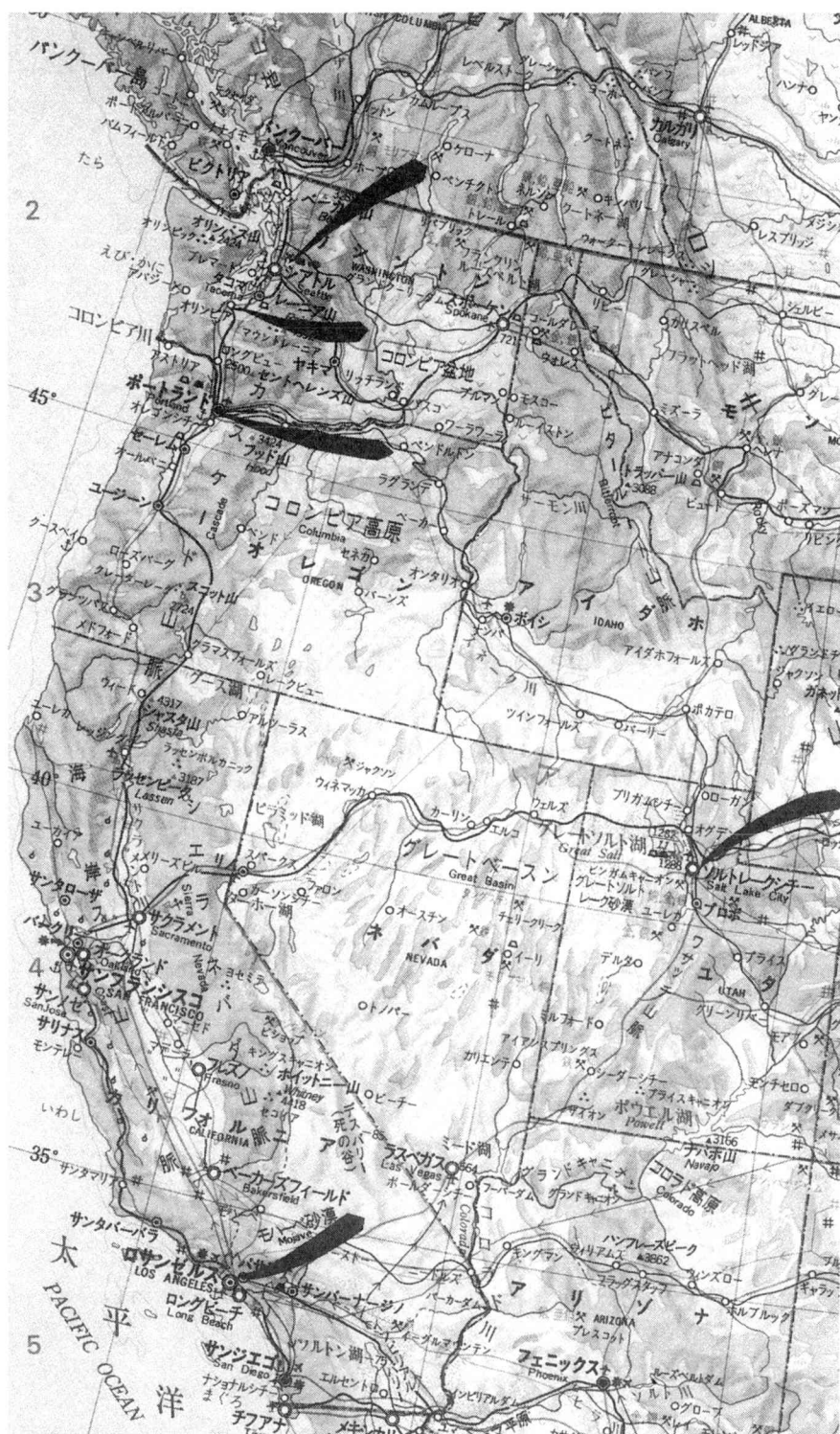
そのころ、元氣いっぱいの浅野総一郎は、じつとしていられず、「日本船で太平洋の王者の地位をにぎらなければならぬ」と言い出し、政府や政党などにかかけあつて、とうとう明治二十九年、帝国議会は「航海奨励法」\*を決議し、海外へ渡る船舶に保護金を与えることを決めました。これは多くの人々の心が、その方向に向かつていたからでもあります。浅野が意見を主張し努力したことが、その時をはやめたのです。

こうしてこの保護金によって、太平洋の航路を開こうと、浅野が中心となって、東洋汽船会社という新会社が起こされることになりました。

明治二十九年浅野は三隻の船をロンドンに注文する前に、アメリカのどの港が日米間航路を開くのによいかを決めるために、まずアメリカへ行くことになりました。その時平三郎も、静岡県にある王子製紙の中部工場に取りつける機械の設計注文の

\*「航海奨励法」 船で海を渡ること  
を良いことだとすすめるはげますこと

東洋汽船会社起こる



ために、アメリカへ行こうとしている時だったので、浅野は平三郎を誘って、いっしょに行くことにしました。これはさすがに大胆な浅野も、アメリカで港を選ぶのに一人の力では心配なので、平三郎の知恵を借りただけでなく、その英語力を利  
用したいからでもありました

地図「シアトル・タコマ・ポートランド・サンフランシスコ・ロサンゼルス・ソルトレークシティー」

「社会科新高等地図」

東京書籍 昭和60年2月10日発行

## 浅野と平三郎渡米す

そしていよいよ出発の日をきめ、船室も予約した後、浅野の背中に腫れものが出  
来、順天堂医院で手術を受けました。手術後、傷口もふさがらないのに、浅野は予  
定を変更せず出発すると言いました。そのため、しばらくの間傷口の手当は平三郎  
の役目となりました。

このとき平三郎の夫人は、重い病気にかかっていたが、逆に平三郎をはげま  
したので、平三郎も安心して浅野と共に出発しました。

さて、船はバンクーバーに着きましたが、ここはイギリスの船舶が根拠地として  
いましたので、問題外とし、タコマ、ポートランド、シアトル、サンフランシスコ、  
ロサンゼルス、五港の中から選ばうと調べはじめました。

ところが、東洋汽船会社の浅野が平三郎といっしょに来て、新しく日本航路を開  
こうとしているという記事が新聞に書かれると、各地の実業家は競って、その寄港  
地になりたいと希望し、商業会議所の会員全員で歓迎するようになりました。

そこで浅野は自分の計画を話し、平三郎が通訳したのですが、これを伝え聞いた  
日本人の中には、浅野の大ホラなどと心よくおもわない人もいました。しかし浅野  
は決してうそばかり並べたのではなく、大きなことを好む性格から、日ごろ夢に描  
いていたことが、自然に口をついて出てきたのでした。それがアメリカ人とは通じ  
あうものがあって、とても評判が良かったのです。

こうして二人は候補地をよく調べましたが、その頃サンフランシスコ以外に、日  
米航路の終点とするのに良い港はありませんでした。それは自然の位置や設備だけ  
でなく、アメリカと日本の貨物を輸送するのに必要な鉄道の関係があったからです。

サンフランシスコは、ユニオン・パシフィック鉄道で、ニューヨークと連絡することでは最良の港ですが、この鉄道の持主のハリマンやその仲間が、パシフィック・メール汽船会社を持っていて、東洋の航路を開いているため、他の新会社がサンフランシスコの港に入るのを好まないという困った事情がありました。そしてこの財閥はなかなか有力なので、普通のやり方ではこの困難を解決する方法はありませんでした。

浅野と平三郎はホテルで、どうすればいいか考えていると、新聞記者や実業家が来て、どこの港を選ぶかを聞き出そうとします。ここで二人は外交手段を考えて、それとなく、サンフランシスコへ新会社の船を入れる大変さを話し、ロサンゼルスを取るような口ぶりを示しました。

ロサンゼルスにもサンタフィーという鉄道があるのですが、それはメキシコ湾に近い荒れはた原野を通過するもので、決して日米航路にとって、見こみのあるものではないのですが、サンフランシスコの財閥をおどすために、ロサンゼルス線を取るような口ぶりで話しただけなのです。

それなのに日本汽船は、ロサンゼルス線を選ぶかもしれないということが新聞に書かれると、世論がわき上がり、「日本汽船がロサンゼルスに寄港することになれば、サンフランシスコの繁栄を奪われるだろう。その原因はパシフィック・メール汽船会社の排他主義にあるのなら、パシフィック社はよく心の広さを示して、日本汽船に便宜を与えるべきである」と論じました。

浅野と平三郎はこの大きな世論を背に、パシフィック社と交渉し、同社の汽船五

※排他主義  
仲間以外をよせつけないこと

東洋汽船サンフランシスコを根拠地と決める

隻と、日本汽船三隻をかわるがわるに加えて、スケジュールを作り、日本汽船には、ユニオン鉄道でサンフランシスコへ集めた貨物を分け与えるということで、サンフランシスコを日本船の終点とすることに決定しました。これこそほんとうに立派な外交的勝利でした。

こうして平三郎は浅野とニューヨークへ行き、王子製紙に必要な機械を注文して日本に帰り、浅野はロンドンへ渡って船三隻を注文して帰ってきました。

そして、いよいよ正式に会社の創立総会を開くという時になって、財界は急に不景気になり、東洋汽船会社の株式募集に申し込んでいた中から、取り消す人が出て、苦しい状況になりましたが、とにかく政府の保護金があったので成立しました。

平三郎は、この事業の創立から関係があるので、重役の一人と予想され浅野もそのつもりでした。しかし会社が政府の保護を受けるため、役所に関係する人を重役にしなければならぬという事情があり、平三郎は取締役にはなりませんでした。

こうして東洋汽船会社はアメリカ航路を開きました\*が、明治三十三年に北清事件、三十七年には日露戦争があり、東洋はますます騒がしくなってきました。これと共にアメリカでは、優秀船を東洋に派遣して海権を争うので、東洋汽船もこれに対抗するため、優秀な船を造らなければなりませんでした。

一方日本政府は、いつまでも東洋汽船会社が、パシフィック汽船に付属するような立場をだまっただけで見ていられず、保護金をふやすので優秀船を造って海権を得るようにとしたので、浅野は大胆にも資金の準備をしないままに、三菱造船所に三隻の巨船を注文したのです。

※明治三十三年 一九〇〇年

※明治三十七年 一九〇四年

※海権 海上の権利

日本政府パシフィック汽船との絶縁をうながす

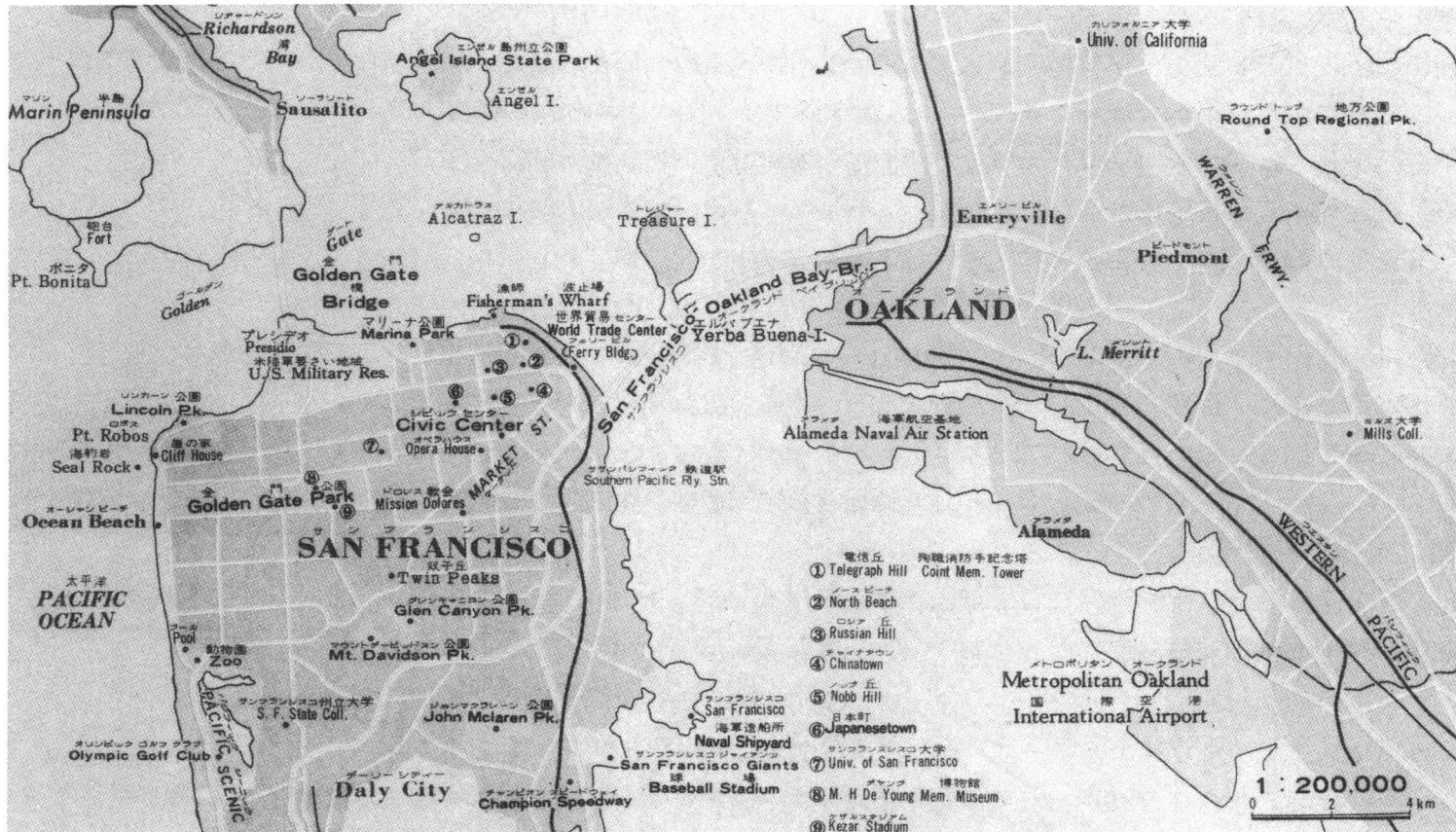
このように国の立場も会社の将来も大変な時に、社長を助けるような人もなく、経営もめんどろな事になってきて、このまま会社を持ちこたえるのもむずかしいと判断した浅野は、明治四十二年八月、九州製紙から平三郎を取締役として迎えました。

平三郎はやがて副社長となり、その第一の仕事が、船の代金をつくることでした。平三郎は安田善次郎を訪問し、東洋汽船がパシフィック汽船の従属の位置から抜け出さねばならない事情を説明し、出来上がった船の代金を貸してほしいとたのみました。最初から他の銀行は考えず、

「たのむところはあなた一人です」といったので、安田は細かい質問もしないで、「お貸ししましょう」と答えました。平三郎はほっとし、安田の大胆で勇気があるのに感心しました。

いよいよ東洋汽船会社は、顔ぶれもとのい、優秀船も造り、今までのハリマン系のもとから離れる計画をたてましたが、それにはアメリカの貨物を、東洋汽船に取り扱わせてくれる別の鉄道と、連絡することを考えなければなりませんでした。

アメリカの鉄道で、東洋汽船と共通の利害をもつ、ジー・グウルドの鉄道があります。グウルドは財力もあり、シカゴ付近の鉄道は大体グウルド系に属し、アメリカの財界での地位はハリマンより上にありました。ところがグウルドが東洋と貿易をする場合、サンフランシスコの重要な通路をにぎるハリマンの鉄道と船舶のため、いろいろ妨害を受けていたのです。そのためグウルドもサンフランシスコまで鉄道を敷くことと、日本の船舶と連絡することの必要を感じていました。ちょうど



地図「ウエスタスタン・パシフィック」

「現代世界詳密地図」 人文社発行

※不文 文字に書き表わさないこと

その時、白石元治郎がグウルドの総支配人ジェツフレと会い、手を取りあおうと相談を持ちかけられたのです。白石は通信省へ報告し了解を得て、グウルドのウエスタン・パシフィック鉄道と東洋汽船会社の間に、不文の協議が成立しました。それからウエスタン鉄道は、一心にソルト・レークからサンフランシスコにむけ、三年をかけて新線をつくりました。

平三郎が副社長として東洋汽船に入った時、この二社の話は確実なものとも誰が思っていました。そしてこの協約の実現のために平三郎がアメリカへ行くことになったのです。

ウエスタン鉄道との堤げいにつ

いて意見をのべる

ある日、通信省の管船局長の内田嘉吉が平三郎を招き、

「あなたもこのたび副社長としてアメリカへ行くわけですが、今回いよいよ東洋汽船がウエスタン鉄道と連絡して、日本が太平洋航路を開始した初めの目的を達することができるといふから、うまくこれを解決してください」といいました。しかし平三郎は、

「ウエスタン鉄道との連絡は考えものです。日米の間をつなぐ鉄道や船舶は、すべて世界的な性質をもっています。ですから、この太平洋航路は日米間だけのものではありません。この航路が短距離のためヨーロッパ人も利用します。これと連絡するハリマンのユニオン鉄道は、アメリカの貨物を集めるだけでなく、ヨーロッパの人々にも信頼を得ているので、グウルドが新しくウエスタン鉄道をサンフランシスコまでのばしても、二、三年の間は世界の旅客はやはりユニオン鉄道を選ぶでしょう。また東洋汽船がユニオン鉄道との関係をたちきって、ウエスタ



平三郎アメリカへ

ン鉄道と連絡を開始しても、航客がまるでないという航海も一度や二度は必ずあるでしょう。そしてかなりの航客を得るまでには数年のがまんが必要ですが、東洋汽船では、そんな状態がいつまでも続くのは困ります。これは大変軽はずみなことで、いけません」といいました。

内田は、平三郎は製紙家としては有名ですが、海運家としては初心者なのに、副社長になってすぐに、このような意見を述べるのは大胆ではないかと言いましたが、平三郎はその意見をくり返して、

「私の意見はほんとうのことです。けれども周囲の事情をみて、冷静に考えて決着をつけるつもりです」と答えて別れました。

こうして平三郎は、白石元治郎を伴いアメリカに出発しました。平三郎は白石に、「ウエスタン鉄道と東洋汽船を、連結しようとした事は君の事業ですが、ウエスタン鉄道の新線がサンフランシスコに引き入れられて、二、三年たつてからの連結案なら良いと思うが、始めから旅客や荷物を東洋汽船に集めることは出来ないと思うから、この事は私にまかせなさい」といいました。

パシフィック汽船にお礼をのべる

平三郎は到着するとすぐにパシフィック汽船へ行き、

「私はお礼をいうために訪問しました」といい、東洋汽船が長い年月パシフィック汽船のおかげで営業できたことと、日本政府が新しくウエスタン鉄道と関係をつくり、今後は一さいそちらで取り扱うつもりなので、これまでのパシフィック汽船の好意に感謝するようだという、政府の命令を伝えました。そしてその上に自分の意見として、

ウエスタン鉄道に意見をのべる

※千マイル 約一六〇〇キロ

「私はウエスタン鉄道のことをよく知っていますが、数年たたなければ、この鉄道で扱う旅客も荷物も少ないことがわかっていきますので、政府の命令には困っています。けれども国がこのような方針をきめ、もし損をしても補償するという以上私はこれに従わなければなりません。それで仕方なくパシフィック汽船とのこれまでの関係を、とりやめることをいうためにここへ来たのです。このことについて、私はこれからグウルド氏と会うつもりですが、話によってはまた良い考えが浮かぶかもしれません」といって別れました。

平三郎は次にグウルド側のジツフレを訪ね、こちらと取引を開始するために、パシフィック汽船との関係をたつたことを話し、

「はつきり申して貴社のサンフランシスコ線が、利益をあげるまでには数年間がまんしなければなりません。ウエスタン鉄道は千マイルの間、荒原を走り、この間ほとんど都市がないので、貨物もなく乗客もいらないでしょう。その点ユニオン鉄道はたしかで優秀ですが、政府の命令なのでこちらへ来たのです。けれども私の意見をいうならウエスタン鉄道は別の良い方法を考えなければなりません。新しく東洋汽船と連絡することをたのみにして、ユニオン鉄道と戦おうなどするのはまちがいです。ウエスタン鉄道を生かすのは年月です。ですから今は、ユニオン鉄道と妥協する方が良いと思います」といいました。

ウエスタン鉄道とユニオン鉄道を妥協していけいさせる

「東洋汽船が三隻、パシフィック汽船が五隻、この船を合わせ、共同のスケジュールを作り、ウエスタン、ユニオン両鉄道の旅客も貨物もたがい自由に取り扱う

ようにし、鉄道から船に、船から鉄道に乗る人々に自由に船や鉄道を選べるようにして、おたがいに栄えるよう協力しあうべきです」とすすめました。このようにすれば東洋汽船は、荷物の少ないウエスタン鉄道と組んで、荷物の多いユニオン鉄道と競争したり、その姉妹会社のパシフィック汽船とけんか別れることもないばかりか、両汽船両鉄道と連絡をすることにより、東洋汽船は最も利益を受けることになり、その上逋信省の面目もたつのです。

グウルド社の総支配人ジェツフレは、この案に少しのためらいもみせず、「ユニオン鉄道がそうするなら私の方はかまいません」と素直に承知しました。そこで平三郎はユニオン鉄道へ行き、副社長のシユウエリンに同じように、

「戦って両方が傷つくようなことはされた方がよい」と話し、こちらもごく短い時間でさっぱりと承知しました。そして汽船の方は両社共同のスケジュールを作り、両鉄道会社と連絡することになりました。この事は日本の汽船会社がアメリカの二大鉄道の間立ってあく手をさせ、はげしい競争をしないですませる結果へみちびいたのです。

こうして協定が出来上がり、東洋汽船の船も通航を開始しましたが、その時の荷物や旅客は、ウエスタン鉄道よりパシフィック・メール会社の方がはるかに多かったのです。両大鉄道を妥協ていけいさせた平三郎の政策は、こうして見事に成功し、三隻の新船の活やくで東洋汽船の景気もよくなりました。

その後平三郎は、自分の入社以前の政府からの保護金をめぐって不愉快な思いをしたり、その他いろいろな事情があつて、副社長を辞め、ただの取締役となりました。

## 14 樺太工業会社設立する

※明治四十三年、四年 一九一〇、一  
一年

明治四十三年、四年頃の事でした。平三郎が東海道を旅行している時、汽車の中で井上静雄という知り合いのひとと、他の若者がしきりに樺太の話をしているのを聞きました。

「樺太はほとんどが山林なので、あのような所で事業を起こせば面白いだろが、私達素人には手を出す方法がない」というのです。平三郎は樺太に深い興味を持ち、いろいろ調べてみましたが、見こみのある所です。そこで田中文太郎を樺太事情調査の理事として出張させました。最初はわずかな材木を切り出し、四日市・中央・九州などの工場に送らせ製紙の材料として試験をしました。次には運送の便宜と気候の関係を調査しました。これらの事に三年もかかりました。

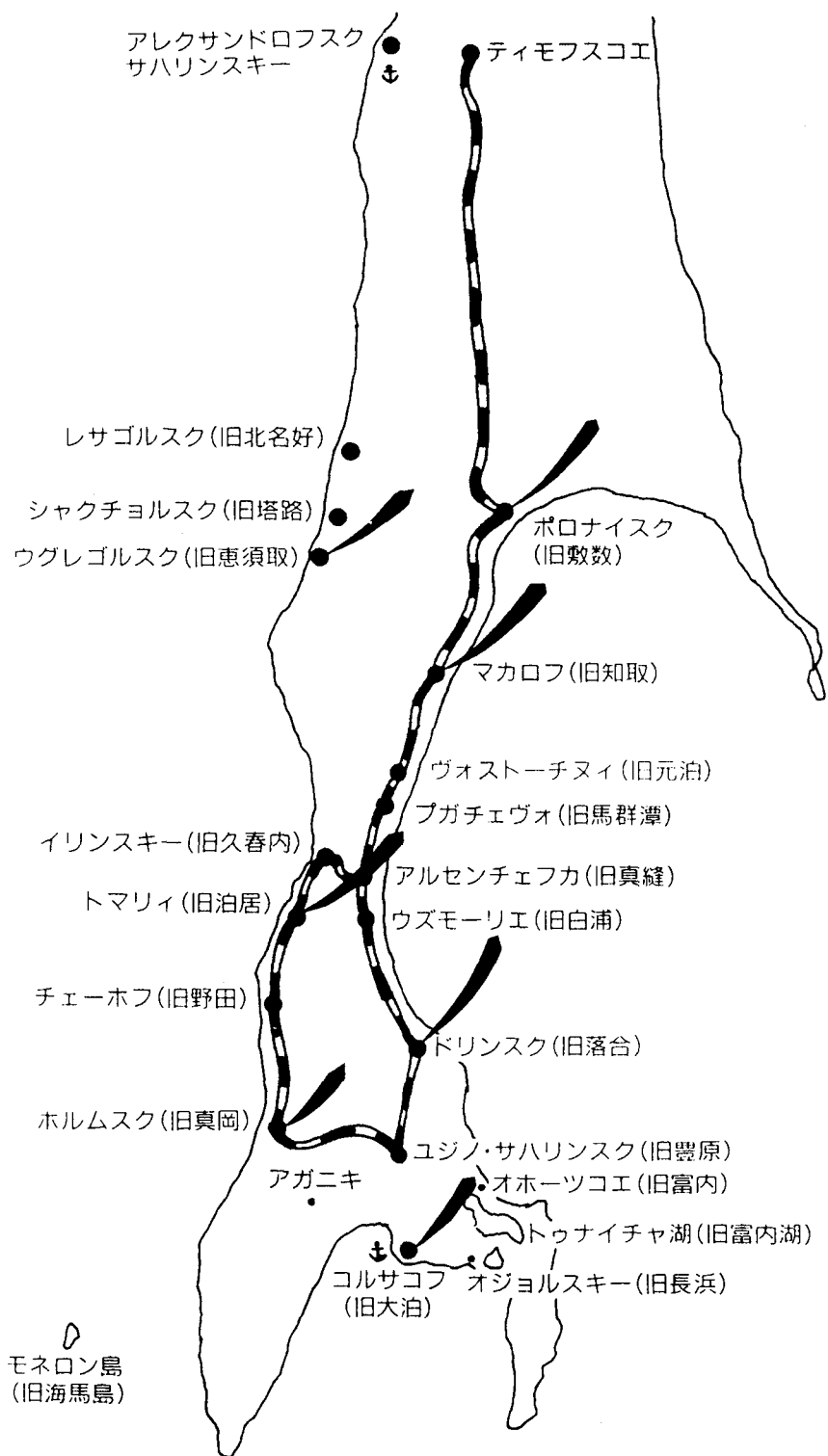
この結果、決心がついたので大正二年七月平三郎は、自分で樺太に行き泊居に上陸しました。この事について平三郎は次のように話しています。

「そこでいよいよ工場を建てるということになって、私も自分で行かなくてはならなくなりました。私の最も恐れたのは、零下三十度という冬になって仕事が出来なくなるだろうかという事でした。

田中文太郎は二年ほどかけて、樺太の沿岸をずっと歩いてみました。私達が注目したのは西海岸です。樺太は先に西海岸から開け、それからだんだん東の方に開けていきました。西海岸は暖流がくるので、東海岸の太平洋に面した所のように、非常に海が荒れるということも少なく、まず西海岸の方から始めようというこ

樺太工業会社設立

※大正二年 一九一三年



※ツンドラ

一年中ほとんど凍結し、夏期だけわずかに表面がとけて湿地となる土地

## 泊居工場

※大正三年 一九一四年

※大正四年 一九一五年

とになりましたが、私が初めて行った樺太は七月なのに、毛皮のオーバーコートを着るほどで、そこはツンドラ地帯のため、手足を洗おうと思ってもきれいな水がありません。人々はしかたなく褐色の水を飲み、湯に入っているのです。われわれもツンドラの水で炊いた飯を食い、風呂に入ったがいやなものでした。泊居に行ってみると炭山があり、海岸にはちよつとした栈橋ができていて、そこから山奥まで石炭を運び出すレールがかかっています。これは樺太庁が石炭を掘って輸出をするということで、非常にのぞみをたくして掘って見たのですが、断層だらけで量も少なかったのです。けれどもこれだけ石炭があれば、まず困らないというところに眼をつけたのです」

こうして平三郎は現場をみて決心を固め、さっそく九州・四日市・中央・木曾工業の四社が力を合わせ、平三郎も私財を出し、渋沢・阿部・岡崎・小西なども加わり、会社はまたたく間に成立しました。最初樺太林産会社という名で始めましたが、ほどなく樺太工業会社と改め、平三郎が社長となったのです。当時の樺太長官は平岡定太郎で彼が平三郎の樺太進出を熱心にすすめ、会社の成立のためいろいろ力をかしてくれました。

泊居工場は大正三年五月に建てはじめましたが、ちょうどその頃世界大戦が始まったため、外国に注文した機械が思うように届かなかつたりおくれたりしたので、これ等の代わりのものを取りそろえるため苦心し、ようやく大正四年八月にでき上がりました。

一方この大戦により、ヨーロッパとアメリカおよび東洋との海運がとだえたため、

## 平三郎、国の工業発展につくす

東洋が必要な紙はすべて日本で製造するようになりました。このような国の異常な状況の中で、パルプはほとんど値あがりし、工場の資金は一年で回収できたのです。これは平三郎の目のつけどころがよく、大変努力をしたためですが、国のいきおいがさかんになったおかげでもありました。

こうして樺太工業会社は、多くの利益を株主にあたえ、国の工業能力を発達させましたが、平三郎はつねにこのことを振り返って、

「決して私の力ではありません。国運のおかげです」と言っています。

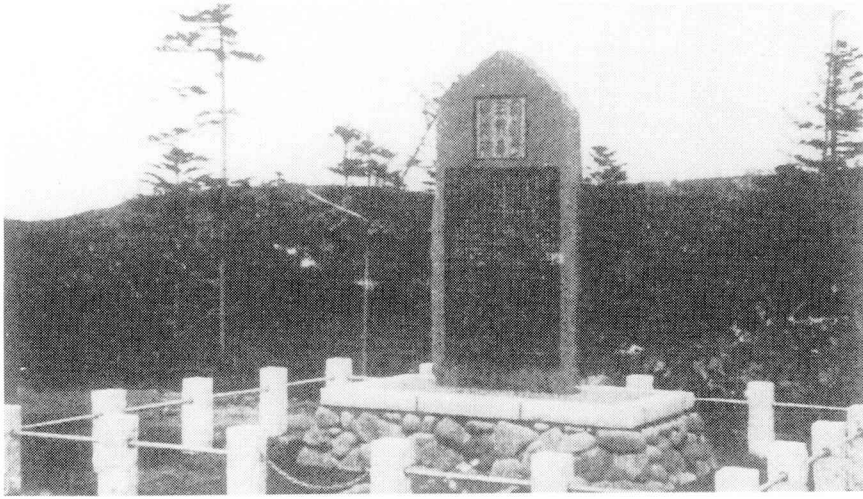
さて、樺太工業会社の工場は主としてパルプ製造に全力を注いでいたのですが、平三郎は樺太をただのパルプ産出地にしておくのは国策上よくないので、一歩進んで製紙の工場をつくるのが、自然の順序であると主張しました。その工場を作るのは樺太の南部にあって、比較的温暖の地を選ぶということで、本斗を候補地とすることにしました。しかし、此の工場で使う材木の伐採権については、まだ許可を得ていませんでした。

## 真岡に工場をつくる

ところがこの間に政変があつて、樺太長官は平岡から岡田文治にかわりました。岡田は樺太に一つの港を作らなければならないとの考えを示し、全島民が賛成しました。

いよいよ港を作る地点を選ぶ時、島民は真岡が選ばれると信じていたのですが、岡田は本斗を港とする事に決めました。そのため島民は深く失望し、失望は怒りとなって、重大な出来事が起こりそうなるようになってきました。

もともと真岡は樺太中最も温暖で、他の地方より十度位高温なので、人も集まり



頌徳碑全景、ウゴレゴルスク（恵須取）創立当時 昭和9年9月

大きな部落となっておりまして。これと違い本斗は寒村で、ここに港をつくるのは無理な決定だったのです。この事から真岡の人達は、

「本斗に繁栄をうばわれる」と大勢でおしかけて岡田を攻撃し、そのうちの二十人ほどは東京に集まり貴衆両院の議員を訪ね、一生けん命実情を話し、さらにその一部の人は、泊居に工場を持っている平三郎を訪ねて、この問題に力を貸してほしいと頼みました。

平三郎は彼等に対して、

「樺太長官が決めたことを攻めたところで仕方ない。私はちかく本斗に工場を建設する計画はやめて、真岡に工場を作り、豊かな栄える町を保てるようにするか、この事は私にまかせなさい」と、とり静めました。

そして樺太長官にこれまでの事情を話し、真岡の工場に必要とする木材の伐採権を許可して欲しいとお願いし、その権利を得たのです。真岡の人達もこれですま、岡田も危機から逃れることができました。

このようにして、真岡に工場を建設することになりました。工場が出来れば職工も集まり、品物も動き、真岡の町もますます栄えていくでしょうが、ここには製紙事業に最も必要な流水のないことが大きな欠点でした。

もしここに、流水を利用する方法がなければ工場を作ることはできません。そして工場を中心とするいっさいの計画は消えてしまいます。しかしどんな困難に対しても、必ず良い方法を考え出す平三郎のことです。

それは、此の付近でただ一つの手井川は小流ですが、その上流には、四十数キロ





※大正七年 一九一八年

平成4年3月 坂戸市役所前庭に移設された頌徳碑

メートルに渡る森林がありますので、この森林につもった雪がとける時、その水量は大変な量に達するはずで、この水をせき止めて大きなダムを作れば、工場に必要な水を十分にとる事ができるというのが平三郎の考えでした。ダムを作ることもそれほど困難ではありません。真岡の町の後には一筋の山脈があり、山脈の果てる所が真岡で、両山接する所は幅百メートル位です。

平三郎は、このせまい所に二十五メートルあまりの堤防を築き一大ダムにして、連山より流れ下る雨水や雪解けの水等を集めて、これを貯えることができるだろうというのです。

そこで平三郎は山林の面積を測量し、雨量や積雪の統計を調べて計算し、一年中工場に必要な水の量が得られると考え、<sup>※</sup>大正七年ダムを築いたので、

それ以来十数年、真岡工場はこの水によって事業を継続していきました。雪水を計算しダムを作るなどという事は、多分世界において他にない事業でしょう。

平三郎はどんな時でも落ちついて、その場にあった知恵を働かせ、対策を考え出したのです。

以上のようにして、真岡に樺太工業が出来たので、しばらくの間人口も増加し、商業のさかんな活気のある豊かな町となりました。

一方本斗の港は、港が出来上がったというだけで品物の出入も少なく、人口の増加もあまりなく自然の勢いに反した作り方が、どのように無駄なものであるかを語る記念物となつてしまいました。

後に泊居や真岡・恵須取<sup>えすとり</sup>の住民が、町を栄えさせた恩人として、平三郎の銅像を

## 泊居工場焼失

建てたのは人情として自然なことでした。

平三郎は、こうして朝日の昇るような勢いによって、さらに奥地に向かって勢力を広めようと調査した所に、恵須取という有望な土地がありました。ここは広大な山林があり、樺太の中で最も広い恵須取川流域の中なので、この流水を利用し木材を動かすのにとっても便利な上に、石炭は豊富でほとんどただのようなもので、いよいよ恵須取に決めようとするちょうどその時、泊居の工場が一夜のうちに焼失してしまいました。<sup>\*</sup>大正十年二月五日の事でした。

此の時、樺太の工場のえらい人達はそろって上京中で、平三郎は留守中のことを心配して早く帰るように命令を出しました。

翌朝早く平三郎の家の電話が鳴り響いた時、

「泊居が火事だろう」と叫んだのは、実に鋭い六感でした。この火事は、機械のしん棒のまさつから火が出たのです。

この頃、第一次世界大戦の影響がようやく薄らいで、ヨーロッパから安い値段の紙が輸入され、今までのように会社の利益がなく、もう一度工場を建てるかどうか考えている時、その年の五月、今度は真岡の工場が焼けてしまいました。付近の山林で夜中に山火事が起こり、会社の方に向かってくるので職工達も一晩中防火したため疲れ、明け方紙くずを枕にねむってしまいました。たばこの吸いがらが紙くずに移ったのです。

平三郎は製紙工場で紙を粗末にしたり、土足で紙くずを踏む者はやめさせるという命令を出し、平三郎自身も工場で紙くずをみれば拾うという位に注意していたの

## 真岡工場焼失

※大正十年 一九二二年

に、このような災難にあったのです。

このことは、平三郎にとって生涯の大きな痛手でした。

平三郎はこの時静岡に居り、この日帰ることになっていました。たゞ重なる災難で平三郎の驚きはどれほどであろうと心配した会社幹部は、前もってこの事を知らせようと養子の鉄雄を横浜まで出迎えさせました。

まゆ毛一本動かさず、いつもと変わらない様子で鉄雄の報告を聞いた平三郎は、すぐに胸の中で工場を鉄筋コンクリートで建てなおす案を決めていました。木材が安く手に入る樺太で工場再建などという場合、たいていの人は木材建築を考え易いものですが、数百年先の事を考えてコンクリートで建築することに案を立てたのは、さすがに平三郎らしいやり方でした。

こうして平三郎は、泊居も真岡も同時に自分から菜っ葉服を着、草履がけで工場へ出入し監督したので、むだな費用を使わず、同じ年の暮には工場も出来上がりました。堂々たる鉄筋コンクリートの工場は、当時東京から北では樺太にしかない大変立派なものでした。この工場の建築中に、<sup>\*</sup>小池国造は自分の持つ落合の製紙工場を見廻った後、平三郎の不幸を見舞うため訪問しました。そして日本製紙界の王座にいる平三郎が、菜っ葉服を着、草履をはいて工場に入り、自分でねじ廻しを持って機械の調子を見ている姿をみて、平三郎に対する今までの考え方がすっかり変わってしまいました。落合工場はパルプ製造専門の工場ですが、小池がこの仕事を始めようとした時、平三郎は、

「製紙事業はなかなかむずかしいから、経験のないあなたがやるのは考えものです

泊居・真岡に鉄筋コンクリートの工場を再建する

※小池国造

一八六六年―一九二五年山梨県生、

明治・大正の実業家

経営者平三郎

## 恵須取工場と大平炭坑

※大正十四年 一九二五年

樺太・中央・九州・中之島製紙  
合併し樺太工業会社となる

※大正十五年 一九二六年

※撰政

天皇にかわり天皇の仕事をする事

よ」と忠告したことがありました。その言葉に対して、その頃小池は、平三郎が自分の勢力範囲に入りこむのを恐れているとしか受け取れませんでした。しかしよいよ工場をはじめてみると思ったより資本がかかり、製品もあまり良くなかったので、平三郎の忠告がむだでなかった事を思い出していました。今平三郎が一生けん命工場を見て廻る姿を見て、こういう人でなければ工場経営は出来ないと強く心に思いました。

これが後に落合工場が、平三郎の事業系統の中に加わるようになったきっかけです。

こうして真岡の工場も落成し、さらに恵須取の工場にとりかかりました。恵須取には河や広大な山林の外に炭山があります。この炭山の有利なことは、小さな山の土を掘ればそれはみな石炭で、しかも火力・硬度ともに申し分のない良炭です。採掘費も安く、樺太から年々内地に送り出しました。

会社ではこれを大平炭鉱と命名しました。そしてこの工場では、新聞用紙をつくることを主とし、多額なお金を出し七台の機械を取りつけました。この恵須取工場は、大正十四年十一月完成し、翌月から仕事を始めたのです。

当時平三郎は、富士製紙会社の社長として、九州製紙・中央製紙・樺太の三工場などのめんどうをみていましたが、大正十五年に樺太・中央・九州・中之島製紙が合併し樺太工業会社となったのです。

大正十四年八月、昭和天皇が攝政の頃、高松宮、久邇宮の両宮をお連れになって樺太を御巡遊された時、真岡工場視察の栄を賜ったのは、同社の歴史に特筆される

名譽なことでした。この時平三郎が、製紙事業について次のような事を申しあげました。

「文化の発展とともに紙の需要がかぎりなく増加しますが、この原料の大部分を海外に頼っていることは、私達の苦慮するところです。日露大戦で樺太の南半分が日本のものになり、この地の豊富な森林が製紙の原料にちょうど良く、今日我が国の紙の需要に充分足りていることは、誠にこの上なくありがたいことです。

このような次第ですので、原料木材の大切なことはいまでもなく、この樺太の地は原材料である蝦夷松えやまつとまつ松の植林に適した地質ですので、原材料の保護植林は農民移植にくらべようがないくらい、この島に最も重要なこととして、代々の長官に申し上げているところです。

寒い時期が長いため、外で農作業の出来る期間が短く、農業移民に適した土地ではありませんので、この経費の一部を森林の保護増殖に注ぎ、山火事予防、播種種、植林などに転用していただく事をお願いしている次第です。殿下には遠い所を御厭いなされずこの樺太へようこそおいで下さり、私達の工場で、工業の一端を御覧いただけただけなのは、国家のため私達の最も光栄とするところです」と。

※播種 種をまくこと

## 15 富士製紙会社に入社する

平三郎樺太工業と富士製紙の合併を企てる

※明治二十四年 一八九一年

樺太工業会社のおどろくほどの発展のいきおいにのって、平三郎は富士製紙会社の合併にとりかかりました。富士製紙は、明治二十四年に創立された国内で最大の会社ですが、平三郎がこの会社に関係しようという計画を立てたのは、その事業の利益のためばかりではありません。実業界の英雄児といわれている平三郎の、権力範囲をひろげる目的があったからです。

平三郎は芝川の土地と水利権を買い取った時、おもいがけなく富士製紙会社と利害の衝突をおこし、裁判で勝ったものの、この時のうらみから、富士製紙の色川誠一郎やその他の重役のために、いったん平三郎の勢力が四日市製紙会社から追い出され、このため平三郎は数年間、四日市製紙でむだな働きをする立場に追いやられました。

富士製紙の株を買いあつめる

平三郎はこのようなしめつけと、はずかしめを受けた富士製紙に、自分の実力を示してみようと思う心が急に起こってきて、収入があるたびに富士製紙の株を買いはじめました。

富士製紙は有望な会社ですが、社内でけんかばかりしていたので、株のねだんは実際のねうち以下にさがっていました。

平三郎が富士製紙の株を買い集めたことが知れわたり、これを聞いた富士製紙の窪田四郎社長は、ちょうど大株主の穴水専務と意見があわなくて困っていた時だったので、

## 富士製紙の社長となる

※大正八年 一九一九年

「大川君のような人物にこの会社をまかせ、統一した経営ができるなら、私は無益な争いはしたくない。会社は大川君に経営をまかせるべきだ」と意見をいって、しりぞきました。

大正八年、平三郎は富士製紙会社の社長になりました。すでにこの会社の大株主であり、会社工場の経営者として第一人者である以上、平三郎が社長になるのを心よく思わない穴水も、しかたなく従うことになりました。

平三郎は社長をひきうける前に製紙会社の各工場を見てまわりましたが、その中には東洋一という機械をすえつけておきながら、工場のきまりなどはいいかげんで、職工が土足で紙をけつたりふんだりしているので、心配なところもありましたが、結局社長になってすべての経営管理をやり直し、モラルを大川流に作りあげました。このところ平三郎は多くの会社と関係を持っていたので、他の会社を見たあと富士製紙に出勤し、会計や作業部長などと会って話しあい、各工場から送られてくる報告書や見本紙に目を通し、自分で命令書を出したりなどして、社長も部下も異常なほどの働きぶりでした。そしてこの時期クラフトペーパーのことを研究していた平三郎は、将来大きな事業になると見込みをつけ、樺太落合工場と富士製紙とを合併して、クラフトペーパーの製造をすることにしました。

## 平三郎クラフトペーパー製造に

とりかかると

※クラフトペーパー

かつ色でしようぶな紙ぶくろなど  
に使う紙

この時富士製紙会社は、芝川工場、駿河の第一・第二・第三の工場、大阪に神崎工場、北海道に江別工場、池田工場、そして平三郎が合併した樺太の落合工場などがありました。また東京の穴水専務の土地に江戸川工場を建築し、中川工場も増加し、最後に樺太の知取に新しく工場を起こしたのです。

知取は落合より百キロほど北にあって、ロシア領の国境に近く、戸数二十軒ばかりの漁村でした。樺太の川はツンドラ地帯にあるため、水がにごっていることが多いのですが、知取川はかなり大きく、深く、その上清水でしたので、ここに新工場を建てることにしたのです。

そして同時に近くの炭山を買い取りましたが、これが登帆炭坑です。

当時知取へ行くのは、深いもやがたちこめているので有名なオホーツク海の荒波の上を、木の葉のような小さな船で十四時間もかけて行くのですから、危険なことは言葉に言い表わせないほどでした。このような場所へ巨大な工場を建てることにしたのは、知取は石炭と木材が豊富だったからです。

これまでグラウンドパルプの製造は、安い大きな水力のある場所がいいとされていたのですが、平三郎は、石炭と木材にめぐまれた樺太では、水力より蒸気力で機械を動かせばよいと考え、知取工場にこれを取り入れたのです。これはまだ誰もしたことのない新しい考えでした。

そこでいよいよ事業にとりかかるには、栄浜から知取まで、延長百四マイル（約一六七キロ）の鉄道を通すことが必要になり、その費用が問題になりました。

成功の波にのって自分の運を信じる平三郎は、自分の力で資金を出すといい、計画を進めました。ところが富士製紙と樺太工業の力で鉄道がしかれ、自分の勢力がちぢめられることを心配した王子製紙会社から、費用の半額を負担するという申し出があり、すべての費用は最初の計算の三倍にもなりましたが、鉄道は、完成し開通しました。平三郎のむちゃともいえる決断によって、富士製紙も努力をひろげ、



利益を得ることになりました。

## 千住工場加わる

そのころ千住に東京板紙会社という工場があり、富士製紙の大株主穴水要七が調査したところ、大変有利であることを発見し、平三郎と二人で株を買集めたことから、工場を手に入れることになりました。後に二人はこれを富士製紙にさし出し、これを千住工場としました。

## 京都工場の旧式機械

このように平三郎の事業は誰にも、とめられないほど、たいへんな勢いで四方に広がり、さらに京都までその手をのばすことになりました。大阪の磯野小右衛門が京都に持っていた製紙工場を、以前から毎月一回くらい見廻り監督していました。今や平三郎は一つの財ばつを作るほどの立場となりましたので、磯野は思い切ってこの工場を買い取ってほしいと提案しました。そこでこれを買取り富士製紙会社の京都工場としたのです。

ところがこの工場を平三郎が自分で引きうけてみると、一つの不思議なことに気がつきました。それは、どの工場でも同じ原料と同じ薬品を使っているのに、この工場のできる紙には非常につやがあるということです。はじめは嵐山から流れてくる水のせいだろうと思っていました。平三郎がこまかく研究してみると、その原因は機械にあることがわかりました。

この会社で原料をこなすために使う、一台の古い機械がありますが、それはイギリス製の旧式の機械で、新人の技師は名前も知らないほど古い物でした。ところがこの機械が大した動力も使わず、原料をぐあいよくこなして、その結果、紙に光沢

## 熊野工場を加える

が出るのです。平三郎はこの機械からヒントを得て、各製紙会社で使用する原料消費機械を、全部まとめて改良しましたので、紙につやが出て、同時に動力を節約することができるようになりました。

同じころ、熊野の奥地から市場へ出す木材の、粗悪な部分や切れはしなどのいらぬものを原料として、紙を製造していた会社が、経営がむずかしくなり、平三郎のところに話が持ちこまれました。

平三郎は、ちょうど、いろいろな会社を一つにまとめて、権力はんいをひろげようとしている時だったので、現場をよく見た上で、富士製紙で買い取ったのが熊野工場です。

## 日本加工製紙会社隆盛となる

※大正六年 一九一七年

日本加工製紙会社は、大正六年、富士・王子・樺太の三社で製造した洋紙を原料とし、これを加工して、アートペーパーを製造する会社です。一時経営がおもわしくなかったのですが、平三郎をはじめとする創立者の努力で立ちなおりました。

## 16 北海道に進出する

平三郎が樺太工業を建設したころ、ふり返って北海道を見ると、そこには相当の利益のもとになるものがあり、それはすべて王子製紙の将来の勢力範囲であると見られておりました。

平三郎は

「私も今では工業界大勢力なのだから、北海道に割り込む権利があるだろう」と、思いきって釧路に会社をおこすことになりました。

大正五年、平三郎は、泊居のパルプで紙を製造するための、北海道興業会社を設立しました。そしてこの工場に必要な動力は、阿寒湖から流れ出す水の落差を利用して、電力を起すことにしました。これも水源地の発見から測量設計まで、平三郎が自分ですすめました。

阿寒湖は釧路を横断する鉄道の大楽毛おたのしげという駅から、約七十二キロメートルの山の中腹にある湖です。ここへ行くためには馬を利用するのですが、ところどころに穴があつて、馬もふつうに歩いたのでは危険なので、はやがけで走らせ、何度もあぶない目にあいながら、阿寒湖の水量や位置や状態をたしかめました。四、五か所発電所にちょうどいい所をみつめました。

ここでおこす電力は、会社だけでは使いきれないほど多いので、広くこれを売って、電灯電力で利益を得ようという欲もわいてきて、発電の装置をつくりました。この工事は高山の中腹での作業なので、なかなかむずかしい工事でしたがうまくで

## 北海道電灯会社独立

きあがりしました。それなのに、後に、平三郎が富士製紙の社長になった時、これも合併してしまいました。

これとは別に、北海道の旭川によい電力会社がありました。これは平三郎が社長となる前の富士製紙会社が、わずかの資本で経営していたもので、旭川市に電灯を売って、かなりの利益をあげていました。

ところが、製紙会社と電灯会社をいっしょに経営するのは、両方にとってよくないので、それぞれ独立の事業にしなければならないという意見が前からあり、平三郎が社長になった時から、電灯の方は、北海道電灯会社として独立しました。

独立といっても富士製紙の関係会社なので、平三郎が富士製紙の社長になったことから、北海道電灯会社とつながりが生まれ、一方は電力の販売地域をひろげることができ、一方は豊富な電力の供給を受けることができ、お互いに栄えることになりました。

そこで北海道興業会社も電力事業をきりはなし、北海道電灯会社と合併し、平三郎は北海道電灯会社の社長になりました。

## 17 朝鮮・鴨緑江沿岸に進出する

※鴨緑江

ヤール川、朝鮮北部と中国の境界  
となつている川

※張作霖 中国の軍人

朝鮮森林鉄道会社をおこす

製紙パルプの原料としては、日本では北海道と樺太の木材があるばかりで、それも乏しくなつてきました。平三郎は朝鮮に原料を求めて、研究に取りかかりましたが、鴨緑江の八〇〇キロメートルあまりの上流の地点でなければ木材はないのです。対岸には相当の木材があるのですが、張作霖の勢力の範囲なので手をだすことができません。

鴨緑江上流のものは水路で一二〇〇キロメートルあまりのところなので、木をきつて水中に投げいれてから、二年後に始めて安東県に到着するという状態です。そこで平三郎は、咸興道方面から鴨緑江上流の水源に向かつて鉄道を作り、奥地の木材を運びだすことにすれば、相当豊富な木材を得られると確信し、この目的で朝鮮森林鉄道会社をおこしました。官鉄咸興駅を起点として、赴戦嶺に達する鉄道をしき、嶺の下に工場を建設し、動力は嶺の上の水力を使うことにしたのです。

この赴戦嶺の水力は後に東洋第一の水力事業となり、全朝鮮に供給しています。このために朝鮮全体の産業に大きな刺激をあたえ、大変便利なものになりました。

けれどもこの鉄道建設の途中で、第一次世界大戦が始まり、ロシアでは革命が起こり、シベリア沿海州の木材は、つごうよく日本の企業の手に入るように思われました。沿海州の森林は海港に接するものが多いので、木材採集はとてかんたんで、朝鮮の奥地で採集するものと比べようがないほどの状態なのを見てとり、朝鮮森林鉄道は、別にその処分を考えなければならなくなりました。

## 朝鮮鉄道会社成立

※大正十二年 一九二三年

このような状勢の中で朝鮮総督府は、鉄道補助法を制定して、日本の実業家に朝鮮の鉄道に投資をすすめました。これにこたえて六社の鉄道が計画されました。けれども大戦が終わった後不景気になり、それぞれの鉄道会社はどこも経営困難となり、総督府政務総監有吉忠一は、これを救う方法として六社の合併をすすめ、みんなよろこんで賛成し、朝鮮鉄道会社が成立したのは大正十二年九月のことでした。

※昭和二年 一九二七年

初代の社長は渡辺嘉一で、つづいて昭和二年平三郎が社長になりました。もともと鉄道というものは、毎年少しは収入がふえるものですが、意外にも朝鮮では行きづまってしまいました。けれども満洲事変以後、朝鮮の形勢は急に活気をおび、長年の心配がようやくなくなったのです。

こうして朝鮮森林鉄道は整理できましたが、木材獲得の目的で沿海州に進んだ平三郎の事業は失敗に終わりました。当初平三郎は、ロシア革命政府は資金に欠乏している時であるから、彼らからの木材買収の契約はかんたんにくまなくはずで、国の交際があるとかないとかは、どちらでも同じことだと判断して、交渉をはじめました。

けれどもロシア側は、労働者の五十パーセント、ロシア人を使用することを主張します。平三郎はこれは大変だと思いながら、一応これを受けいれて事業をはじめました。ところがロシアの労働者は家族を連れてその扶養手当を要求するうえ、何かと口実を作つてなまけるのでその能率は話にならないくらい低かったのです。

このようにして三、四年間数多くのがまんもほねおりも何のいかもなく、大きな

※大正七年 一九一八年

損害を受けたまま事業をすてて仕方なく退くことになりました。

この他に平三郎の経営する鉄道は、城東の地に城東電気軌道・群馬県に上毛電気鉄道・熊本県に熊本電気軌道・静岡県に静岡電気鉄道があります。これらの電鉄はいずれもバスを兼営しています。

この外に根津嘉一郎との共同発起でできた埼玉県の東武鉄道があり、東京地下鉄道があります。又関東省の共弁金福鐵路公司があり、いずれも取締役になっております。

又小田切忠治の依頼で大正七年樺太汽船会社をおこして社長となり、また日本航空輸送会社設立委員として創立に参加し、取締役になりました。また渋沢武之助の石川島飛行機製作所にも相談役として参加しました。

## 鴨緑江製紙会社

鴨緑江製紙会社は、朝鮮の対岸鴨緑江の右岸の安東にあります。安東は、満洲と朝鮮の間を流れる鴨緑江の奥地の森林から切り出す木材を集めて、消費地へ送り出す地として日本人にもよく知られた地点です。

ここに大倉喜八郎が日本政府の仲介で、張作霖との交渉の結果成立した日中合併の木材公司（会社）がありました。

平三郎は、中国に進出しておく事の必要を感じ、大倉に、

「共同出資でその木材を使って、中国の紙を製造する会社を起こすことが、日中の将来の關係上意義がある」と話をもちかけ、大倉と平三郎と半分ずつ出資の約束で大正八年五月に設立しました。

## 日中合併木材公司開業

※昭和六年 一九三一年

その仕事の多くは、九州製紙の技術者によって工事を完成させ、大正十年に開業したのです。

けれども、日中の貿易はどうかすると、日本の商品をおし出そうという動きが多ある上、木材の供給も思うようにならない時もあり、採木公司の意見も「鴨緑江の上流には、もう多量の材木はない」といったり、「大きな木はないけれども、小さいのはたくさん残っている」といったりで、あいまいでゆきとどかず、原料に対する不安が絶えません。

このような状態の時は、技術に力を入れて最良で最高の紙を作って市場に出すことと、費用を出来るだけ節約して、原価を低くおさえることが、ただ一つの方法であると、心のこりのないよう努力しました。

その製品は普通用紙とちがい特殊な中国の模造紙で、他の製品がまねることの出来ないほどの技術的特製を持っています。

こうして満洲事変以来、鴨緑江製紙会社はようやく創業の目的にそうようになり、十五年の間がまんをしてよい結果がえられました。

\*昭和六年満洲事件がとつぜんおこり、満洲国ができ、日本の勢力範囲に入るようになるとともに、たくさんの国家としての利益がふえましたが、なかでも平三郎の関係した事業は、特に強くこの事件の影響を受けたのです。平三郎は製紙パルプを一生の事業として、日本の製紙パルプ事業が、うまくいくのも失敗するのも自分の責任のように感じていました。ところが日本国内では使用できる木材がなく、北海道・樺太にあるものもこれから先のことを考えると、とてもたりそうにありません。



## 人絹パルプ会社を計画す

これは国家にとって大変困った事だと心配していた時、満洲事変がおこり、満洲の大森林で日本製紙界のせっぱつまった状態をやらわらげ、さらにこの産業大発展のきっかけとするため、すすんでこの状態にあわせていこうと考えました。

平三郎が企画しようとした人絹パルプ事業は、はじめは蚕糸のまねから始まり、羊毛のかわりとなり、更に技術が進んで生産費がひくくなるにつれて綿糸と同様に使われるようになってきました。しかもその原料パルプは、今までほとんど外国から輸入していたのです。このような時に満洲の豊富な森林が我が国の勢力下に入ること是一大チャンスです。他のことは別として平三郎は自分の立場から、はっきりとその将来を見透し、細かくすべてを計算して、まず一番にはじめる仕事として東満洲人絹パルプ株式会社を計画しました。

ところが、かんじんの満洲政府には森林の量がどれくらいあるか、あきらかにすることができません。馬賊がはびこって我物顔にふるまったり、交通機関がなく、人が入ったことのない未開の土地であったり、政府としてもこの出願に態度を決めかねていました。そこで平三郎は、満洲航空会社に交渉し、飛行機で上から山林全部の写真を数万枚とり、これを拡大して木の数を書き入れ、おどろくほどたくさんの木があることをはっきりさせました。

このようにして写真と文書を添えて出願し、その後多くの困難を乗り越えてとうとう許可を受けることになったのです。

※明治二十二年 一八八九年

## 18 平三郎の關係したその他の事業

### a 電力事業

平三郎はあらゆる種類の事業に關係してはいますが、その多くは製紙事業から出發したものです。水の落差を利用して電力をおこし、これを高圧として遠くまで送るという仕事は、製紙事業のように大きな動力を必要するものには、ちようど人と米との關係のように重要な問題なので、平三郎は明治二十二年以来特に力をそそいで研究をしました。

そのころ足尾銅山に、アメリカ式ペルトン水車が使われていると聞いて、平三郎は足尾まで行つてくわしく細かいところまで研究しました。ペルトン式は山間の溪流の高い落差を利用するのにもっとも良い方式で、そのころすでにアメリカでは好成績をあげていました。しかもペルトン式水車は、構造がかんたんで價格が安いので、足尾銅山ではこの水車がとても良いとされてきました。平三郎は足尾から帰るとすぐに氣田工場へ行つて、氣田川の水利を測量し、これから十分な動力を得られることを確かめました。そして石川島造船所でペルトン車を製造させ、氣田工場をすべて水力発電にして、蒸氣とボイラーとをとりぞいたのは大変思いきつたやり方でした。この実験から平三郎の動力に対する見方は大きく変わったのです。

このちよつとした水力利用の実験は、平三郎にしげきを与え、動力問題の研究が大切なことを考えさせ、これが電力事業に關係を持つきっかけとなつたのです。

平三郎の關係する電力会社はすでに静岡電力・緑川電力があり、さらに熊本電気

※大正九年 一九二〇年

## 緑川電力会社創立

(取締役) 上毛電力(社長) 大日本電力(社長) 鹿児島電気(取締役)などに力を入れていますが、その多くは電力だけを目的とした会社でなく、製紙事業の動力ということからおこったものです。

静岡電力会社は大正九年の設立で、平三郎が四日市製紙の芝川の水力にあまりがあるのを見さだめて、芝川の沿岸に三個の発電所を作り、その電力を工場にも使い、また静岡県下に広く販売しようと計画したものです。当時は充分の成績をあげていましたが、東京電灯会社とのはげしい競争がおこり、このために静岡市のほかは発電することができなくなり、東京電力にゆずりました。

熊本県下緑川の上流に、豊富な水力がありました。利用されることもなく、数千年間ただ流れ下っていました。平三郎の部下小西喜三郎が、木材調査のために山中に入り、偶然この水力を発見して報告したのです。平三郎はすぐに馬でかけつけ、その場所を歩いて調べてみました。

緑川の上流に、越佐瀧というまれにみる大きな滝があり約七十五メートルの落差があります。平三郎はこれを取り入れて、下流までのトンネルを掘り電力をおこすことができ、大正六年緑川電力会社が創立されました。もちろん平三郎はその社長でしたが、後になって問題がおこりました。それはこの電力を、九州製紙の動力だけに使うことにするのか、それともこれを熊本電気に売って、熊本から安く九州製紙に発電させるかということでした。いろいろ話し合った結果これを熊本電気に売ることになりました。

その成績がとても良かったので、すこし下流の地点に、緑川電力の排水を利用し

て、さらに電力を発生させたのが津留の発電所です。これもまた熊本電気に売り、平三郎は同社の取締役となりました。

熊本電気の系統に鹿児島電気会社があり、両社の間に立ってその調和をはかるために平三郎は、この会社の重役にもなっております。

群馬県利根川上流に片品川という支流があります。水量は普通ですが、急流でその落差がとても大きいので発電には最適地です。またべつに大瀧川という支流もあり、奥日光の温泉岳や白根山の落水を集めた菅沼・丸沼という二つの大きな湖もあります。

これらの周囲は大むかしからそのままの原始林で、もとは山林局のものでしたが、千明賢治はじめ数人が村民を代表して運動を始め、とうとう村有となりました。それがどういいうわけかはつきりしませんが、九州の東郷一気という人がこの山の立木の利用について、平三郎のところへ研究を求めてきました。

平三郎は、中越治郎吉に調査をさせたところ、たいへんな量の木材があるという報告があったので、東小川組合を組織し、この山を買い取りました。この立木を利用して下流の適当な場所に小規模な製紙工場を作り、マッチ洋紙専門に経営すれば、大きな仕事ではないが利益があがると計算したからです。そしてできたのが、上毛製紙株式会社でした。

平三郎は用心ぶかく、立木伐採費用や材質をくわしく知るために、まず試験的に木材をきり出してみました。ところがちょうど第一次世界大戦後の不景気がおそってきたので、思わぬ損失を受けました。

## 上毛電力株式会社創立

世の中は大きく変わり、小さな製紙工場などは北海道や樺太の大工場にはとてもかなわないことに気がつき、平三郎はひとまず製紙の計画を中止することになりました。

けれども災いを福としてしまう平三郎は、この失敗から新しい事業を起こしました。平三郎は部下をつれて、大瀧・片品・利根などの川岸を馬に乗ったり、歩いてりして調査の上に調査を重ね、菅沼から利根沿岸の伏田にいたる落差を利用して、電力事業を起こそうときめました。そして大正十四年上毛電力株式会社をつくり、ここに上毛製紙会社を合併し、伏田・幡谷・千鳥の三発電所を完成し、ここから出る電力を東京電灯に売ることにしました。

平三郎は夏の水量が多い時のあまり水を全部せき止めて、一てきもらさない計画で丸沼・菅沼を修築して大貯水池としました。これは冬の間の水の不足をおぎなつて、一年中同じように出力しようとする理想的な経営です。もちろんこのためになくさんの費用がかかり、世の中の不景気もあつて上毛電力も一時は苦しい立場になりましたが、まもなく成績が向上するようになりました。

北海道の大日本電力株式会社も、富士製紙会社事業から枝分かれしたものです。旭川方面の電灯電力を供給する事業として独立した、小規模の北海道電灯会社に始まり、札幌・小樽以外の北海道全面の広い地域へ電力を供給するようになりました。けれども北海道の水力発電可能な地点はほとんど開発しつくされ、これからは火力設備による発電を考えなければならぬ状態になりました。

そこで平三郎は石炭の豊富な北海道では今後、炭山の坑口付近に火力設備すれば

武州銀行の頭取となる

※武州銀行

後の埼玉銀行現在埼玉りそな銀行

よいと考えました。坑口炭は一番安いのでこれを使用できれば、水力を使うよりも電力の原価は安いと主張したのですが、ただ坑口付近は水が少ないので、コンデンサーを利用することはむずかしいという欠点があります。けれども平三郎のことで、すから、又何とか良い方法を考え出すことでしょう。

## b 金融事業

平三郎は事業を計画し経営する企業家です。企業家はあらゆる所の資本を利用するもので、自分が銀行などを持つ必要はないと、平三郎は金融事業に何の関心も持たないばかりか、むしろさけていました。けれども思いがけなくこれを引き受けることになってしまいました。

埼玉県浦和市に本店があり、県下はじめ東京に二十三の支店を持つ武州銀行<sup>\*</sup>という金融機関があります。大正七年県知事岡田忠彦のおもいつきで、平三郎の従兄尾高次郎を中心として、県下各銀行の頭取と重役たちが集まって組織したもので、尾高は頭取としてその基礎を築きあげました。

けれども大正九年尾高は病気で倒れてしまいそのあとをつぐ人に困りました。埼玉県の出身で財界に信用があり、県下の一流の重役をまとめていける人物をさがすのは大変むずかしいことでした。そこで話あいの結果白羽の矢は平三郎に当たったのです。

平三郎は前から「私のように手広く事業に関係している者は、銀行経営には一番むいていない」と思っていたので、何度も何度も断りましたが、銀行側もあまり

※昭和五年 一九三〇年

熱心にたのむので、郷里のことでもあり、仕方なく引き受けることになりました。

頭取になつてしまうと、「引き受けたからには全力を注いで大成させなければ」という平三郎らしい考えで進み、それから十数年の間に、県下の六、七の銀行を併合しました。

けれども昭和五年<sup>\*</sup>金解禁のあと一、二年の間、国内は大変な不景気におそわれ、銀行も苦しくなりました。平三郎は関係する事業があまりたくさんあるので、もしその一部に手違いがあれば、これが火元となつて銀行にまで被害が及ぶことになり、多くの預金者に迷惑をかけるばかりか、銀行の破局はたくさんの方々の関係事業界に悲惨な影響を及ぼすことになると考え、非常に苦しみ悩む毎日でした。

けれども平三郎のねんいりな用心とねばり強さでこのむずかしい事態をぬけだし、特に第一銀行できたえた永田甚之助が創立以来平三郎を助け副頭取として業務をとりおこないましたので、銀行は順調に進展しました。

平三郎は武州銀行で頭取としてさいはいをふるいましたが、これは決して大川財閥の金融機関ではないことをはっきりさせ、金解禁当時、事業家としてどんなに苦しくても、決して自分が頭取である武州銀行から資金をまわすというようなことはありませんでした。その多くは日本興業銀行・勸業銀行・安田・第一銀行などの好意によつて事業を無事にすすめてきました。

## C 製鉄事業

平三郎の關係する製鉄業の主なもの、日本鋼管・東海鋼業・大島製鋼の三社で、平三郎はそのいずれにも社長として力を尽くしています。そして、この三社とも民間製鉄業では最も有力なものです。

日本鋼管株式会社の創立は明治四十五年\*です。そのころ、日本には誰も鋼管の製造を計画する人がなく、国の産業上からも、とてもおもしろいことだという意見が出て、元政府の八幡製鉄技師長の今泉嘉一郎が白石元治郎をさそい、白石が平三郎に相談したのがはじまりでした。

※銑鉄  
熔鉱炉でとがして作った鉄

この鋼管事業というのは、国内どこにでもたくさんある古鉄屑が主な原料でこれに少しの銑鉄※を加えてとがし、ほどよい鑄型いがたにに入れてかためた鋼塊こうかいというものを、赤くなるまで加熱します。それを、オーストラリア人、マンネスマンの考え出した穿孔機せんこうきにかけると、非常にふしぎな二個の大ロールの組合せ角度の働きで、鋼塊の中心に穴があきます。これを圧延機あつえんきにかけて引き延ばして造るという、比較的簡単な工程で、管かんを作るのはすぐれた機械の作業によるもので、職人の技術はあまり必要ではありません。

八幡製鉄所は十数年間、政府の絶え間ない支持によって技術は進み、工字型、丸棒、平鉄板鋼などまで、すべて作っていました。管類にはまだ手をつけていませんでした。平三郎は今泉の話聞き、もっともな話だと思ひ、大橋新太郎・太田清蔵・岩原謙三・岸本吉左衛門などをはじめ、財界の友人を説得して参加してもらい



ました。そして、さらに静岡・名古屋・大阪・京都の知人をさそい、ようやく資本を集め白石を社長にして、会社を創立しました。

この時、平三郎は、

「製管という技術は新しくめずらしいものなので、はじめはたくさんさんの困難と損失を覚悟しなければなりません。この最初の練習時期の損失をあらかじめ計算し、それを技術に熟練したドイツ人技師の給料に振りむける方針をとり、技師を五人でも十人でも連れてきて、要所要所に配置する必要があります。これが私のまげられない意見です」といって、ずいぶん強くこれを主張し、ついに白石社長を同意させました。

工場建設は進行して、いよいよ製造にとりかかると、技師長のドイツ人、シュミツドがいるにもかかわらず、マンネスマン機の穿孔作業に故障があつて進みません。そこで平三郎はその現場へ行って作業を見、すぐに技師長を異動させる話を持ち出しました。不思議なことにその夜からマンネスマン機が活動をはじめ、これで一同が胸をなでおろしたというめずらしい話もありました。このようにして、事業をはじめて以来相当の成績をあげているうちに、大正三年第一次世界大戦がおこつたため、事業はにわかになりに、毎月大きな収益をあげるようになりました。

平三郎は大戦が終わつた後の事も考えて、白石と話し合い、原料供給の方法についての案をつくり出し、これによって事業の基礎を安定させようという大計画をたてました。しかし、それがまだ完成しないうちに大戦が終わり、財界のようすがすっかりかわり、製品の値段は日に日に下がり、資金のやりくりがむずかしくなり、

大正十年には大々的な整理が必要になってきました。さいわいなことに債権者は日本興業銀行だけで、総裁土方久徴がおしませず援助をしてくれたので、比較的無事に終わりました。

平三郎は当時、会社の事業のことで非常にまじめな考えを持ち、大橋新太郎といっしょに、とにかく自分達の関係する事業で、興業銀行に損をかけてはならないという意気込みで、どこまでも責任を負うことにし、いろいろ整理に心がけました。年月はかかりましたが、苦しい中でも利息の支払などは一度も遅らせたことはなく、多額の元金は、その努力によってすべて支払を終了しました。平三郎の会社整理案は、株主総会で十時間もかけて議論をたたかわせ、たいへんむずかしいものでしたが、とうとう大勢の人のさんせいを得て、意見が通り可決しました。こうして平三郎は社長に、白石は副社長になり、二人は協力して、創立したころの決心をつらぬき通すことを約束しました。大正十年六月十八日でした。

平三郎は社長就任とともに、まず工場の設備を改善し、大量生産を目ざして社員をばげました結果、一年のうちにはつきりと生産の増加が見え、将来の見通しがついてほっとしました。ところが思いがけなく関東大震災におそわれて、ほとんど立ち直ることができないようなありさまになりました。けれども平三郎はじめ、副社長の白石や支配人の伊藤幸次郎ら社内全員の非常に熱心な努力によって、意外に早く再建することができました。

ところがこの努力にもかかわらず、大戦後の不況から、会社の成績もあまり思わしくなくなり、ことに昭和五年、＊金が解禁かいきんになると、その急な経済変動の結果、

※金が解禁  
金の輸出禁止を解くこと

※昭和十一年 一九三六年

## 昭和鋼管合併

※昭和十年 一九三五年

昭和六年には再び思いきった整理をしなければなりませんでした。

これによって、借金の整理をし、設備の改善をおこない、大量生産にますますはげみ、社内から不正をなくし、みんなで会社を建て直そうという気持ちをふるいたせるようにつとめたのです。

ところが間もなく金の輸出が禁止となつて、形成が急に良くなり、その上満洲事変もこれに勢いを加え、日本鋼管会社は国内で指おりの優秀な会社だと認められるようになりました。ここで平三郎たちは熔鋳炉建設ようこうろけんせつの計画をたて、すでにその一基は完成して銑鉄せんてつを生産していました。昭和十一年には他の一基も完成し、この二基によつて、原料を自分の会社でまにあわせられるという、大きな目的を達することになりました。好景気に乗つた日本鋼管会社は、この利益によつて比較的容易に大工事をおこなうことができたのです。

熔鋳炉の完成にともなう利益は、またたいへん大きなものでした。排出ガスを利用して動力をおこし、製鋼事業は廢熱を利用することで、動力も自給しようという目的に進むことができ、またコークス製造の副産物は非常に有益なもので、しばらくこの方向に進もうとしていました。このチャンスにめぐまれて、完全に外国との競争にも、国内の競争にも、じゆうぶん勝てそうに見えました。こうして好景氣の波にのつて増資をおこない、昭和十年、隣あわせの昭和鋼管会社を合併しました。

大正四年、召集の議会で、政府は製鋼事業の發達は国をあげて急ぐ必要があるとして、民間にもわからせ、政府事業と民間事業と同時に進歩させることがいいことだとして、まず政府の製鉄所で鋼片をたくさん作りました。これを民間に払い下げ、

## 東海鋼業株式会社創立

これに加工して売るといふ事業を經營させ、だんだんに製鋼業を發達させようとする法案を決めました。

ところが政府がこのような新案を出したにもかかわらず、これを実行しようとするものはいませんでした。しかし、平三郎の友人岡崎久次郎が非常に熱心に製鋼業創立の必要を説くので、平三郎は安田善三郎・大橋新太郎・服部金太郎などと相談し、東海鋼業株式会社を創立することになりました。しかし、安田は資本のことで意見が合わず、ついに脱退し、大橋も去ってしまいました。残っている平三郎・服部・岡崎が相談しましたが、服部は、

「あなたも私も一人の日本男児ではないですか。發起人中一人や二人脱退したからといって私達までしりぞいてしまうのは、男子のつくすべき義務を失ってしまふようなものです」と主張しました。この一言で一回はとどまることを決め、会社は成立したのです。成立と同時にまたいろいろの問題が起りましたが、農商務大臣仲小路廉の言葉があつて、平三郎が社長として九州若松市で營業を開始したのが大正五年のことでした。それから多くの浮き沈みはありましたが、平三郎のたくましい精神力でのりきることができました。

もう一つの製鉄事業、株式会社大島製鋼所は関東では、ただ一つの大きな製鋼所で、大型船材、大車軸等を製造する設備をもっていました。

平三郎の趣味である歌沢<sup>\*</sup>の友達に、東京製鋼会社社長の山田昌邦という老人がいました。大島製鋼所はこの山田の東京製鋼会社の分工場で、線材の製造を目的として計画されたものでした。ある時平三郎が歌沢を歌おうと山田昌邦に招かれたとき、

## 大島製鋼所買収

※歌沢

三味線音楽の種目の一、江戸時代

流行した端唄の流れ

話がたまたま製鋼工場のことになり、山田は平三郎にこの工場を引き受けないかとい出したのです。

平三郎は少し迷いましたが、浅野総一郎に相談し、すぐに二人で買い取る話を進めました。このことを聞いた大倉喜八郎も加入したいといつて来たので、大川・浅野・大倉で株式会社を組織し、東京製鋼の分工場を買収し、平三郎が社長になりました。大正六年七月のことでした。

第一次世界大戦の真最中で、この会社の営業は非常によかったです。大戦が終わるとともに造船事業はすべてとまってしまい、その影響をうけて業績がふるわなくなりました。そこで、平三郎の関係する製紙事業会社から機械の注文を受けることにして、三年ほどを無事に過ごしましたが、金解禁の影響で、ついに一時工場をとじてしまいました。

ところが満洲事変以来、軍事に関する需要がふえ、造船事業がにわかに忙しくなり、これにともなう一般工業発展の結果、発電機、水車、鋼材などの注文も多くなり、事業界に大きな役割をはたしたのです。

平三郎が社長としてひきいている製鉄、製鋼、製管の事業は三社ですが、民間製鉄業としては最大の勢力を持つものです。この他にも平三郎が重役として関係するものに服部製作所があります。経営者に恵まれず、一時火の消えたようになっていましたが、平三郎が引き受けて整理をおこなうと共に、戦争で社会が景気よくなつたという幸運もあって、たてなおすことができました。平三郎の死にかけた者を生きかえらせるという力は、ここにも現れています。

## 服部製作所再建

## 19 関東大震災から立ちあがる

緑綬褒章を受ける

※大正十一年 一九二二年

※緑綬褒章

実業に精励した者にあたえられる  
賞

五十年前、川越前橋の間を行き来した貧乏士族の子は、今では経済社会のトップとなり、製紙王といわれるようになりました。これらの会社の利益によって、平三郎の私財も莫大なものになりました。その他平三郎が役員をしている会社は六十以上にも達し、大正十一年十一月平三郎は、

「製紙で身をたてこの時代の模範である」ということで、※りよくじゅめほうしょう 緑綬褒章を受けました。

この二、三十年、平三郎の企業は一つとして成功しないものはなく、貧乏工場も平三郎がさわっただけで、たちまち有利な工場となり、平三郎の行くところは雲やにじがわきあがるようないきおいがありました。けれどもさすがの平三郎も天災地変には勝つことができず、大正十二年の震災のために、その事業は根底からくずれはじめました。

平三郎は毎年一回樺太に旅行し、泊居を根拠として、各所の工場を見てまわりました。

関東大震災発生

大正十二年七月中旬、樺太旅行の日時をきめ、事務所から自動車で家へ帰る途中、一つのことかと思いかびました。「このごろの東京は昔の江戸とちがって、電気があり水道があり、建物は高くなり、まちの組織は複雑でこまごまできています。もしここに大地震でもおこったならどうなるだろうか。江戸時代とちがって、大変な被害をもたらすことになるだろう」ということでした。このような心配とともに、近いうちに地震がおこりそうな気がして、「その時はこうしなければ」など

と考えているうちに、自動車は自宅の玄関につき、家人に会うと同時にさきほどの考えは夢のように消えてしまいました。

八月一日、東京を出て樺太に渡り、各所の工場を見てまわり、九月一日豊原に帰り田幡秘書をつれて永井樺太長官を訪問し、昼食をごちそうになり、三日には平三郎が長官はじめ人々を招いて宴会をする約束をして、旅館へもどつてから、明後日の計画を話し合っているところへ、

「横浜に地震があつて、大火災をおこし、今周囲に燃え広がっている」という電話がありました。これは神奈川県知事が、横浜にとまっている東洋汽船会社のコレヤ丸の上から、大阪府知事と兵庫県知事に向かつて、米の救援をたのんでいる無線電信が、偶然樺太の無線電信機に受信されたのです。この時は東京のことはわかりませんが、

「東京と横浜の距離ですからおそらくはまぬがれないでしょう」と話しあつていました。ところがしばらくしてまた長官から、

「東京に大震大火があり、本所深川の全部が滅亡し、山の手だけが残りました。帝国劇場がつぶれ、丸ビル、三越に火が移り、帝室林野局にも火が入った」という報告がありました。

平三郎の事務所は丸ビルの付近にあつたので、絶望ではないかと考えられました。そこで予定を変更して帰京することにしましたが、船は三日に一度しか出ませんので、三日の宴会を中止してその日の船に乗ることにしました。平三郎は東京の大部分がやけてしまったとなると、銀行の取引は停止しているに違いないと思い、樺太

で集められるだけの現金を集めさせました。そして一行はかんづめその他の食料を持って、三日大泊を出発し、四日小樽に到着しました。ところがこの時、朝鮮人が反乱を起こして、東京を占領し、名士数百人を殺したなどといううわさが、小樽に入って来ました。田幡は、

「どんなに大変でも平三郎はいそいで帰るべきだ」と主張しました。大川夫人と娘の孝子は平三郎の帰京に反対し、田幡は、

「平三郎が先頭に立たなければ、東京の事業の始末はつかない」と反論し、結局平三郎はようすがわからないうちに帰るのは早計なので、田幡に全部をまかせることにしました。

「重役でも、社員でも、必要なだけ、何人でもつれて行きなさい。私はこまかく命令書を書いて渡そう」と平三郎は自分でこまごまと書きましたが、その中には、「洪澤翁はどうしているか、浅野総一郎のようすはどうか、丸の内大川事務所・富士製紙・浅野セメント会社は多分震火にあっただろうが、社員はどうしているのか、その他私に関係する各会社はどうなっているのか、これについてくわしく報告しなさい。今は電信は不通となっても、そのうちに通じるだろうから私はその報告があり次第、すぐに出発する」などと書いてあります。そして樺太で集めた金は、数人に分けて持たせ、田幡が指図した時でなければ、出してはいけなと命じました。このようにして、田幡を中心として樺太工業の常務取締役新井要之助などが一隊を作り、五人の人夫を連れて東京へ出発することにしました。

平三郎は樺太で、震災のしらせをきいた時、東京出発の前日丸の内のお濠端を通



りながら、偶然感じた大震災予感が、現実になったのを見て、一つの人生観が生まれました。

東京が火の海となって、一切の事業がほとんど消失したとすれば、どうすれば良いかを考え始めました。東京の状態がうわさのとおりなら、富士製紙や、浅野セメント、その他私の関係する会社の人々は、ほとんどが圧死の悲運にあっているだろう。私が東京へ帰ってまずしなければならぬ仕事は、鉄筋コンクリートのこわれた中から、田中栄八郎や、浅野総一郎や、その他親戚や部下の死骸を掘り出すことではないだろうか。私が事業拡張のために借り入れたものは、私がこの世に生きていく以上返さなければならぬが、他人にかしたもっと多くの金はとも返してもらうことはできないだろうから、私は大きな借金だけをしたのと同じことになるが、この借金を返すことができるだろうか。私は帰京次第すぐに、私の資財を処分して、できるだけ借金を返さなければならない。

そして事業の方は、どのようにしたら良いか。まず各工場の職工を集めて、私の思っていることをすべて話し、一つの新しい組織を作るより他はない。まず私の資材を投じ借金を返すが、それで不足のところは返しようがないから返さない。その代わり貸したお金も取ることができないからこれは取らない。ここで全部やり直しをする。工場の職工らには、味噌と米だけを与えて働いてもらう。こうして関係者はすべて飯だけは食べられるようにする。そして製品を販売すれば、利益を生むだろうから、利益があればその三分の一は株主に配当し、三分の一は借金の返却に当て、三分の一は職工に分ける。私はただ食べていけるだけのものをもらえば良いと、

平三郎はアメリカにいた時に読んだことのある、ドクトル・ホリヨークのエコノミックス・システムの中にあるコーポレーションの共同作業説が、一道の光のように湧いてきました。このように最悪の場合を想像して処分法を考えれば、震災で受けたショックは思つたよりやわらぎました。

そこで平三郎は樺太や、小樽で、社員や職工にこのような理想を述べ、

「みなさんこの大災害に会つた以上はがまんしてこの運命にしたがい、全員が兄弟のような気持ちになつて、争わず、協力し、心を一つにして、力を發揮しなさい」と話しました。

そのうちに大川義雄のうつた電報が小樽に着きました。このころ平三郎の住居は向島三冊稲荷の近くにありましたが、震災の時は養子鉄雄は九州の工場を巡視中で、義雄だけが留守をしていました。

震災により起こつた大火は向島一帯をなめつくし、平三郎の家の近くに迫つて来たので、義雄は万一を思つて鉄雄の乳呑み子を連れて北海道に避難するつもりで家を出、電報をうつてから汽車にのりました。その電報には家は焼けていないらしいと記してありました。

平三郎の家は明治三十一年王子製紙社をやめた時買い取つたもので、六千坪の広大なもので、森林や池もあり、火災をさけるには、ちょうどよい場所だったので、付近の住居から焼け出されたものが数千人なだれを打つて、大川邸に走り込んだのです。けれども義雄が避難した後、火は隣家まで焼きつくし、地境の木はやけ、その火は瓦の落ちた屋根に移るといふ状態だったので、避難民はまた大声でさげびな

がら走り出してしまいました。

この時大川家の二人の下男がふみとどまって火をふせぎました。中でも歙吉は付近からおそいくるほのおを防ぎひとり何人分もの働きをして、ついに四方の隣がやける中、平三郎の家だけやけずにすみました。この下男はいつもは無口でのろまなのですが、異常の時に異常の働きをして、大川家を守ったのでした。そのことがあつて後、平三郎がその功勞をたたえ厚くねぎらいました。

一方、田幡は北海道電灯会社の穴水熊雄と合流して、東京に向かいました。青森駅で切符を買おうとしましたが、この時汽車はすでに戒厳令の下にあり、北海道長官の証明書がなければ切符を売らないというのです。田幡はそのような証明書を持っていないので、すぐに陸軍司令官を訪ね、ようやくの思いで十枚の通行券を得て、汽車に乗りました。けれども人夫らは汽車の屋根に乗るといふような状態でした。こうしてやつとの思いで五日の朝、一行は大宮に着きました。そして浦和の武州銀行によく到着し、ここで北海道を出発後始めて、にぎり飯と味噌汁をじゅう分に食べ三日間の空腹をやしたのです。この時東京に現金を持参するのは危険なので、一切武州銀行に預け入れました。田幡が平三郎の事務所は無事であったのを見て自宅に戻ったのは午後三時でした。

平三郎はこの報告をうけてはじめて東京に入りました。自分の関係する会社はほとんど全滅したものと思つていたのですが、被害はそれほどでもないことがわかりました。樺太や北海道では最悪の場合を想像して、すべてを最初からやり直すには、コーポレーション組織でやるべきだと決心し、ようやく目の前が明るくなり、肩が

軽くなったように思われ気持ちが落ち着きました。ところが東京へ帰ってみれば、想像したほどひどい状態ではないので一安心したものの、今後どのようにすればよいただろうかと考えて、かえって苦痛に感じました。

平三郎の關係する東京の工場でこわれたものは一つもなく、ただ壁にひびがはいったくらいのものでした。富士製紙・浅野セメント等の本社の消失と、市中の倉庫に保存した紙や、その他のものに多少損害があり、代金を貸してある紙屋が大部分倒産したのが損害のすべてでした。

そして要求するより先に銀行から平三郎に話があり、地震中の借金の始末はできませんでした。

こういうことがあつて二十五日ほどで支はらい延長の法律ができ、震災手形というものについていろいろ定められました。平三郎が終生の誇りとしたことは、自分が頭取である武州銀行が、この混乱の中で一枚も震災手形を出さなかつたことです。震災手形というのは、処分のつかない手形をもとに日本銀行から金をかり、一時をすますという出世証文しゅっせしやうもんのようなものであまりいいことではありません。

平三郎はこれまで武州銀行のこの業務に対していましめ、

「新銀行の失敗しやすいところは、おもに貸付の方法のまずさにある。資金を集めるのはむずかしくないが、この資金の運用がむずかしい。そして失敗は主として個人に貸し付けることから起こる。個人はある時はまちがいをするが、会社は根拠がありみんなの力があり株主のかん視があるので個人ほどまちがいはない」といってげん重にこの方針を守らせました。これが武州銀行が、一枚の震災手形も

貴族員議員になる

※昭和三年 一九二八年

出さずにすんだ最大の原因でした。

平三郎は北海道でこの災難を思い、いろいろ計画をたてながら、

「天の神はどうして日本にこのようなひどい災害を与えられたのか」とためいきをつき同時に、

「神はわざわざいを下して私の力をためされるのか」とも思いました。

今こそ平三郎は、その勇気と才能によってやけあとから再びたち上がったのです。

\*昭和三年、田中内閣は平三郎が工業界に貢献した功績を見て、天皇にすいせんした結果、平三郎は貴族院議員になりました。

平三郎が樺太で震災のしらせをうけてからの心の動きは、中央製紙の重役三氏宛に送った、次の手紙によって知ることができます。

菅井 穂

野呂 駿 三 殿

問 七 助

今回の大震災は驚きの外ありません。私は樺太にいたのですが、一日の夕方同地の無線電信で、神奈川県内務部長が兵庫・大阪に大変災を知らせ、救助を求め、悲電を受信したことは始まり、その報告は今までにない大事変をもたらしました。丸ビル・海上ビル倒壊・行方不明一万人・その他おおげさな知らせもあり、東京全滅を信じないわけにはいかなかったのです。いそいで帰ろうとしたのですが、田中・藤田・長谷川など一人も無事でいないのではないかと思われ、各工場長を集めて同行させ、小樽に着きましたが、なお東京からの知らせはなく、ます

ます悪いことばかりを考えて希望を失い、当時の胸中は今思い出してもとりはだ  
がたつほどでした。

多くの会社・多額の資本・十万人以上の人の生活、私がひとりで震災後の整理  
をしなければならぬとしたら、これは神でさえ、たえられないことで、どうし  
たらいいかと非常に思わされたのち、突然さとりがひられました。私が一人  
で整理するには、身命・資産・名誉をすててこれを事業にささげ、貸したお金  
はせい求せず、かりたお金は一切支はらわず多くの職工と共同生活をし、一つの  
新社会組織を創る事しかない。こうさとしたしゅんかん身も心も軽くなり、目の  
前がふしぎに明るくなってきました。事業・資産・名誉は、生きている間中、私  
をせめさいなみますが重荷ではないのです。

帰ってみると、みな無事であることがわかり、事務所はこわされていないばか  
りでなく、窓ガラス一枚も破損していません。向島の本邸は周囲が焼けているに  
もかわらず一軒だけが残りました。根岸・谷中の両邸も何の損害もないのを見  
て、再び世の中のいろんなものに執着する以前のおろかな自分に戻った事を、な  
んとなく恥ずかしいと思っています。

尚お話ししたいことがあります。御目にかかってからにします。

## 20 富士・樺太・王子製紙会社合併する

昭和四年、田中内閣がたおれ、浜口内閣が生まれました。この内閣は支出をきりつめることと、金の解禁を政策の根本としましたが、そのきりつめ方はこつけないなほで、中央と地方の官庁から委員を出して、節約につとめることを各地に説明してまわらせました。

倹約節約けんやくをすることには誰も反対はしません、物事を全体的に見る力のない委員のために、すべての新事業、新計画がとまってしまいました。世の中に活気がまったくなくなり、天保てんぽうの改革をおもい出させるほど、いやな空気になってきました。たとえば、あと少しで開通して、物価の流通をたすけ、産業をさかんにすることができる鉄道も、予算をけずられ、工事がつづけられず、長年の苦勞のかいもなく終わってしまいました。

また「金の輸出を禁じるからいけないのだ」という意見が出て、輸出禁止をやめました、輸出品のねだんがあがるために量がへり、その結果、工場の閉鎖、会社の倒産が増え、国民の物を買う力は最低になり、失業者は増え、多くの人が食物を求めて故郷へ帰っていきました。

この不況の影響をうけたのは大会社でした。どんな事業も、財界の融通ゆうつうが基礎になつているため、財界の信用がへり、あぶないということ、融通がとまってしまつては、堅実な事業でもぐらついてしまいます。

不況下で苦心する平三郎

予想どおり、一番の反解禁論者で、最大企業家の平三郎は、不況の影響を受け、

用心が必要になってきました。

大川財閥は、何といても樺太工業が中心であり、富士製紙その他はそれを援助するもので、まず中心をしつかりさせなければなりません。

平三郎はこれまで調子よく事業を大きくしてきたので、自分は新しい事業を求めることと工場の経営に全力をつくし、樺太工業の経理などは田中栄八郎と藤田好三郎にまかせていました。

樺太工業の信用を保つために大変な金額が必要なのがわかり、平三郎はこれをすべて自分で都合することに決めました。その時平三郎は武州銀行に預金がありましたが、このような時に預金を引き出して、銀行を危険な状態におとし入れることをおそれ、すべての知人の助けをかりて金策の工夫をし、ようやく乗りこえることができました。

浜口内閣の政策の結果、富士製紙会社の営業の成績も思わしくなくなり、同業の王子製紙の成績もだんだん下向きになってきました。

昭和四年、富士製紙会社の専務であり、大株主である穴水要七が病死しましたが、これによって平三郎の心配することがおこりました。穴水の持っていた大量の富士製紙の株を引き受けなければ市場に売りに出され、株価の大暴落につながるおそれがあるため、平三郎はなんとか現金を用意して待っていました。何の連絡もありません。思いがけず王子製紙が全部買い取ってしまったのです。

これは穴水が富士製紙会社の全権を平三郎ににぎられるのをきらい、家族に遺言



※昭和七年 一九三二年  
日本製紙界の統一成る

状を残して実行させたのでした。そして富士製紙会社に王子製紙より藤原銀次郎・高島菊次郎・小笠原菊次郎らが入社し、小笠原が専務取締役になりました。

王子製紙は平三郎と同じ量の株を持つことになり、平三郎と同じくらの力を持つことになりました。

このあと数カ月のちに、経済界が急に不景気になり、大混乱をおこしました。平三郎は今までにない難関と戦いながら、昭和七年をむかえました。

そのうちに大阪の富士製紙の株主が、「富士製紙と王子製紙とを合併すべきだ」といつてきました。平三郎は静かに世の中のものなりゆきを観察して、ここで両社を合同することが、あらゆる方面から考えて、最良の策と思ひ、これに賛成しました。そして富士製紙と樺太工業の両会社を王子製紙会社に合同し、藤原銀次郎が社長になり、平三郎が名誉社長、相談役となりました。昭和八年五月のことでした。

こうして日本製紙界の統一はここに完成し、外国に対しても十分に対応できるようになりました。

※昭和八年 一九三三年

## 21 台湾に進出する

台湾は砂糖の製産でその経済をささえています。このため、さとうきびの栽培は島全体でさかんです。さとうきびの絞りかすを「バカス」といいますが、製糖業がさかえると同時に、バカスの出来高も年々ふえてきました。

バカスは石炭の代わりとして焚き、蒸気と動力とを十分に自給してきましたが、これでもまだ余力がありました。

このバカスを、ただ石炭の代わりに使っているだけでは惜しいということで、これを紙に製造する計画は、有志の人々によって古くからためされ、実行もされてきました。けれども障害があり、目的を達しないままになっていました。

平三郎はこれを非常に残念に思い、研究に研究を重ね、蒸煮薬を選び出すことによって、バカスを優良な印刷に使う紙にできることを確かめました。

そしてこれまでの研究に関係のあった台湾銀行・昭和製糖会社などと話しあって、今まで使っていた機械を改良整理し、小規模ながら印刷用紙を、東京と大阪へ送り出すことにしました。これで一つの営業会社として、台湾紙業は成功したのです。昭和八年のことでした。

これをためしている間に、台湾の林地にはどこにも鬼萱おたがやという植物があるのを見つけました。鬼萱は幹の長さ四、五メートルくらいもあり、大きなものは七メートルあまりにも達します。これをバカスとともに製紙用に使ってみたところ、同じ成績をあらわしました。

# 台湾興業会社創立

これで原料の心配がなくなり、前より少し規模を大きくして、新しく台湾興業会社を創立しました。工場地を宜蘭州羅東に決め大抄紙機二台で印刷用紙をすき出すことにしました。この会社はほかに「テキス」という壁や天井を張る建築材料をつくって、販路をひろげました。

紙の原料となる木材が年々少なくなっていくこのころ、バカスや鬼萱を紙化する事業は、国家的に有益な事業であることはいうまでもありませんでした。



「世界全地図・ライブアトラス」 講談社 平成4年11月17日発行  
地図「台湾」

## 22 病から再起する

富士製紙・樺太工業・王子製紙の三社の合併がきまったのは、昭和七年十二月の株主総会でしたが、翌年春ごろから平三郎の健康が思わしくなくついに病の床につきました。

活動を第一としている平三郎は、床についてもなおお事業上の指図をしていきましたが、さすがの平三郎も病気には勝てず、一日一日体が弱り、昭和九年二月の初めには重態と伝えられ、家人をはじめ、古くからの知人や部下たちもみな心配するようになりました。

しかし、気力さかな平三郎はついに病気にうち勝つことができました。昭和九年の冬には再び立ち上がりました。そして昭和十年二月二十六日、帝国ホテルで自分から祝の宴をひらき、病気の間、心配してくれた友人等千三百人余りを招待しました。

長男義雄と秘書の田幡鉄太郎の二人が総務委員となり、百二十八人の委員を作つて式場を準備したというのですから、その宴会の盛大さが想像できます。

式は田幡鉄太郎の開会の辞によって開かれましたが、やがて平三郎が杖をついて、病後のやせた体でテーブルについたとたん、来賓の心からの拍手と賞賛の声がいくつもの雷が鳴りひびくように会場にわきおこりました。平三郎は病気の間、来賓が示した友情に対して、ていねいな感謝のことばをのべました。そして、

「友人親戚の中には、私の老齢と衰弱をあわれんで、これからはなるべく休養し

自祝の宴をひらく

※昭和九年 一九三四年

## 藤原銀次郎の祝辞

なさいとすすめてくれる者もあります。私はその深い思いやりに対して心から感謝をしますが、そのすすめに従うことはできません。

私がひどく貧しい境遇から立ち上がって、六十年間努力したのは、ただ富を作るためばかりではありません。私は事業によって、日本を盛んにするために努力したのです。事業がなければ大川はありません。

医師も今後十五年間、私の生命を保証してくれたと信じています。そしてこれは、自分の思い通りゆったりした生活をしなさいということではなく、あなたも持っている才能を発揮しなさいという天の命令だと思い、これからは病氣から生き返った新しい気持と、全身の力をつくして、実業界につきすすみたいと思います。この意味をもつてきょうの喜びの宴を催したのです」と結んだとき、来賓は荒れくるう波のように、大きな拍手や足拍子で賛成の心を表しました。人々が、再び立ち上がって活躍する平三郎に、どんなに大きく期待しているかを示すものでした。

平三郎が座席に着くと、藤原銀次郎が立つて次のような祝辞をのべましたが、それは無駄のない立派な言葉と、人情味のあるもので会場の人々を深く感激させました。

「今夕は、大川君がおもいがけない大病と戦い、ついにこれにうち勝たれたことをお祝いなさるために、我々をおよびになられた、めでたい晩でありまして、深くお礼申し上げます。私は大川君ご自身の次に、あなたの病氣に対する勝利を、深くひたすら大いに喜ぶものであります。

※「スマイルの自助論」  
イギリスのサムエル・スマイルズ  
の著書。明治の青年に希望を与え  
た本。

大川君の一生は、ほんとうに困難と戦った、努力の歴史でありまして、あなたの一生の記録はその一ページ、一ページが「スマイルの自助論」を作り出すのに十分なほんとうに立派なものであります。

あなたは今六十あまりの会社の首脳であり、または背後の力であり、経済界の大動脈の役目をはたしておられますが、あなたは少年時代から工場で機械をいじり、薬品の使い方にも注意し、職工の勤怠表に目を通し、まるで機械のように活動し、あちこちといそがしく走り廻られました。その結果、経済面で成功なさつたばかりでなく、わが国の製紙業を初め、数多くの事業にも誠に大きな働きをなさっておられます。

中国の学者は昔から今に至るまでの千万年について研究し、人間の幸福というものをも一つの範囲にまとめて、富・貴・寿・寧・康の五字を考え出し、これが人間の最大の幸福だと申しましたが、今、大川君は財界の重要な地位にあつてその富は人々のよく知つているところです。国家は大川君の功績を認めて貴族院議員にされました。これは貴であります。

大川君は七十六の高齢であります、なお活動力が人なみはずれて強く、積極的に物事に当たる根性は燃えたつように見えます。これは寿であります。大川君はまた悠々自適、その忙しい中に時間を作り、ゆつくりと心のままに芸術に親しみ、自分も人も互いに楽しむという余裕をもっておられますが、これは寧です。

ただこのごろの大病はさきほど、ご自分から言われたようなことですので、我々は折角重ねられたこの富・貴・寿・寧・康のうち、康の一字を欠くことを恐れて

おりましたが、これもまた奇跡的に立ち上がられて、再びここであなたの元気な姿に接することができるようになり、あなたは人間の幸福の条件をすべて満足に受けることができることになりました。

これがめでたくなくて何がめでたいのでありましょうか。

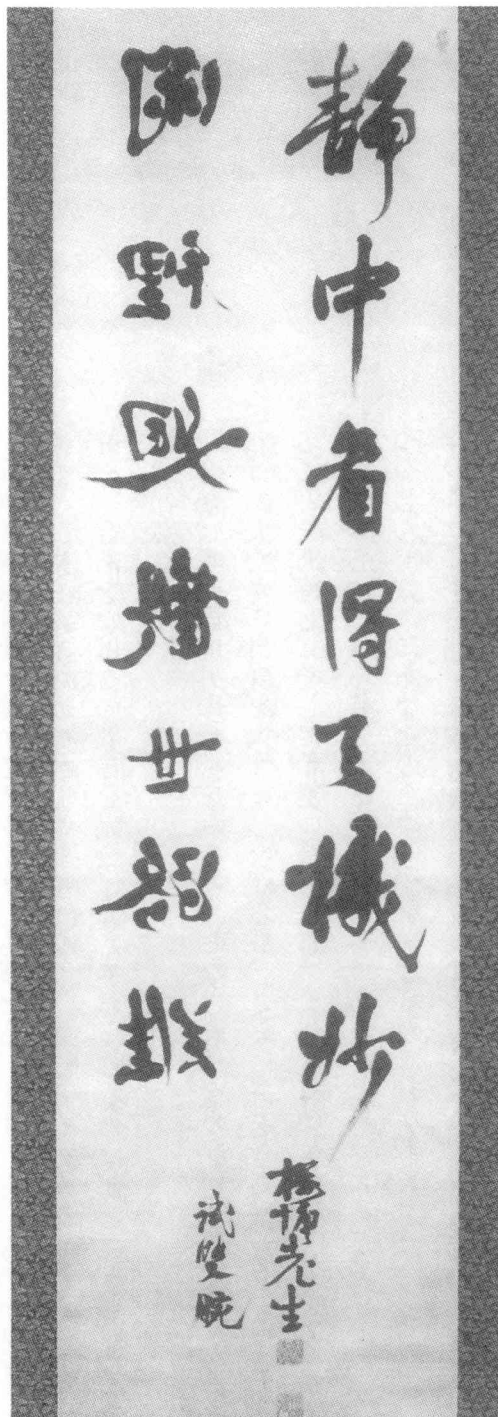
世間を見渡すと、富める人が必ずしも貴ともいえず、貴いものが必ずしも寿でもなく、寿なるものが必ずしも寧ではなく、寧なるものが必ずしも康ではありません。今あなたはこの五福を完全に備えておられるのは何という幸福な人なのでしょう。

今後、我が国内外の形勢をみると、しなければならぬ事がたくさんあります。私はあなたがご自身を大切にしながらも、さらに一そのの気力をもって活動されることを期待し、そして希望いたします。これは私ひとりだけが思うのではなく、ここにいらっしゃる皆さんも同じ気持ちであろうと思います。

つつしんでここにあなたのために杯を挙げるのであります」

このように平三郎・藤原銀次郎のやりとりが終って、会場の幕がとり払われると同時に、余興が始まりました。演劇は当時、歌舞伎座で開催中の羽左衛門・菊五郎出演のものをそのままに移したもので、世間にめったにない豪華な祝宴でした。

23 趣味の人 平三郎



「静中看得天機妙  
閑裡迴觀世路難」

明治43年頃九州製紙社長当時の書  
(1行目は右手で2行目は左手で書いた)





実業家は、たいへん忙しいので、仕事の外に興味を持つことが少ないようです。趣味が少ないと、脳がひからびて若さを失ってしまいます。若さを失うと、その事業に新鮮さがなくなり、進歩が止まってしまいます。

平三郎は規模の大きな会社に関係し、数十の会社の中心となり、日本中で一番忙しいと思われる人でありながら、いそがしさの中で、悠々として暇を楽しんでいるのは、実業家の中ではめずらしいことです。

平三郎は時には筆をふるってスケッチ画を描いたりしますが、その思いつきが不思議なほどすぐれ、人の全く考えていないところをつくことがあります。またアメリカの小説が好きで、汽船や汽車の中では、人気作家の小説に読みふけったりします。また左手で漢詩を書いたりしますが、右手で書いたのと少しも変わりありません。

しかし平三郎の最も好きなものは、日本の音曲で、歌の節を好み愛するだけでなく、歌に心をうばわれ、楽しくなれば自分から歌うのです。そして歌っている最中は、ほとんどわれをわすれた状態になるようでした。

平三郎は他人の歌うのを聞いて、音調を聞き分ける耳も敏感でした。この点において音楽の後援者として、もっともすぐれた才能を備えています。芸人を相手に歌曲の上手下手や、その歴史などを話しているのを聞くと、世の中がゆったりしていた時代に、通人といわれた人々は、このような人であろうかと思われまします。

平三郎は小唄も歌い、歌沢も歌い、都都逸も歌い、晩年には常盤津を歌い、清元を味わい、長唄を批評し、新内・義太夫に聞きほれて、やって出来ないものはない



という達人です。

平三郎はすでに七十七歳の老人でありながら、三味線にむかって座り直すと、六本から七本の高音を出し、若い者を驚かせました。

平三郎は自分から歌うだけでなく、他の人にすすめて歌わせ、これを聞いて楽しみ、批評し、コーチする風流なところがありました。それだけでなく、わずかな時間にも、ものをよく知ろうとする意欲があり、他の人の新しい歌を、これはと思うと書きとめておいたりします。その人が大家であろうと、無名の人であろうと問題にしません。そのくらいですから、古い歌も内容までよく知っていました。ある時、「鳥も通わぬ八丈島へ、やらるる此身はいとわねど、あとにのこりし妻や子が、どうしてその日を暮らすやら」という英一蝶の作った二上り新内の一節を歌ったのですが、その調子がいかに悲しく聞こえました。

平三郎はこの古い歌にまつわる悲しい物語を説明し、八丈島へ流された、一蝶の気持ちを含めて歌ったのだと言いました。

ただ一つの小唄ですが、平三郎は本当の事情を知って歌うのですから、自然に、ものさびしい調子になるのも無理はないのです。

## 24 平三郎と兄・弟そして妻

平三郎は三人兄弟のまん中です。兄は英太郎、弟は田中栄八郎といひます。

兄英太郎は大阪の日出紡織という会社の取締役社長をしていましたが、おだやかでやさしく、誠実な人でした。よく部下をかわいがりましたので、部下からも大変したわれていました。

東京へ来ると、平三郎の家で一人でおいしそうに酒を飲み、歌を口ずさんだりして、自分から楽しむような性格の人でした。

明治十年ごろ、平三郎が『アダム・スミスの経済論』という本を読み、イギリスでは紡織工業がさかんで、大きな利益をあげていることを知りました。そして、

「日本人のふだん着はすべて木綿なのに、木綿の糸をつむぐためには、昔からの糸車しかありません。イギリスでは、一台の機械が、五〇〇人の工女のはたらきをしているそうです。これからの日本で一番さかんになるのは、たぶん紡織業でしょう。私が自分でこの仕事をすれば、成功することはまちがいないのですが、私はすでに製紙業で経験をつんでいます。今これを捨てるわけにはいきません」と渋沢栄一にたのんで、兄の栄太郎を大阪紡織に入社させました。

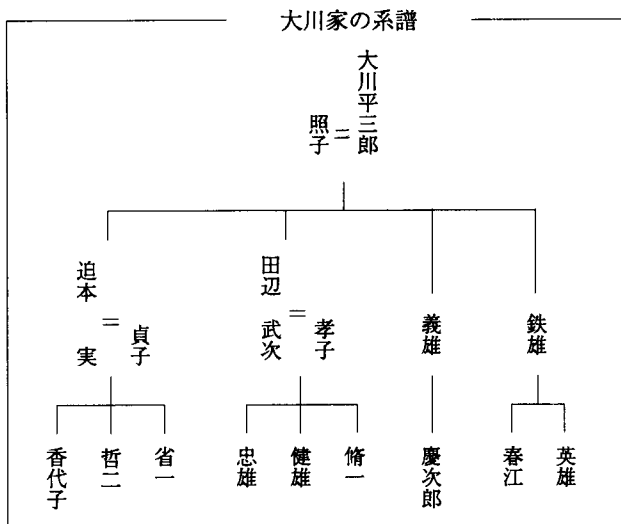
兄は見習生からはじめて、長年紡織のことを勉強し、技師から技師長になり、とうとう取締役になりました。

明治四十五年、平三郎はこの兄のために、日出紡織会社を作り、兄英太郎を専務取締役にして、自分は相談役になりました。英太郎は人がらもよく、技術もすぐれ、

兄弟思いの平三郎

しかもこの会社のためだけに力をつくしたので、たちまちのうちに社長になりました。

英太郎が大阪へ来てまもなく、悪性の重い熱病にかかりました。知らせを受けた平三郎は弟と一しょにいそいで大阪へかけつけ、うわごとばかり言っていた兄を、一ヶ月ほど看病しました。このときの平三郎のようすは、次の手紙によくあらわれています。



おちら入  
様  
おはせはせはせは

一尻様をさし柄

おはせはせはせは

おはせはせはせは

おはせはせはせは

おはせはせはせは

おはせはせはせは

おはせはせはせは

おはせはせはせは

おはせはせはせは

おはせはせはせは

おはせはせはせは

おはせはせはせは

「大川平三郎から渋沢栄一への手紙」中略

手紙

つつしんで申し上げます。そちらの皆様がたは、おそろいで、ますますごきげんよく、お暮らしになられ、おそれながら、およろこび申し上げます。

さて、私のことですが、先日の手紙で申し上げましたとおり、一日も早く帰りたいと思っているのですが、病人が、だんだんよくなってきているとはいいながら、何しろ急げきな大病ですので、かい復も思うようにはかどりません。そうはいっても、体の方は食よくありますので、毎日はずきりと快方に向かっているのですが、精神錯乱の方が、なかなかよくならず、時々気持ちが悪くて、顔が赤くなり、わけのわからないことをいったりしますので、看病するのにどうしても手がかり、困っています。そういうわけで昼も夜も少しの油断もできず、看護人も夜昼では四、五人必要ですので、私も大変困っております。しかし、今日のようにすでは、じゅうぶん全快のみこみがありますので、いろいろ心配したかいがあったと満足しています。

そういうわけで私の帰郷も、紡績会社の皆さんを、ほんとうの親友と甘えるようなわけにはいきませんので、五月三十日、四日市を出る船を待つて帰るつもりです。そのころまでには病人も、ずい分よくなると思います。

今度のことは、おもいがけないことばかりで、長々と休ませていただき、会社にも大変申しわけなく思っておりますが、前に書きましたとおりの、しかたがないようすを、あなた様から支配人がたへ、いいおりをみて、お話下さいますようお願い

中井 六郎 両會 高松

下分 子 舎 所 一 者 他 取

有 用 事 一 様 子 大 考 考

中 興 一 小 然 考 一 考 考

一 考 考 一 考 考 一 考 考

一 考 考 一 考 考 一 考 考

一 考 考 一 考 考 一 考 考

一 考 考 一 考 考 一 考 考

一 考 考 一 考 考 一 考 考

一 考 考 一 考 考 一 考 考

一 考 考 一 考 考 一 考 考

一 考 考 一 考 考 一 考 考

一 考 考 一 考 考 一 考 考

一 考 考 一 考 考 一 考 考

一 考 考 一 考 考 一 考 考

一 考 考 一 考 考 一 考 考

一 考 考

「渋沢史料館所蔵」

いたします。

中井とは時々あつて商売のことなどはじゆう分打合せをしております。

ここでは一ぱんの需要者のようすは、東京とは大変にちがうところがあります。紙

類も好みにあわせるようにしなければならぬようですが、そのへんのところは、

こちらにいる間によく聞き出して調べておきます。

こちらの商業界のありさまについて、御相談したいことがあります、近いうちに

お目にかかれる時まで待つことにいたします。

以上お話ししたいことはこのようなことです。

つつしんで申し上げます。

五月廿三日

大川 平三郎

渋澤 栄一様

閣下

(鈴木ゆい子 解説)

## 弟 栄八郎

昭和八年十一月、七十五歳で英太郎がなくなった後、弟の田中栄八郎が社長になりました。

栄八郎は英太郎とちがつて、ずっと東京に住み、平三郎と行動をとりにした人です。平三郎が王子製紙の技術方面で活躍すれば、栄八郎は王子製紙で事務をとり、平三郎が退職すれば、栄八郎もやめました。九州製紙でも、中央製紙でも、樺太工業でも、富士製紙でも、平三郎の行くところには、必ず栄八郎がかけのようによりそっていました。

最初、技術家だった平三郎が、事業を科学的、理論的に経営しようとするのに対して、情的な部分を多く持った栄八郎は、なくてはならない大切な人でした。

## 照子夫人

※明治二十三年 一八九〇年

そして、平三郎のもう一人の強力な支援者は、照子夫人でした。

照子は渋沢栄一の四女です。明治二十三年十八歳で結婚してから、長い間、いそがしい平三郎を助け、親思いの平三郎の心を自分の心として、両親に孝行しました。

そして、平三郎と一しょに工場のある所をまわり、工場の人たちをなぐさめ、家ぞくをいたわり、工場のある場所所で婦人会を作り、自分が会長になって、平三郎の部下の家族をみちびきました。

また家庭では、子ども達にそれぞれ教養を身につけさせ、毎日のできごとや家計をきちんと記録しました。複雑で大きな資産のことでも、平三郎がきけば、いつでもすぐに返事ができました。

こうして平三郎を、家庭のことで少しも心配させず、事業の方にじゅう分力をそ

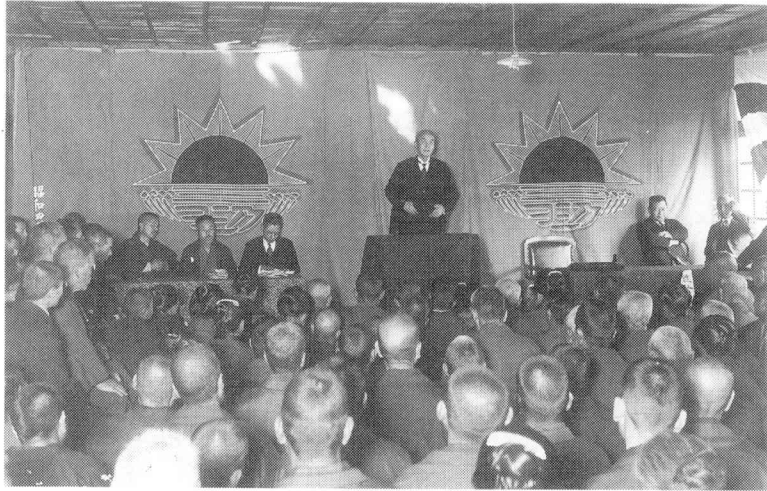
そがせたのです。

昭和二年二月二十五日、突然亡くなりましたが、照子は、

「私は今、思いのこすことは何ありません。ただ、みんなが仲良くして、家がますますさかえるようにはげんでください」と言いのことしたそうです。

この時は、さすがの大川平三郎も、しばらく目をつむって、何ごとか、照子夫人のれい前につぶやいたそうです。





昭和10年3月10日三芳野村信用購買販売組合総会にて

## 25 社会に奉仕した平三郎

国を愛する心は誰にもありますが、この気持ちを引き出し、ふるい立たせる方法は、その人の人柄や境遇によって違います。戦争が起こったとき、敵と戦って自分の国のために死ぬのは、軍人の愛国心です。日頃の信念をまげず、国の運命を危険にさらすような言動の人には、きっぱりと反対し、このために生命を失うのは政治家の愛国心です。

ではこのように、危険なときに、自分を犠牲にしなければ、愛国心は表わせないかと言うと、そうではありません。人が生きていく上で、まず教養を高め、家庭を大切にし、さらに社会に役立つように力をつくしたら、これは平常の折の愛国心です。もともと「祖国に対する愛着は父母に対する愛着を抜けたものである」という格言があるように、家庭愛と国家愛は同じ根から生まれたものですから、自分自身より一歩進めて社会に奉仕することは、また一つの愛国心の表われなのです。

平三郎はいつも「自分の郷里につくすことが、愛国心の第一の出発である」と言っています。堅実で穏やかな考え方です。そして平三郎は、たしかにこの考えを実行しているのです。

平三郎の郷里は、埼玉県入間郡三芳野村です。三芳野村は土地が他に比べて低いために、河川が氾濫すると、いつも田畑が水浸しになりました。村民の努力の結晶である農作物は、毎年のように損害をうけ、壊された家や道路の修繕にお金がかかり、村は大変な貧しさに苦しんでいました。

信用購買販売組合出来る

※三芳野村信用購買販売組合  
現在の農業協同組合

組合長になる

原次郎とコンビを組む



原次郎氏  
昭和58年9月15日  
名誉市民となる

※偉人  
りっぱな仕事をのこしたえらい人

そこで、組織の力と皆のやる気で、村を活気づけようと考えた有志が先に立って、  
\*三芳野村信用購買販売組合をつくりました。明治三十六年のことです。村の戸数は  
五百八十戸、人口は約三千人で、最初の加入者は二百七十三人でした。其の後、会  
員数は増加し、村民の生活は多少改善されたと思われましたが、大正九年全国にひ  
ろがった不景気のため、組合が大きな損をしました。大正十一年、村民の代表が平  
三郎の家を訪れ、組合再生の方法を教えてほしいとたのみました。平三郎はすぐに  
組合長を引き受けいろいろの仕事をや々と改善していったのです。其の後会員の数  
は最初の二倍ちかくなり、組合の組織はようやくしっかりしてきました。

この頃、平三郎は東京の向島（墨田区）に住み、富士製紙をはじめ、いくつもの  
会社の社長や重役をしていましたので、組合長になったからといって、いちいち三  
芳野村へ出向くことは出来ません。そこで平三郎の指図に従って実際の仕事をした  
のが専務理事の原次郎です。

原次郎は三芳野村紺屋に生まれ、早くから郷土の偉人である平三郎を尊敬してい  
ました。原の『追憶抄』によると

二十一歳の時、一人で大川邸を訪ね、はじめて平三郎に会いました。原は、水害  
と貧乏に苦しむ村の有様を訴え、助力を願いました。平三郎は熱心に原の言うこと  
を聞き、「若い者が立ち上がるなら、俺も応援しよう」と原を励ましました。

それ以来、原はますます平三郎を尊敬し、平三郎もまた若い原を深く信頼したの  
です。尊敬する平三郎とコンビを組んだ原は、自分の家の農業は家の人に任せ、組  
合の再生に取り組みました。日曜、祭日も休まず、朝早くから一日中無茶苦茶に働

## 「大川堤」を築く

(表) 大川堤遺跡

(裏) 是より以南一一五〇米の堤は極めて低く所謂霞堤で歳々洪水による被害はまことに莫大であった大川翁は深くこれを憂い大正十四年県の許可を得白力をもって新堤を築くその福祉は甚だ大きく村民この美拳に痛く感激して大川堤と命名する。今や河川の改修せらるゝに伴い廃堤となる茲に碑を建て、翁の偉業を偲び永くこれを頌せんとする

### 大川堤遺跡碑文

昭和三十六年三月  
三芳野地区河川改修期成同盟会

岩上香堂謹書

きました。専務は俸給がもらえないのですが、そんなことは気にもしませんでした。それでも、やりにくい仕事で行き詰まると平三郎に相談しました。

「誠意をもって事に当たれば、恐れることはない」と、平三郎に言われると原は「そうかな」と思い、勇気がわいたと言っています。

平三郎は、

「村民の生活をよくするためには、どうしても土地の生産力を高めなければならぬ。三芳野村の土地の生産力が低いのは水害のためだ。この水害を防ぐ工夫をしなければならぬ」と言っていました。

村は東西南を越<sup>お</sup>辺川と入間川に囲まれ、小畔川<sup>こあぜ</sup>が中を貫くように流れています。大雨で水かさが増すと、流れのゆるやかな小畔川の水は、入間川の急流に止められて土地の低い村の耕地に逆流してしまうのです。これが水害の原因です。

この小畔川は、ずっと昔にはかなりのいきおいで流れていたようですが、整備もされることなく、自然に川がS字形となつて、流れが緩やかになり、砂や泥がたまって川底を高くし、ますます流れが弱くなつてしまつたのです。

そこで平三郎は小畔川に堤防を築き、川を真直ぐにして、流れを速くすることが、何より先にやることだと考えました。しかし、貧しい村に費用を出させるべきではないと考え自分で費用を出して堤防を築いてしまいました。後に村民はこの堤を「大川堤」と呼びました。それは平三郎から受けた恩恵を、永く後の人々に伝えたいと思つたからです。

※河村瑞賢

江戸前期の伊勢の商人・土木家

其の後の小畔川は、ようやく氾濫を治めたかのように見えました。ひどい大雨にはふたたび氾濫しました。平三郎は「もう暫く辛抱しなさい。川底に沈んでいる泥は、だんだん洗い清められて底は深くなってきた。もう少し待てばもっと深くなり、泥がすっかり流されてしまえば、流れは速くなつて氾濫の恐れはなくなるだろう」と言いました。その言葉通り数年の後に小畔川は速い流れとなつて逆流の心配はなくなり、農作物は増産されるようになりました。

この平三郎の考え方は、元禄の昔、河村瑞賢が幕府の命によつて行つた淀川治水工事のやり方と同じです。それは瑞賢が淀川と中津川の水流の分かれる所で、淀川に入る水の量をふやして流れを速くし、これによつて淀川の川底に沈んでいる泥土を洗い流し、川底を深くして氾濫をふせごうとした工事です。

## 堤防と水害、原次郎について

『坂戸市の民俗—横沼の民俗』によれば横沼をはじめ三芳野地区の東部は、越辺川の流域であるとともに、南に越辺・小畔・入間の三川の合流地点をひかえているため、「カエルの小便でも水が出る」といわれるような水害地であつた。(中略)

三芳野地区の堤防は、小沼から横沼・紺屋にかけて、三芳野耕地の東側を弧を描くように築かれている。これは完全に水を遮断するものではなく、いわゆる「霞堤」であつて、耕地の部分を遊水地として利用していたものであつた。つまり、下流の紺屋の下の部分には堤防がなく、三川が増水すると、水がここから北へ逆流し、紺屋・横沼・小沼の順に耕地が水に浸かつていくようになっていた。

そのため横沼でも、戦前には年に三、四回は稲に水がかぶつたといわれている。

※遊水地

洪水時に、一時的に水を貯留する池

※昭和十六年 一九四一年  
※昭和二十二年 一九四七年

## 平三郎と原次郎

「土用水」といって、七月中旬から八月にかけては、大水による稲の冠水がたびたびあり、稲が水にとけて、収穫が激減するということが少なくなかった。米作の収穫は、毎年一反当たり三俵半以下であったという。

こうした耕地だけの浸水にとどまらず、ときには横沼をはじめ三芳野の各集落の家々に浸水することもあった。現在、伝えられるもので大きなものとしては、明治四十三年・大正二年・昭和十六年・昭和二十二年の大水がある。いずれも登戸の家々の多くが床上・床下浸水している。（後略）

原次郎は、明治四十三年の水害のとき、十五歳でした。

「私の一生の大半は治水との戦いであつた」という原が治水に取り組む決心をしたのがこのころでした。

原は治水について平三郎の意見を聞きました。平三郎は、

「堤防を築き、川の流れを改修することも大切だろうが、それはほんの小さなことだ。第一堤防一つつくるにしても、こちらだけの利害を考えていたのでは、対岸の人たちがいうことを聞かないだろう。物事は根本からやらなければ効果はないものだ。まず水源の秩父にダムをつくって水を管理することだ」と言いました。

「なんと夢のようなことをいう人だろう」と原は思いました。平三郎の発想は規模が大きすぎて、原にはぴんとこなかったのです。しかし、治水と取り組むうち、

「私もそう思うようになった」と言っています。後に二瀬ダムが出来て改めて平三郎の偉大さを思い知ったとも言っています。

原は水害のみじめさを何回も平三郎に訴えました。平三郎は聞くのもつらく、



「堤防を視察する大川平三郎氏 左後 原 次郎氏」

「わしが金を出してやるから中くらいの水害が防げるような堤防をつくれ」と言ってくれました。

「うれしかった」と原は言っています。早速県へ工事の許可願を出しました。ところが何度県庁へ出掛けていっても許可がでないのです。平三郎もしびれをきらし、原を叱りとばす始末でした。

「税金を払っているのに自分の耕地が遊水地にされて黙っているって法があるか。とんでもないことだ。しかも堤防を作るのに自費でやろうというんだ。誰はばかることがある。県の許可が出ないなんて、そんな馬鹿なことがあるか」とかんかんです。

「蓆旗でもなんでもおっ立てて、県庁へ押しかけろ、水が出てからでは遅いんだ」とも言いました。

しかし原は根気よく県庁へ許可をもらいに通いました。

そして、ようやく農村救済土木事業として請願が許可されました。

後に平三郎は、「こんどは原君に完全に負けたね。いつか君にあやまらなければと思っていた。君は戦わずして勝ったんだ。私は蓆旗でも立てて県へ押しかけろ、と言ったが、力で勝とうとしてもだめなときがあるもんだ。君の方が偉い」と原をほめたそうです。こうして築かれた堤が大川堤です。この堤が出来たことによつて、水害は防げるようになりましたが、まだ完全とは言えない状態でした。

平三郎が亡くなって後も原はさらに努力を続けました。そして昭和十七年<sup>\*</sup>に入間川水系は国が直接管轄する川となり、国の予算で改修工事が行われ、りっぱな堤防

## 副業をすすめる

が、出来ました。

平三郎はまた、農家の副業について深く研究して、夜間に筵を織ったり、縄をなったりすることをすすめました。その奨励に必要な賞与金を、平三郎が出し、製品は平三郎の関係する会社買い取らせるようにしました。そのお蔭で三芳野村とその付近の村は、筵と縄の産地として特に名を知られるようになりました。

こうして、貧しい村といわれた三芳野村の経済状態は、驚くほど良くなり、有名な貧村は付近の村々の模範的な村となりました。これはもちろん村民中の有志が先頭に立って指導した結果ですが、平三郎の力が大きく働いたことは言うまでもありません。

※家長 一家の主人

平三郎が、郷里のために尽くしたことは、今までに述べた通りですが、村を自分の家と思うような気持ちでしたから、村人もまた平三郎を自分たちの家長のように思いました。昭和十一年三月、平三郎が組合の総会に出席したときは、村人や小学校の児童が大勢で、旗を立てて出迎えました。総会がすむと、平三郎は四百人をこす村の人たちにやさしく話かけ、農家のくらしに大切ないろいろのことを語りました。村の人たちも、よろこんで話に聞き入り、なごやかなひとときを過ごしました。

この会は小学校の一室で行われましたので、会が終って帰る人々は、校庭の一隅に建てられた、大きな平三郎の彰功碑を見上げたりして、とても名残惜しそうでした。その様子は、平三郎のみちびきが村人たちの中に、十分にしみ通っていること

## 三芳野小学校建築費を寄付する

を物語るものでした。

この頃各地の小学校は児童の数がふえ、教室がせまくなってきました。そのためにあちこちの町や村で教育費の増加が問題となっていました。三芳野小学校も児童が多くなり、その上校舎が古くなってこわれかけてきたので建てかえなければならなくなりました。しかし、大へんお金がかかるので、村の人達は困ってしまい、これも平三郎に相談しました。平三郎は一生懸命働き節約をすすめる意味で「半分を村民が出すなら、半分は私が出そう」と言って、建築費や設備費を寄付してくれました。

## 大川育英会設立

※大正十三年 一九二四年

三芳野村は大川家の祖先が眠る所です。成功者として名をあげた平三郎は、故郷を思い父母を懐かしむ心持ちをひろげて、三芳野村のために精神的にも物質的にも援助を重ねてきましたが、さらにこの心を埼玉県全体にひろげようと思い、大正十三年埼玉県出身の学生のために、五十万円を提供して大川育英会を設置しました。

平三郎は家が貧しかった子どものころ、松山町に住んでいました。松山から母の生家のある手計村へ行く途中、熊谷の町外れの茶店で休んだことがありました。平三郎は実業家として成功した後、熊谷へ行きましたが、そのときそのころの事を思い出おこし、記念として何かを計画しようと考えました。これが大川育英会の出来たきっかけです。このことについて、武州銀行の副頭取であり、大川育英会の常務理事である永田甚之助が大川育英会会報に載せた記事を引用します。

「私が大川理事長より埼玉県下に何か社会事業を起こしたいと御相談を受けたのは、大正十年冬でありました。当時武州銀行が、熊谷町にある熊谷銀行を合併す



ることとなり、私は大川社長に随行して熊谷にまゐりたる節、大川理事長より、自分は郷里埼玉県下に高等工業學校でも起こして見たいと思うが如何、他により良い計画は無いかとの御話でありました。

此の時理事長の御話には、實は自分は幼少にして郷里を出て、澁澤氏の門に入り、事業家となり、九州に、名古屋地方に、或いは北海道に、樺太に、朝鮮満洲に幾多の事業を起こして、今日の位置を得たれども、常に東奔西走の多忙に紛れ、郷里を訪ねるの閑ひま無く、今日迄経過し、今此の郷里の風物山川に接し、轉うつた感慨に堪へぬものがあるとの御話で御座いました。其の後時々御話がありましたが大震災でゴタゴタして居り、大震災の翌年大正十三年秋、帝国ホテルに、澁澤子爵の門下生を以て組織せらる、龍門社と言う會の總會がありました節、理事長より自分は金五十萬圓を寄附して、郷里のために育英會を組織したいとの御話でありました。小生は誠に結構なる御企くわたくなりと御賛成をして、善は急げと、早速文部省へ参り、學友の現文部次官粟屋氏、當時専門學務局長をして居られました同君に御話して、全國有数の育英會の定款を見せて貰ひ、種々考案協議を重ねて出来ましたのが、現在の大川育英会で御座います」

こうして、いろいろの手續きをすませて、大正十四年二月十八日に財団法人大川育英會が成立しましたが、其の組織は左の通りです。

顧問 澁澤榮一

埼玉縣知事 齋藤守國

理事長 大川平三郎

常務理事 永田 甚之助  
理事 田中 榮八郎  
同 柴田 愛藏  
同 武藤 忠義

このうち永田常務理事は主として経済方面を監督し、武藤理事は費用をかりる学生の教養面を担当し、毎月一回永田、武藤、柴田の三理事で理事会を開いて打合せをし、重大なものは平三郎の決済を受けて実行しました。この他に県庁の役人、地方の有志等十数人の評議員がいて、その中の松本真平、田中四一郎の二人に監事を依頼しています。

こうして育英会は大正十四年から、事業を始めましたが、既に三百四、五十人の学生を受け入れて、このうち卒業した者は二百人に達しています。平三郎の最初の考えは、学費をあたえる方針で、四、五年間実施しましたが、その結果、学生に頼心ばかり起こり、真面目に努力する気持ちを失わせる心配があるので貸費<sup>\*</sup>制度に変更しました。卒業して就職した者は、その収入の中から貸費月額<sup>\*</sup>の五分の一以上宛返すことにしました。

しかし特に成績がよく、人格も優れた人には、特待生として、次の年の学費を返さなくてよい事になっています。こういう学生が毎年五、六人はいるのです。そして、学生に対しては毎年一、二回大会を開き、ためになる話をしたり、うちとけて話し合ったりしています。

卒業の時は平三郎が自分の家に招待して、社会に出てからの心構えを注意したり、

※貸費制度  
費用を貸しあたるきまり

※孝悌忠恕

父母に孝行で兄弟なかよく正直で  
おもいやりがあること

また一年に一回会報を発行して、たがいの研究や消息を載せ、ていねいな指導に力をつくしています。大変な熱心さで平三郎の理想とする、「国を愛し、※こうていちゅうじよ孝悌忠恕、勤勉努力の精神をおこさせること」につとめてきました。このために埼玉県下の貧しい学生にも勉学の道が開け、もって生まれた才能を発揮する方法を身につけた人がすくなくないのです。

そして今までは工業や実務に従事する希望者だけを援助しましたが、今後は其のうち数名を工業、実務以外から選び、その人たちを大川育英会出身者の団体のリーダーにしようと言うことになっています。今や評議員の中には、「埼玉県の学生に限られている援助を拡げ、充実させて、日本中の学生を対象にしたらどうか」という意見の人がいるほどです。

大川育英会の力によって学問をし、目的を達して卒業し、一定の職業についた人達が集まって組織した団体を桜影会といます。これは平三郎の雅号が『桜塘』といいますが、このことから桜の影に住むという意味をあらわしたものです。

桜影会は平三郎を名誉会長に、田中榮八郎を顧問に、永田甚之助、大川鉄雄、大川義雄、田幡鉄太郎を特別会員とし、百三十九人の会員によって組織されていますが、会員の就職先は銀行・会社・諸官庁・官私立の学校に及び、地域は台湾・中国にまでひろがっています。育英会が教育社会において、うっそうと茂る大森林のような勢力となつて、その時代の人々を驚かせる時が来るのも遠いことではないでしょう。

其の後、大川育英会の事業は桜影会に引き継がれ、今も続けられております。

## 26 平三郎の事業をふりかえつて

平三郎は企業家であると共に、技術家であり、その精神はすべて事業に注ぎこまれたので、事業のために生まれた人であるとも言えます。その眼は、いつも事業を発見することのために動くと同時に、他人もまた新事業を計画して、平三郎のところへ相談に来るので、これを批評し又は忠告をし、或いはこれに参加するので、家には企業家が大勢集まり、机の上には計画書が高く積まれるほどでした。

その結果は、全く平三郎が興味を持たないものにまで、引き入れられることがありました。日本映画劇場会社に関係し、創立委員長に祭り上げられたのも、その一つの例です。

この会社は、社長と重役がきまり、創立されて間もなく、金解禁きんかいきんによる不景気のため、株金を払い込まない人が多く出て、劇場の建築工事が、続けられなくなりました。そのために数寄屋橋のそばに、工事途中の怪物屋敷のようなものがそびえ立ち、長い間そのままにされていました。平三郎はこのだらしなさにひどく腹をたて、私財を出して工事を完成させ、別に自分の持株の半分近くを減資げんしとして提供し、なるべく最後の株主の損失を少なくすることを考え、後に日本映画劇場会社を東宝劇場に合併させて、今は立派な大劇場となりました。

右のように平三郎の事業は、さまざまな方面にわたりますが、関係の年次ねんじについ

日本映画劇場会社を建てる

※減資

企業の資本金をへらして経営の規模を小さくする

事業こそ命であった一生

て表を作れば、左のようなものです。この表を見れば、平三郎関係事業のすべての様子を知ることが出来ると共に、平三郎が国の産業を盛んにするため、どれほど力をつくしたか、またその一生は、事業こそ命であったということがよくわかります。

# 大川平三郎年譜

西暦	年号	年齢	事項	関係企業	西暦	年号	年齢	事項	関係企業
一八六〇	万延元年		10月 川越藩三芳野村(現・坂戸市横沼)で生まれる		一八九八	明治31年	39	この頃、上海に渡る	5、東洋硝子取締役
一八六三	文久3年	4	両親と共に群馬県前橋に移る(のち、松山町へ現・東松山市へ移る)		一九〇一		34	上海より帰国。初めて独立して事業を営む	6、上海華造紙公司総監督
一八七一	明治4年	12	祖父平兵衛死去。享年70歳		一九〇三		36	母みち子死去	7、九州製紙社長
一八七二		13	渋沢栄一家の養生となる。かたわら、壬申義塾で学び、のち大学南校(東京大学の前身)に通う		一九〇四		37		8、日本鹽酸取締役
一八七五		16	抄紙会社(のちの王子製紙)の図引工となり、次いで職工となる	1、王子製紙入社	一九〇六		39		9、中央製紙社長
一八七七		18	抄紙方長となる		一九〇七		40		10、磐城探炭取締役
一八七九		20	7月 製紙業研究のため、渡米する		一九〇八		41		11、木曾興業会長
一八八〇		21	帰国。糊剤及び抄紙法を改良する。副支配人に就任する		一九〇九	大正元年	42		12、東洋汽船取締役
一八八一		22	吸気器発明により黄金百円を受ける。稲わらパルプの大量生産に成功する	2、浅野セメント共同出資	一九一〇		43		13、中之島製紙社長
一八八二		23	5月 欧米製紙術研究のため、渡欧する		一九一〇		44		14、日出紡織相談役
一八八四		25	帰国。木材パルプ術を伝える		一九一〇		44		15、日本鋼管取締役
一八八五		26	山林視察。工場選定のため、静岡県の山奥に出張する		一九一〇		44		16、大日本麦酒監査役
一八八七		28	日本最初の木材による科学パルプ(亜硫酸パルプ)の製造に成功する		一九一〇		44		17、樺太工業社長
一八八九		30	渋沢家の四女照子と結婚する		一九一〇		44		18、東京清堀立専務取締役
一八九〇		31	王子製紙専務取締役に就任する		一九一〇		44		19、仁寿生命保険取締役
一八九三		34	中部工場用の機械購入と製紙業視察のため、渡米する	3、札幌ビール監査役	一九一〇		44		20、浅野スレート副社長
一八九四		35			一九一〇		44		21、城東電気軌道取締役
一八九六		37			一九一〇		44		22、京都殖産相談役
一八九八		39	王子製紙を去る	4、四日市製紙専務取締役	一九一〇		44		23、東京金網相談役
					一九一〇		44		24、北海道興業社長
					一九一〇		44		25、八代製紙社長
					一九一〇		44		26、大日本自転車取締役
					一九一〇		44		27、東海鋼業社長
					一九一〇		44		28、日本コンクリート工業取締役
					一九一〇		44		29、日本加工製紙取締役
					一九一〇		44		30、大阪ホテル取締役
					一九一〇		44		31、緑川電力社長

西暦	年号	年齢	事項	関係企業	西暦	年号	年齢	事項	関係企業	
一九二七	大正6年	58		32 大島製鋼所社長 33 服部製作所取締役 34 樺太汽船社長 35 日本フルト取締役 36 東洋興業取締役 37 東京板紙取締役 38 富士製紙社長 39 帝国人造肥料取締役 40 鳴緑江製紙社長 41 上毛製紙社長 42 大日本電力取締役 43 武州銀行頭取 44 武州貯蓄銀行頭取 45 連合紙器取締役 46 朝鮮森林鉄道社長 47 静岡電力社長 48 東京地下鉄道取締役 49 京浜運河取締役 50 熊本電気鉄道社長 51 石綿スレート取締役 52 大栄商会取締役 53 熊本電気取締役 54 東武鉄道取締役 55 共同パルプ取締役 56 静岡電気鉄道社長 57 朝鮮鉄道取締役 58 樺太鉄道取締役 59 伏木板紙顧問 60 浅野スレート取締役	32 大島製鋼所社長 33 服部製作所取締役 34 樺太汽船社長 35 日本フルト取締役 36 東洋興業取締役 37 東京板紙取締役 38 富士製紙社長 39 帝国人造肥料取締役 40 鳴緑江製紙社長 41 上毛製紙社長 42 大日本電力取締役 43 武州銀行頭取 44 武州貯蓄銀行頭取 45 連合紙器取締役 46 朝鮮森林鉄道社長 47 静岡電力社長 48 東京地下鉄道取締役 49 京浜運河取締役 50 熊本電気鉄道社長 51 石綿スレート取締役 52 大栄商会取締役 53 熊本電気取締役 54 東武鉄道取締役 55 共同パルプ取締役 56 静岡電気鉄道社長 57 朝鮮鉄道取締役 58 樺太鉄道取締役 59 伏木板紙顧問 60 浅野スレート取締役	一九二四	大正13年	65	の副業を奨励する (奨励金として三百円を寄付)	61 石川島飛行機製作所取締役 62 鹿兒島電気取締役 63 大同洋紙店取締役 64 鶴見臨港鉄道取締役 65 金指鉄路公司取締役 66 上毛電力社長 67 上毛電気鉄道社長 68 日本ヒューム管取締役 69 朝鮮土地改良取締役 70 武州瓦斯取締役 71 船川水電取締役 72 北電興業取締役 73 日本航空輸送取締役 74 伊香保ケーブル鉄道取締役
一九二八		59	紺授褒章を受ける		一九二五	14	66	大川青英会を創立する。三芳野村信用購買販光組合で講演する。私財を投じ、越辺川に堤防を築く		
一九一九		60			昭和元年		67			
一九二〇		61			一九二七	2	68	照子婦人死去。享年55歳。資源審議会委員に就任する		
一九二二		62			一九二八	3	69	貴族院議員に勅選される。三芳野村の小学校増・新築、校庭拡張等のため、総工費の2分の1を出資する		
一九二二		62			一九二九	4	70	勲三等に叙せられる。瑞宝章を受ける。貴族院議員として金解禁反対論を述べ、大病にかかる		
一九二二		63	緑授褒章を受ける。三芳野村信用購買販光組合(現・農協の前身)理事長となる。組合の融資を受ける村民に対し、催促なし返金・運動を提唱する		一九三三	8	74	旭日中授章を受ける	三大製紙会社合併 75 台湾紙業取締役 76 上毛森林土地社長 77 東満洲人絹パルプ社長 78 寿土地相取締役 79 台湾興業会長 80 鉄鋼証券社長 81 台湾証券社長	
一九二二		64	大震災善後会委員に就任する		一九三三	11	77	12月30日死去。享年77歳		
一九二四		65	貧乏追放のため、三芳野村村長にむしろ織り		一九三六					

## 編集後記

坂戸市に深いかかわりのある大川平三郎の名前は誰もが知っています。けれども、平三郎の人物像や功績をくわしく知る人は、案外少ないのが現実です。

この度、坂戸市立中央図書館の文章教室で学ぶ私達が、昭和十一年に王子製紙の竹越與三郎氏によって書かれた「大川平三郎君伝」をもとに、現代の言葉で読み易く、平三郎の生涯をまとめるという作業にとりくみました。

内容の豊富な平三郎のすべてということもあって、むつかしい記述が多く、読み易くという目的に、どの程度近づけたか疑問ですが、この本がたくさんの人の目にとまり、一人でも多くの方が平三郎の人生に関心を持っていただけたらうれしいと思います。



【実践文書教室】

○ 菅 クミ  
○ 永井 ケイ子  
○ 見山 よし子  
○ 富田 富子  
◎ 鈴木 ゆい子  
○ 矢沢 トリ  
○ 荒井 敏子

◎ 山崎 美保子  
○ 鈴木 ひろ  
○ 小林 京子  
○ 吉野 延子  
○ 岩武 洋子  
○ 徳永 百代

○ ◎ …… 編集委員長  
編集委員

【大川平三郎を広める会】

荒井 敏子  
内田 芳子  
清水 恵子  
長瀬 ツヤ子  
湯澤 幸子

青山 節子  
木田 啓子  
田端 由紀  
宮崎 悦子  
渡辺 絹子

改訂版編集

郷土の人 大川平三郎

発行 平成6年3月 第1版  
平成22年11月 第2版

編著者 坂戸市立図書館

発行所 坂戸市立図書館

埼玉県坂戸市仲町1番23号

電話 049-281-6369

FAX 049-284-8588

印刷所 有限会社 鈴木印刷